



第四・五・六章
 内科学消化器科
 胃・腸・肝

① シンクレッツ氏病ノ症候診察及治療
 ② シンクレッツ氏病ノ症候診察及治療
 ③ シンクレッツ氏病ノ症候診察及治療
 ④ 胃下無症候候療法

特別
 イ 4
 3159
 B39 (3)



14
3159
839(3)

第四章

胃疾患目次

- (一) 急性胃加吞兒
 - (甲) 單純急性
 - (乙) 傳染性
 - (丙) 蜂窠織炎性
 - (丁) 中毒性
- (二) 慢性胃加吞兒
- (三) 胃ア卜二
- (四) 胃擴張
- (五) 胃潰瘍
- (六) 胃癌
- (七) 胃下垂症

第五章

腸之疾患目次

- (一) 急性腸加吞兒
 - (二) 慢性腸加吞兒
 - (三) 盲腸炎 虫樣突起炎
 - (四) 腸潰瘍 (甲消化性。乙結核性)
 - (五) 下痢
 - (六) 便秘
 - (七) 腸寄生虫病
- 甲 原生動物
- 乙 滴虫
- 丙 條虫類
- (一) 有鉤條虫

- (八) 神經性胃疾患
- 甲 胃痙攣
- 乙 神經性嘔吐
- 丙 鹽酸過多症
- 丁 鹽酸減少症
- 戊 神經性消化不良

第六章

肝及胆道ノ疾患目次

- 第一 鬱血肝
- 第二 肝充血
- 第三 肝膿瘍
- 第四 肝硬化
- 第五 肥大性肝硬変
- 第六 バン干氏病
- 第七 急性黄色肝萎縮
- 第八 肝蠱毒
- 第九 脂肪肝
- 第十 粉質肝
- 第十一 肝癌腫

- (一) 蛔虫
- (二) 十二指腸虫
- (三) 蟻虫
- (四) 鞭虫
- 戊 園虫類
- 丁 リングラ裂頭條虫
- (一) 無鉤條虫
- (二) 那ニ條虫
- (三) 狗兒條虫
- (四) 裂頭條虫

- 第土 肝包莖腫
- 第土 黃疸 (器械的及加吞兎性)
- 第土 口イル氏病
- 第土 胆石病

腹膜ノ疾病目次

- 第一 腹水
- 第二 腹膜炎
- 漫性腹膜炎 (結核性)

ミソリツ升氏病 (口腔疾患)

本症、稀有之疾患ニシテ、唾液腺、舌下腺、顎下腺、舌下腺、及涎腺等ノ慢性腫脹ヲ来シ、全身血行ニ陥リ、結核ヲ迷費ス

△療法ハ對症的ニシテ、芝涼療法ヨリ各腺ノ縮小ヲ図ヘシ、其他沃度、砒石等ヲ用ヒ、莖腫脹タル腺ヲ剔出スルヲアリ



第四 食道總室

食道ノ局部膨出セルヲ特ニ總室ト云フ

其原因ノ食道壁ノ内方ヨリ外方ニ向ヒテ生迫セラル
為ナルキ之ヲ脱出性食道總室ト云ヒ

外方ヨリ牽引セラルル為ナルキ之ヲ牽引性食
道總室ト云フ

○甲) 脱出性食道總室 稀有ニ疾病ニシテ咽頭
ノ食道ニ移行スル部位ニ發ス

△原因 胃子ニ及シ殊ニ高年ニ多シ 食道ノ局
部ノ抵抗力微弱ナルキハ食道總室ノ發ル
遺物、其筋纖維ヲ掛合ニ遂ニ其部分ヲ脱出セ
ルニ至ル

○ 食道總室

△**診断** 消息子ヲ挿入スルニ或時ハ容易ニ胃中ニ達シ或時ハ其挿入甚困難ナリ

○**牽引性食道憩室** 多クハ氣管ハ右岐部ニ及ニ通常疝候ヲ呈セバト氣管ニ穿孔シテ加害見性肺炎、肺膿瘍、肺壞疽等ヲ及ルルトアルヲ以テ生命ニ危険アリ

食道憩室 (其種類ヲ多ク見)

△**原因及解剖的变化** 食道憩室トハ食道壁ニ於テ局限性膨出ヲ謂フニテ之ヲ二種ニ區別ス

甲) **膨出性食道憩室** 稀有ノ疾患ニシテ内方ヨリ

食道粘膜ニ作用スル壓カヨリ外方ニ膨出スルニ由リテ起リ其壁ハ粘膜及粘膜下組織ヨリ形成セラル而シテ食

道内ノ異物及外傷等ヨリ生ズルガ多ク男ニシテ侵シ

多ク食意ハ始端部ハ其壁ニ若シテ故ニ大ナル囊状ノ憩室ニアルヲ食意ト脊柱前壁ト向ニ箱頭ス

乙) **牽引性食道憩室** 比較的頻發ノ疾患ニシ

テ食意ノ周囲ニ於テハ牽引性核殊ニ氣管枝腺ノ萎縮ノ為メ食意壁ノ外方ニ牽引セラルルニ

其數多ク必ラ侵ル而シテ其後ハ分岐部候
其數ニ及ビ三ナリト

症候 膨出性食多結室其初期ニ於テ殆
トノ危候ラモモセサモ漸次嘔下困難ヲ来シ
飲食物一部ハ結室内ニ残留シ直ニ或ハ一定
時ハ再ニ吐逆タリ而テ残留スル物ハ亦或
ニ殆クニ悉ク放テ區氣ヲ催サシム又結室ノ
為メ分岐部迫セシムル途ニ分岐部狹窄ノ症候
ヲ呈シ患者ハ漸次羸瘦シ殆クハ分岐部ノ梗塞
法ヲ行ニ或時ハ結室内ニ貯ルル物ハ亦或時ハ容易ニ
胃中ニ到達ス結室大ニ成ルルハ分岐部ニ腫瘍
ヲ現ルルモ或ハ隣接セル例之ハ接隣腺腫

經及迴腸腫子ノ压迫ニ由リテ生ラレテ
率々性急ニ結室ハ多クノ場合ニ於テ殆クト
臨床的價値ヲ有セテモ其後ニ於テ穿孔ヲ生シ
テ即チ氣變ニ宗乳ニテ肺壞症ヲ喚起シ肋
膈ニ穿通シテ化膿性肋膈ヲ惹キ其他心囊
或ハ大血管内ニ穿孔スルコトアリ

豫后 不詳

療法 膨出性結室ニ於テハ分岐部
手術ヲ施スルニ及ビテハ手術後ハ復發
更ニヨリ人エテ患者ノ生存率ニ甚シク
影響ヲ施スルハ故ニ分岐部ニ於テハ
或ハ胃膈ヲ込メテ分岐部ニ及ビテ

格段ノ症候ヲ要セザレバ
胃ノ病ハ格段ノ症候ニ由リ
格段ノ症候ハ格段ノ症候ニ由リ

○第四章 胃ノ疾病

第一 急性胃加吞兒

本症ヲ左ノ四種ニ區別ス

甲 單純急性胃加吞兒

△原因 暴食又ハ腐敗シタル肉類未熟ノ果實ノ如キ
不良ノ食物ノ攝取等ノ食事ノ不攝生ニ由リテ起ル
又急速ノ食事由リテ起ルアリ或ハ一定ノ食物ヲ取
ル必ス本症ヲ及スル特ニ素素質者アリ

△冷熱過度ノ飲食物(例之バ盛夏ニ氷水ヲ飲ミ
冬ニ酒類藥物ノ刺戟由リテ本症ヲ起スルコトアリ)

△症候 主徴ハ食思缺損ニシテ惡心嘔吐アリ舌苔
ラ帶食味不取ニシテ糊ヲ啞ルル如キ感アリ鮮濕性

○急性胃加吞兒

急性性胃加症

々多々上昇其頭痛眩暈倦怠等ノニ症状アリ尿
ハ減量シテ暗褐色ヲ呈シ尿酸塩ニ富ム時トシテハ口
唇ニ血行疹ヲ見ル胃ハ運動後慢トナリ其遊
離塩酸缺如ス

経過 數日

診断 熱性胃加症見ハテ腸管扶助ト鑑別

診断ヲ要スルコトアリ

凡テ胃病アリテ熱シクシテ其熱ノ原因ヲ胃加症
見以外ニ索ムルニ要ス是多クノ熱性疾患ハ急性胃
加症見ノ症候ヲ呈スルモノナリ

豫后 良

療法 食物ノ攝生ニ注意セム刺戟物ノ高胃ニ存

スル牛ニ胃ヲ洗滌シ既ニ腸ニ達スル牛ニ下劑ヲ與フ
特殊ノ場合ノ外ハ藥劑ヲ用ヒテ單ニ二三日間
絶食セシムベシ

腹部ニ温罨法ヲ行フ胃痛又ハ嘔吐ニハ麻酔劑ヲ
與フ胃液ノ塩酸缺如ニハ塩酸リモノヂヲ與フ渴
スルニ炭酸水ヲ與フ

乙 傳染性胃加症見

原因 不良ノ飲用水又ハ腐敗セル食物ニ由リテ
發スルモノニ一種ノ傳染性病毒ヲ有ス

症候及診断 單純急性性胃加症見ニ酷似スレド之
ヨリモ熱一般症候並ニ神經症状若シ強シ往々本病
ト腸管扶助ト鑑別診斷ヲ要スルコトアリ

△療法 甘藷ヲ用フ心臓衰弱ヲ防グ為ニ酒類ヲ可ク

丙 蜂窩織炎性胃炎

本症ハ蔓延性化膿性胃炎ニ及胃膿瘍ニ區別ス

△原因及解剖 主トシテ六〇扶斯ニ在リ疳疔等ニ発シ炎症ハ粘膜炎ヲ侵サズニテ粘膜炎下組織及筋肉ヲ侵ス

△症候及診断 急劇ナル胃炎ニシテ高度ノ脱力並ニ熱度アリ次ニ腹膜炎ノ症候ヲ現シ心窩ノ劇痛嘔吐ヲ發シ体温上昇シテ其他張著ク舌苔アリ濁リ許ス脈搏細小ナリ

△胃膿瘍ハ局部ノ劇痛ヲ起シ且膿汁ヲ吐出ス

△診断 ハ確實ナラスノ唯想像ニ過キ大量ノ膿ヲ

吐出シタル後ニ心窩ノ腫物消失スルハ其診断稍ニ確實ナレモ尚胃外ノ膿瘍ノ胃腔ニ穿孔シタルモノト區別シ難シ

△療法 胃部ニ氷嚢ヲ貼シ氷片ヲ嚙下セシメ疼痛ニハ麻酔劑ヲ與ヘ虚脱ニ興テ馬劑ヲ與フ

丁 中毒性胃炎

△原因 酸アリカリアルカリトアルカリ昇ル毒及臭氣ノ中毒

△症候 腸胃加唇變ハ症状ヲ發シ食道及胃部ニ疼痛アリ嘔吐呼吸困難胸内苦悶及失神等ヲ見ス

△療法 毒物ノ反對薬ヲ與フニ即チ新葦炭類

○慢性胃口炎

(消化器)カスル

中毒に直リカリシ共テ中和ス此際酸ニ極用セ
えハ酸性ナリネシテ其五〇シキ盛ニ氷冷
乳ニ混和シ十分時毎ニ能ク振盪シテ之ニ食匙宛
共フ急ク要スルヤ細碎セル白堊又ハ壁土ヲ應用
スシアルカリ中毒ハ酸類稀薄セル所ヲ中和ス
又アルカライド等ノ中毒ニハ胃洗滌ヲ行フ

第二 慢性胃加吞兒

原因 暴飲暴食、食事時刻不正、食物咀嚼
不全等ハ本病ヲ誘起ス
氷ノ飲用ト急速ナル食事ハ所謂未人消化不良
症ノニ大原因ナリトシテ(アインホレン氏)飲酒、喫煙
口腔ノ不潔並ニ口腔ノ疾病(例之ハ齦炎等)亦

病ヲ誘起ス

心肺ノ疾病ノ為ニ慢性胃加吞兒ヲ發シ貧血、萎黄
病、癌腫、徵毒等モ又之ヲ發ス胃潰瘍、胃
癌等ノ他ノ胃症ニモ屢々本病ヲ併發ス

大人ニ多ク田子ニ多ク坐業ニ従事スル者ハ之ニ罹リ易
シ往々本病ニ罹リ易キ原因即チ胃弱ヲ有スルニ
ナリ

解剖 粘膜炎、腫脹ニテ稠厚ナリ粘液ヲ被リ帯濁

赤色又灰白赤色ヲ呈シ著ク充血ス粘膜炎厚
シ或ハ萎縮マシ部ハ強ク多ク侵サレ

症候 急性症ノ如ク顯著ナラス良然多ク減
損シ屢々刺戟性食物ヲ食ハシ後ニ圧重、膨

瀉感アリ、悪心、嘔氣、流涎、嘔吐ラ後ス、酒客ノ
本病ニ惟レル者ハ屢々早晨ニ嘔吐ラ後ス、(酒客早
晨嘔吐)其吐物ハ主ニ嘔下シタル唾液ナリ便或ハ
秘結シ或ハ下痢ス

他覚的症候 胃部ヲ圧スルニ多少疼痛アリ、
食後胃部膨滿ス舌苔アリ、胃液中ハ塩酸ハカシ
及シ、ブラスエルニ下減少ス、胃ノ運動モ又大減退
ストシテ

粘液性胃加着見ニ於テ、胃液殊ニ粘液ニ富ミ、食
物ハ粘液ノ為ニ包圍セシ、胃内内容物ナルカリ性反応
ヲ呈スルコトアリ

萎縮性胃加着見ニ於テ、劇痛アリ、胃内内容ヲ

検査スルニ食物ノ消化セサルコト恰モ水中ニ放置セ
タルニテ夫々ヲ攝取シタル牛乳ハ凝固セズ、塩酸及
ヨカリニ流布ス

患者神經質トナリ、ヒステリックニ陥リ、鬱
憂ニ沈ミ、身体ノ栄養衰大ニ衰テ

経過 數月若クハ數年

診断 一粘液ハ必ク亢進 二塩酸ヲグブスニシ

トシ、パニンニ減少 三胃ノ運動弛緩 (ロイヒ氏)

等ノ主徴ヲ認ムル其診斷困難ナラシキ本病ノ
胃潰瘍、胃癌等ハ他由疾患ニ併發スル
及性、本病ノ為ニ胃擴張ヲ来スルコトアルニハカ
ズ故ニ消化不良ヲ伴ハシ他ノ慢性胃病ノ存スル

「ヲ認メタル後ニテハ本病ノ診断ヲ下シ難シク本
病ヲ診断スルハ其原因ヲ索ルヲ要ス

豫後 胃液及胃酸素ノ減少(萎縮性胃加層見)
ハ豫後不良ナリ本病ノ豫後ヲ定ムニ腸ノ健否ニ

モ顧慮スルヲ要ス

療法 原因療法 本病對シテハ(一)食物ノ攝生ニ注
意シ(二)必キ異常ヲ所シテ(三)衰弱ニ至ル内ヲ強
メ(四)消化時ニ於テハ異常ヲ除クヲ要ス就中食物ノ
攝生ハ慢性胃加層見ニ對シテ最モ必也ニシテ其
使用ニ適スルハ冷水炭素中ニテハ新シカラセシ麵包
殊ニ其皮ビスケツトシ饅頭、米、小麦カ、等蛋白質
質ニテハ肉汁、コイク、ロゼンタル氏肉液(プロトシ

「マトロゼ」牛乳、敲キ肉、鳥ノキ、肉、英法ビス
ラーキ、臭肉殊ニ刺身、鶏卵ノ生マ又ハ半熟、豆
腐等シ、脂肪ハ多ク用フカラズ但牛酪ハ往時
人ノ想像ニシテホド消化悪キモノニアラズ野菜
ハ成之ニ多ク用スルヲトス其用ニキモ人碎キ
タル馬鈴薯、おろし大根、白芷等シ

必キ要スルニ胃ノ消化最モ效アリ之ニ由リテ
粘液ヲ除去シ其者胃酸ヲ制止シ好ムニ粘液ヲ
溶解スルニハ%ノ食塩水、又ハ白朮五苓散等ノ
石灰水ヲ用フニ水ニ加ヘタル用ヒ胃酸
ヲ制止スルニハ千倍ノ力ナリ酸液ヲ用フ洗滌
ニ適当ナル時刻ハ朝ノ空腹時又ハ夜ノ就寝時ニ

塩酸が胃液減少の時、蛋白質を消化せしむる目的に用ゐる。其他胃液を促す能は、且、消化性ニ働かす。アリンの若く効力あり。

アリン劑を亦、痛用する。ヤシンスキ氏に依るに、アリンの少量、胃液を必す促進し、其後、溶解するに之を打後、或は大量を用ふに、胃液中ノ塩酸を少量を減かす。

胃腸の腸に得せしむるに、適当なる食餌療法を行はば、養ふに、胃腸に消化して有る者、内容物を、一日五カ分、同一胃部に、及、感傳電氣を通過す。

胃酸減少を制止するに、**胃酸減少薬**として、(一) 量は、

〇五(硫酸)ニオカ、(一) 量は、〇、二(大)

キアトール(一) 量は、〇、三(〇、二)トール

ベシオオナトール(一) 量は、〇、二(大)

苦味菜、即ち、**苦味菜**、大葉、**苦味菜**

苦味菜、即ち、**苦味菜**、大葉、**苦味菜**

苦味菜、即ち、**苦味菜**、大葉、**苦味菜**

第三 胃アトニー

胃筋肉緊張減却し、胃壁食物ノ重量ニ由り伸張スルヲ以テ、其境界健胃ニ比シ、バ、下降ス、サレド、其擴張、食物ノ去れト共、消去シテ、故位ニ復スルモノトス。

原因 凡そ腹圧減少の場合(腹壁弛緩即ち直腹筋離脱、脂肪過多等)並に栄養不良等ニ由り、胃

筋肉衰へる場合又胃過度使用胃腸及肝疾患保費スルヲアリ

△症候 局所症候、胃部膨満、感圧重感、並ニ

變氣ヲ覺スルヲ以テ患者常ニ食後ニ衣帶ヲ弛ム、食慾ニ尋常ニシテ胃ニ常ニ充満ノ状態ナリ

○食物ノ量ニヨレル胃ノ變化ハ打診及振水音ニ由リ

テ之ヲ証明シ或ハ次ノ法ニ據リテ檢スルヲ以テシ

ペンツォルト氏法

(一)健在者ハ其空腹時ニ於テ一リテ水ヲ飲用セシムルモ胃部大變ハ常ニ臍上部ニ於テ胃アトニ連者ニ於テ臍以下ニ降ルヲ見ル

デヒョオ氏法

(二)健在者ハ其空腹時ニ四分一リテ水ヲ飲マシムルニ於テ大變ノ位ニ至ラズ、次ニ四分一リテ水ヲ飲マシムルニ於テ臍以下ニ降ルヲ見ル

ニリキル家火ヲ飲マシムルニ胃ノ濁音漸次下リテ

臍ニ達スルモノナレバ胃アトニ連者ニ於テ既ニ一杯

ノ水之飲用ニヨリテ胃ノ大變ヲ臍ニ達シ尚流シテ飲

マシムルハ臍以下ニ降ル

胃ノ筋肉弛緩ニテ運動障礙ヲ起シ食物ノ久シク胃

ニ停滞スルヲ為シ酸酵ヲ起シ其毒出シタル毒

物ノ吸收ノ為ニ阻害ヲ及ボシ神經衰弱底ヲ

起ス

△鑑別診断

胃擴張ト鑑別

○胃擴張

○胃アトニー

(一) 癌腫等、出川狭窄原	(一) 胃擴張
因アリ	

(二) 常ニ振水音アリ

(三) 患者ニ一定ノ晩食ヲササシ

翌朝空腹時ニ田月洗滌ヲ行
ニ其際食物存スル胃擴張

(四) 鏡檢スルガチナシ及嘔
吐菌ヲ多ク認ム

(五) 其度ニ後ニテ多ク尿量
減ス

(六) 内服藥不效ナリ

(二) 唯食後液体ヲ攝取シタル
時ニノミ也及ス

(三) 存ヤサレハゴトニシ

(四) 全ク之ヲ認メス或ハ甚ク寧
ニ之ヲ認ム

(五) 尋常ナリ

(六) 效アルコトアリ

療法 胃筋ノ緊張ヲ増シ酸酵ヲ防グニ要ス酸酵ヲ
防グニ制菌劑即チクレオソト 硫酸イヒチカール、アミ
等ヲ用フ、筋肉ノ緊張ヲ増スル飲食物ノ攝生ニ注意シ
液体ノ飲用器ハ一日一リ、リテルニ至一リ、リテル半以下ニ制
限シ食物ハ成ルニク消化シ易キモノヲ少量宛幾度モ
取ラシムニ便通ハ出来得ルタケニ良餌療法ニ教正ハ
止ムコトヲ得サル片ニミ下劑ヲ禁ズ

胃ノ運動ヲ刺戟スルニ番木鱉電氣療法(一日量〇
〇六)ヲ用フ或ハ輕酸オレキニ一日一回〇、三乃至〇
五ヲ用ヒ若シ數ナキ片ハ一日二回トナシ八日乃至十日ニシ
テ中止シ八日間ヲ経テ更ニ反覆使用ス

酸ノ分泌増加ノ際ニ煖性マクニシヤ又ハ重炭酸水
達ヲ用フ其他按摩法、電氣療法、胃ノ洗滌
水治法ヲ用フルコトアリ

第四 胃擴張

胃、持续的擴張スル症ナリ（巨大胃ト稱スル症モ亦
胃腔擴張スル本症、如キ官能障碍ナシ）

原因（一）幽門部狭窄即チ幽門癌、潰瘍后、癒

痕、幽門筋、肥厚、外方ヨリ来ル幽門部、狭窄等

（二）胃筋肉之衰弱セシムル疾病等即チ甲、局所ノ疾病

慢性胃加吞兎、胃ノ潰瘍、胃癌、腹壁弛緩等

（三）全身ノ疾病、而過度ノ胃ノ勞動例之、貧食家

糖尿病患者

解剖 胃壁擴張シ殊ニ底部ニ於テ著明ナリ、幽

門部ニ癒痕、癌腫等、如キ原因病ヲ認メ、胃粘膜

慢性加吞兎ニ呈シ、筋肉、或ハ肥厚シ、或ハ菲薄

胃擴張

症候 食慾多、不良、口渴アリ、食後三、四重膨
 満感、吞酸、嘔雜、胃部疼痛、腹氣アリ、便秘
 嘔吐アリ、嘔吐時、以前より停滞せる食物ヲモ共ニ
 吐出スラシク、其量、最終ニ取リタル食物ノ全量ヨリ
 モ多シ、吐物、強キ酸臭ヲ呈シ、酸度強ク之ヲ放置ス
 バ三層ニ分ル、其上層、褐色、泡沫、中層、帶黃褐
 色ニシテ少シク溷濁シ、下層、暗褐色ニシテ食
 物残渣及粘液ナリ、吐物、釀母菌、為、酸酵シ時、
 氣泡、底部ヨリ上昇ス、見ル鏡、換スル吐物中、
 ル「トナ」釀母菌及分裂菌ノ存在ヲ認メ、又化学的
 検査、由リテ塩酸、乳酸、ペプトン、プロテイン等ヲ
 証明シ得ベシ

△**理学的検査**

望診 腹壁弛緩、羸瘦セルキハ
 胃ノ球状膨隆ヲ認ム、胃下界、臍以下ニアリ、往々胃
 部ニ蠕動様運動ヲ見ル、殊ニ幽門狭窄ニ因
 セル擴張ニ於テ然リ、蠕動運動、噴門ヨリ幽門ニ向
 ヒテ現ル、腹壁、摩擦、敲打ガルワー氏電氣流
 通、冷水灌注等ヲ示現又、増劇ス
 觸診 胃部ヲ觸按スルニ一種ノ抵抗アリ、テ空氣
 ヲ盛ルニ護謨製枕子ニ觸ル、如キ感ヲ為ス、(空氣
 枕子様)
 コイン氏、硬キ消息子ヲ胃ニ送り、腹壁ヨリ其尖端ニ
 觸レ、之ヲ擴張ノ度ヲ検シ、其尖端、而腸骨前上棘
 結合線以下ニテ觸知セラル、モ、胃擴張ト認ムヘシト

スリ、サレド此診断法ハ危険ナシトセ、ペンフォルト氏ニ
依ル健體ノ消息ヲ挿入スルニ六十仙達ニテ貴
ノ對スル胃壁ニ達スルニキモ、胃擴張ハ七十仙達ニ
テ始メテ之ニ達シ得ベシトセフ

打診 胃ヲ打診スルニ低調ノ鼓音ヲ呈シ觸打法
ニ依リ明カニ胃下界ヲ定ムルヲ得ベシフレリルビ
氏ニ後ニ酒石酸ト重炭酸曹達ト個々ノオプラ
ト止ニ包ミテ服用セシメテ胃中ニ於テ炭酸瓦斯
ヲ發生セシムルニ或ハ空氣ヲ送入シテ胃ヲ膨脹セシメ
テ打診スルニ胃ノ境界著明トナル、胃内ニ液体ヲ含
ムルハ其潑濁部ニ濁音ヲ呈シ其濁音ハ液体ノ
變更ニ從ヒテ部位ヲ變ズル起立位ニ於テ濁音

臍以下ニ存シ仰臥時ニ消失スルキ、並ニ起立位ニ於テ
大嚔リ部ニ濁音ヲ呈シ胃叩筒ヲ以テ胃内内容物
ヲ除クニ由リテ濁音ノ鼓音ニ變スルキハ胃擴張ノ
徴ナリトス

聴診 胃ヲ振盪スルニ振水音ヲ發ス健康者ニ
於テモ液体攝取后ニ胃部ヲ振盪スルニ之ヲ發スル
キモ擴張セル胃腔ニ常ニ潑射ト瓦斯ト入ルニ由
リテ既ニ胃ノ空虛トナリタル時期ニ於テモ尚振水
音ヲ發ス、又胃内ニ於テ炭酸瓦斯ヲ發生セシメ
テ胃下部ヲ聴診スルニ水泡音ヲ聴ク
胃ノ運動障礙アリ健射ハ早期空腹時ニ胃ヲ
洗滌スルニ毫モ食物残渣ヲ認メサレハ胃擴張

者之反シテ残渣アリ

本病増進スル栄養大ニ障碍セシレ但鐵ノ水分
缺乏シ神逆症候及テカタニシテ起スル下アリ

△**診断** 胃擴張ニ原發性ト流發性トアリ前者

比較的稀有ナリ、**幽门狭窄**因ニ擴張ニ就テハ
其原因ノ癌腫ニカ將テ瘰癧收縮ニカラ區別
スルヲ要ス

△**豫后** 不貳

△**療法** 其原因ヲ去ルニモ外科的手術多ク集
行ニ難キヲ以テ通常對症の療法ヲ以テ満足セ
ザラ得ス

療法中必要ナル**食物** 攝生ナリ多量ノ液射ノ飲

用ニ最モ慎マシムベカラズ是本病者ハ液射ノ胃ヨ
リ腸ニ輸ラレテ困難ナレバナリ斯如ク液体ノ腸ニ
達スルノ十分ナラザラ以テ身射ノ水分缺乏シ患者
渴ヲ訴フ故ニ**灌腸**ニテ水分ヲ射内ニ輸ルヲ要ス
飲用スル液射一日合計一乃至一五リトテ起シ
ベカラズ食物モ成ルニク水分少キ物ヲ選ブベシ

療法中**最モ有效ナル胃洗滌法**ニテ其最モ便
ナク保護膜官ノ一端ニ消息子ヲ附シ他端ニ漏斗
ヲ附シタルモノナリ、挿入時ニ患者ヲシテ深く呼吸
セシメ頭部ヲアマリ後ニ屈セシメ又ヤウニシテ
既ニ挿入シテハ高く舉ゲテ漏斗ニ洗滌液ヲ滿
シ其漏斗ヲ下ニシテ胃ヲ洗滌スル

洗滌液トシテホフシ氏ハ食塩水(食塩七・五ヲ水
一リ一ラニ溶解シタルモノ)ヲ用ヒ粘液ノ分泌多キ
牛ハ三布仙ハ重炭酸曹達水ヲ用ヒヨリ塩酸過氣
ニシテ釀母及ザルチナシ多キ症ハ一及ニ三布仙ハ
重炭酸曹達水ヲ可トス酸酵ノ際ハ二及ニ三
布仙ハ一及ニチニ一及ニ五布仙ハサリチ一及ニ
達ニ三布仙ハ硝酸水等ヲ用フ
胃洗滌ハ通常一日一回早朝空腹時ニ行スリ
ゲル氏ハ永シク胃ヲ休憩セシムラ利益アリトシテ晩ノ
洗滌ヲ稱揚セリ
胃洗滌ノ目的ハ胃中ニ於テ消化セザル食物蓄
積シテ酸酵タルモノヲ驅逐スルニアリ之ヲ濫用

スレバ却テ害アリ
胃ツツシ一ハマルブラシ氏ノ始テ医療ニ應用シ
ル法ニシテ高壓ヲ以テ霧ノ如クニ水線ヲ噴出セシ
メテ胃粘膜ニ撒布スルニアリ
摩擦法ハ宿便ヲ排除シ血行ヲ盛ナラシメ腸胃
筋ヲ強壯ナラシムルニ利アリ
電氣ハ大人道子ヲ胃部ニ貼シ小兒道子ヲ
肋骨下部若クハ脊柱ニ貼ス
其他水治法ヲ試ミ腹帯ヲ施シトス
胃ノ運動ヲ促ガシ且酸酵ヲ腐敗ヲ除クニハ番
木電氣或チ斯ノサリチ一及ニ酸炭鉛一及ニチ
谷ハスホルム水等ヲ用フ
胃貴湯

第五 胃潰瘍

解剖的所見 円形胃潰瘍の幽門部、後壁に發スル
1 最も多く、其直径一乃至五仙に迷アリ、扁平ナル扁平
状ヲナシ、其尖端漿液膜ニ向テ、ロキタンスキー氏ハ之ヲ自
シテ斂テ以テ抉去シタルガ如クト云リ、潰瘍壁ハ周辺
ヨリ其基底ニ向テ階段状ヲ為ス、全胃壁ノ之ニ侵サレタ
ルハ往々脾、肝等ト癒着シ是等ノ臟器ヲ以テ潰瘍
ノ底面ヲ形成スルアリ、
大ナル潰瘍ノ治癒後ニ放線状ノ瘢痕ヲ形成スルヲ
以テ其幽門部ニ生モレル場合ニ幽門狭窄ヲ起ス
ベシ

△原因 胃ノ出血、栓塞、動脈硬變、血管收縮、

貧血、外傷等ハ潰瘍ノ發生ヲ助ク、火傷ニ胃又ハ
十二指腸ノ潰瘍ヲ發スルハ此部ニ於ケル毛細管ノ
栓塞ヲ起ス為ナラン

本病ハ男子ヨリモ女子ニ多シ是屢々萎黃病併
發スルヲ以テテリサレド本病ト貧血トノ關係ハ未ダ
明カナラズ又本病ハ中年(廿歳乃至四十歳)者ニ
多シ

ゾレル氏ノ本病ハ露國及南獨逸ニ甚ク稀ナリト
云ルハ注意スベキトニシテ氏ハ其原因ヲ植物性
アルカリ塩類ニ富ル食物ニ歸セリ
胃部ノ外傷モ亦本病ノ發生ニ關係アリ胃塩酸
過多ノ時ニ其粘膜ニ缺損ヲ生スルハ深部ニ侵蝕ス

傾向アリ

△症候 多數ニ於テ固有ノ症候ヲ呈ス而シテ本病
ハ屢々再發スルモノトス

胃痛ハ灼熱様穿刺様又ハ痙攣様ニシテ多
クハ心窩ニ限局シ食後ニ發シ食物ノ性質及量
ニ關係ス固形ノ食物並ニ冷熱ニ過クハ食物ハ
疼痛ヲ發シ易シ疼痛通常食後三十分乃至
四十五分ニ始マル疼痛ノ食後一乃至二時間ニ起ル
モノハ潰瘍ノ幽门部附近ニ存スル徵ニシテ食後
直ニ發スルハ噴門部ニ存スル徵ナリ胃ノ内容ヲ
吐出スルキハ通常疼痛止ム疼痛ハ亦病者ノ
位置ニヨリテ増減アリ幽门部潰瘍ハ右側

臥シテ劇痛ヲ起スモ左側臥シテ緩解シ後壁潰
瘍ニ患者伏臥シ前壁潰瘍ニ仰臥シテ其疼痛
ヲ避ク

背部疼痛 胃痛ト等シク必要ニ症候ナリ此疼
痛ハ上腹疼痛ヨリモ摩レテ發シ一ニ週乃至一二ヶ
月後背部ニ限局シ殊ニ左側ノ亦ハ乃至亦十二胸
椎又ハ亦一乃至亦二腰椎ノ間ニ存ス往々両肩胛骨
ノ間ニ之ヲ發スルアリ其痛ハ絞マル如ク多クハ疾
病人全経過中部位ヲ變スルナキモ時トシテハ僅
ニ轉換スルアリ

脛痛ハ心窩ノ背部共ニ發ス心窩ノ脛痛ハ通常
正中線ニ存スモ時トシテハ心窩ノ左側稀ニ右側ニ存

るにあり此疼痛部位、限局をて強劇をてら
固有なりトス

嘔吐、略本病三分の一、現心通常疼痛劇甚、
發不食、後直、腹、甚、嘔吐、食物、甚、シ、變化、セ、モ、
時、シ、経、テ、發、ス、甚、シ、變、化、シ、テ、酸、性、糜、粥、状、ヲ、呈
ス、食、後、直、ニ、起、ル、嘔、吐、嘔、吐、ハ、潰、瘍、ニ、三、時、間、ヲ
経、テ、發、ス、ル、出、ル、潰、瘍、ナリ

吐血、或ハ偶發、或ハ身体、勞、働、精、神、感、動、ニ
由、リ、發、シ、又、食、後、ニ、發、ス、甚、キ、出、血、吐、物、尋、常、血
液、如、キ、色、ヲ、呈、ス、且、通、常、ハ、血、液、一、部、分、胃、中、ニ、凝
固、シ、酸、化、セ、モ、各、シ、シ、塩、酸、マ、キ、シ、ニ、變、化、シ、テ、為、シ、暗
赤、色、ヲ、呈、ス、血、液、一、部、分、屢、腸、ヲ、排、出、シ、糞

便、暗、黒、色、ヲ、示、ス、様、ト、ナ、レ、ラ、見、ル、(下、血)故、ニ、胃
潰、瘍、疑、ハ、ル、者、ノ、急、ニ、貧、血、失、神、シ、ル、中、ハ、其、糞
便、ニ、注、意、ス、ベ、シ
食、慾、尋、常、若、シ、却、テ、亢、進、ス、食、通、常、清、潔
ニ、シ、テ、食、味、佳、良、便、多、ク、秘、結、ス
リ、ハ、ハ、氏、始、メ、テ、本、病、ニ、塩、酸、ハ、必、増、加、ヲ、發、見、シ

経過 通常頗心長ク數月ヨリ數年ニ亙ルニテ
再發シ易シ

合併症及後遺症 (一) 瘢痕性幽門狭窄之ヲ發
シ、(二) 胃擴張ヲ起ス、(三) 穿孔性腹膜炎
(三) 潰瘍部ヨリ癌腫ヲ發ス

(四) 砂漏胃 (五) 横膈膜下膿瘍
 診断 胃及脊柱疼痛、食慾佳良、舌ハ
 清潔、嘔吐、吐血、血便、塩酸過多症、便秘等然
 鑑別診断 一 肺出血ト胃出血ト鑑別

○肺出血

- (一) 血液、排泄、咳嗽ニ依ル
- (二) 肺若クハ心臓病ノ既往症アリ出血前ニ胸内ノ重感及絞榨感アリ、往々胸内ヨリ温液ノ上昇スルヲ感ス
- (三) 肺若クハ心臓病ノ徵候アリ

○胃出血

- (一) 血液、排泄、嘔吐ニ依ル
- (二) 胃若クハ肝臓病ノ既往症アリ出血前ニ嘔気及上腹ノ圧感アリ
- (三) 胃若クハ肝臓病ノ徵候アリ、門脈鬱血ニ因ル症候ヲ發ス

(四) 血液鮮紅色ニテ泡沫ヲ含ミ凝固セズ

- (五) アルカリ性ノ反應ヲ呈ス
- (六) 往々粘液及膿ヲ混ズ
- (七) 肺出血久シク持続シテ徐々に消失ス

二 胃瘻トノ鑑別

○胃潰瘍

(一) 年齢 壮年及中年ニ發シ且女子ニ多シ

(四) 血液黯色ヲ呈シ時トシテハ殆ト黒色ヲ呈ス、空氣ヲ含マズ凝固シテ團塊トシ

- (五) 酸性ノ反應ヲ呈ス
- (六) 往々食后ニ成分ヲ混ズ
- (七) 胃出血俄然トシテ持続短ク出血後初メテ人便ニ往々テトシ様顯著色ス(血便)

○胃瘻

(一) 中老以上ニ發シ且男子ニ多シ

(一) 経過 緩慢ニシテ其経過

中病勢一進一退ス

(二) 疼痛 食後ニ疼痛発

作アリ 按摩ヨリテ局部ニ劇

痛ヲ受ス

(三) 嘔吐及吐血 食後疼痛

最モ強キ時ニ嘔吐ス 吐物ノ量

多ク凝固シタル暗赤色ハ白

液ヲ含ム

(四) 胃液 塩酸ニ富ミ異常酸

性ナシ

(五) 腫瘍 通常無シ 稀ニ潰

(一) 潰瘍ヨリモ早ク二年ニ互

ルモノナシ

(二) 潰瘍ノ如ク劇シカラサルモ全

部ニ互ル疼痛アリ

(三) 嘔吐不規則ニシテ多クハ食

物ノ久シク停滞シタル後ニ受ス

吐血少量ニシテ外觀咖啡様褐

色ヲ呈ス

(四) 塩酸減少又ハ缺如シ 乳酸

性アリ

(五) 腫瘍ニ觸ル疼痛ノ

瘍后ノ癥痕形成ニ因ル滑

沢ニ結節物ニ觸ルノミ

(六) 食欲及舌 食欲停滞

碍ナク舌ハ清潔ニシテ食

味喜通ナリ

(七) 栄養 佳良ニシテ水腫

ヲ見ルルナシ

(八) 九鎖骨上窩淋巴腺

腫脹セズ

表面凹凸不平ニシテ疼痛

アリ能ク移動ス

(六) 食欲振ス 舌ハ厚苔

ヲ帯ヒ美味不良

(七) 栄養大ニ衰ヘ 惡液質

ヲ呈シ時ニ水腫ヲ受ス

(八) 腫脹ス

(九) 腫脹ス

療法 胃潰瘍ノ疑ハモニ其療法ヲ行フベシ少クモ

刺戟セシ食物ヲ與ヘ(牛乳療法ナド) 熱キ飲料、氷

等ヲ禁ルルニ注意ス 便通ニ注意スルヲ要ス

胃潰瘍療法ヲ在ル血期ニ分ツ

(一)胃出血期 胃安静ヲ守ルニ要ス、故ニ患者ヲ静臥セシメ、大小便ヲ褥中ニテ排泄セシメ、且全ク絶食セシム、且余ク絶食セシム出血ニエルゴチニ皮下注射ヲ行スニ

心窩ニ氷嚢ヲ貼シ或ハ氷水ハタタ置法ヲ行ヒ劇痛アルハ塩酸モルヒネ〇〇一又塩酸コデイン若シハ燐酸コデイン〇〇三ヲ皮下ニ注射シ或ハ甘菜葉ニ依リテ坐薬トス、滋養液灌腸、催利灌腸モ大ニ必要ナキ限ハ行ハサシ可トス、最終ノ出血後二三日経テ始メテ微温ノ液体(牛乳、ソップ、粥汁)ヲ与ヘ、口イベ及コレルタルル氏肉液等ノ少量ヲ与ヘ取

ラシムルヲ得ヘシ

(二)出血後第二週間 人工カルク、泉塩五、〇乃至一〇、〇ヲ列氏四十度ノ温湯ニ五〇、〇ニ溶解シテルモノヲ朝夕服用セシム胃部ニ可及的極キ強製温置法ヲ用テ、懐爐ヲ貼シ其部ノ皮膚ノ赤色ヲ呈スルニ至ル、食物ハ尚流動性モノヲ要ス

(三)出血後第三乃至第四週間 胃部ノ疼痛既ニ去ル患者、起坐若シハ室内外ヲ許ス、トテハ一人工カルク、泉塩ハ尚持重スルヲ要ス、食物ハ主トシテ牛乳ヲ與ヘ、粥、軟カク、麵包、刺身、魚肉ノ吸物、牡蠣等ヲ取ラシムルヲ得ヘシ

(四)出血後第四週以後 漸次消化シ易キ食物ヨリ許シ得

ヘキモ果实並ニ冷熱ニ過ル飲食物ハ尚久シク禁スルヲ要ス

○藥物療法 (一) 硝酸銀 〇、〇一グラム 〇、〇〇二グラムニ溶解シ一日三回一食匙宛空腹時ニ共テ 硝酸銀ノ量漸次増加シテ

(二) 次硝酸蒼鉛 (或ハ炭酸蒼鉛) 六、〇乃至一〇、〇グラム一日量トシテ用テ若シ鉛ノ潰瘍面ヲ被テ刺戟ヲ防グ作用アルハ猶沃度

フォルムヲ割面ニ撒布シタル中如シシラ多量ニ服セシムル

便秘ヲ来スルヤ

(三) アルカリ劑 (重曹、煇製マグネシヤ、人五カルス、炭塩等)

(四) 麻醉藥 モルヒネハ疼痛ヲ緩解スルコトナラズ能ク塩酸ノ分泌ヲ制スル作用アリ其他苦積作用ナキ為 磷酸コデインモ亦稱用セラル 莨菪丸ハ鎮痛ノ外分泌ヲ制スル作用アルヲ以テ大ニ稱用セラル

第六 胃癌

原因 諸種ノ臟器中 癌腫中最モ多キハ胃癌ニシテ凡テノ癌腫患者ノ三分ノ一ハ胃癌ナリトスルヲ性ニ關係ナキカ如ク年齢ハ四十歳乃至六十歳ニ最モ多シ、胃癌ノ遺傳スルヤ否ヤハ疑問ナリ

外傷ノ為ニ胃癌ヲ發ストスルヲ、諸氏ノ反覆實驗スルトヨクニシテ慢性胃潰瘍ノ本病ヲ誘發シタル实例モ亦多ク、ハウザー氏其組織學的証明ヲ興ヘリ胃癌ノ發生ハ常ニ急劇ナキモノニシテ消化障礙久シク前駆スルガ如キヲナシ本症ニ胃加老見ノ併存スルハ統一的ナリ

癌腫ノ病原不明ナリ近頃ソラハ微有機体ナラド

胃癌

（見）
推測シ此方面ニ向テ研究スル学者多キモ未タ十分ナ
ル成績ヲ得ス

解剖 本症ハ殆ト皆原發性ニシテ胃粘膜腺基
質ニ始ル

本病ニ在ル如キ種類アリ（一）上皮癌（腺様癌）

（二）髓様癌 （三）硬性癌 （四）膠様癌

硬性癌ハ徑過最モ永ク髓様癌ハ前潰ニテ轉
移シ易ク膠様癌ハ好テ腹膜ニ蔓延スルヲ轉移

スルヲ稀ナリ

胃癌ノ最モ多ク及スル部位ハ幽門部之ニ次リ噴
門部、小腸及其他ノ部ナリ

癌腫噴門ニ及スル胃癌狹小ナリ幽門ニ及スル

ハ擴大スルミナラス往々其重量ヲ為ニ胃下方ニ轉位
ス又胃ノ近隣臟器ニ炎症癒着ヲ起スナリ

胃癌甚々屢々他ノ臟器ニ轉移ス就中肝臟ニ轉移
屢々淋巴腺ノ共ニ侵サルヲ見ル

症候 多クハ食氣不進、食後ニ於テ胃部ノ壓重

膨滿ノ感、暖氣、便秘等ヲ以テ始ル、初期ニ於テハ

最モ著明ノ症候ハ急速ニ瀕瘦ナリ其他肉食ノ嫌

惡、胃部ノ疼痛及食後ノ嘔吐等ナリ漸次諸症

増悪シ胃部ニ於テ腫瘍ヲ觸ルニ至ル吐物ニ往々

咖啡沈渣状褐色ヲ現ハス次テ他臟器ニ轉移

シ惡液質ノ増加、出血等ノ症状ヲ現ハシ死ニ歸ス

經過ハ多クハ急ナシモ少數ニ於テハ緩慢ニテ腫瘍

ヲ觸ル、マデニ長時日ヲ要スルコトアリ

甲) 一般症候

- 一) 病急発本病ハ常ニ急發ス
- 二) 食欲不進通常食欲減退シ殊ニ肉類ヲ嫌惡ス
- 三) 嘔吐、幽門又ハ噴門ハ侵サレタルハ屢々發ス胃壁ノ甚ク癌腫性浸潤ヲ起シタルハ最早嘔吐スルコトヲ得ス

- 四) 吐血多クハ末期ニ起ル通常癌腫潰瘍面ヨリ小出血ヲ發シ其血液胃ニ停滞シテ变化シ黒色褐色咖啡狀ヲ呈ス

- 五) 便秘或ハ秘結或ハ下痢或ハ兩者交代性起ル
- 六) 腫瘍胃部腫瘍存在ヲ認ムルハ確實ニ診斷ヲ

下ニ得ベシ

元來胃ハ柔軟ニ壁ヲ有ル空洞ナルヲ以テ其上部ハ横隔膜ノ呼吸運動ニ伴ヒテ運動スル下部ハ其運動傳達セズ後ニテ胃部下部ハ呼吸運動ニ伴フナシ此事ハ胃癌ト他ノ实质性腫瘍例之ハ肝臓癌腫トニ區別診斷ニ資スルニ足ル但胃癌ハ幽門又ハ小弯弓ニ位置セルモノニテ肝臓ト癒着シタルハ或ハ癒着セザルモ直ニ肝ノ下縁ニ密接セルハ並ニ癌腫性浸潤ノ為ニ全胃壁ヲ硬化トナレルハ腫瘍ハ常ニ呼吸運動ヲ受ス此場合ハ上縁ヲ觸知シ得ルハ心窩ノ腫瘍ヲ以テ胃癌ト認ム

腫瘍ハ硬固ニシテ其表面凹凸不平ナリ多少圧痛

胃の虚盈より其位置ヲ異ニシ若クハ出沒ス
 腫瘍腹部大動脈上ニ存スルキハ搏動ヲ現スルアリ
 七胃内容ノ検査 化学的検査ヲ行フキハ遊離
 塩酸ノ缺如及乳酸ノ現存ヲ認メ顕微鏡的検査
 ヲ行ハシム裂菌及サルネノトナト釀母菌トヲ認ム
 八貧血及惡液質 貧血胃出血並ニ消化同
 化ノ障碍ヨリテ發スルモノナレトモ毒素ノ吸收ニ由リ
 テモ發ス白血球ハ空腹時ニ消化時ニモ變化セズ
 九尿ノ關係 尿中ニインヂカン又ハ不レノ現ル
 ニアリ
 十自家中毒 癌腫ノ経過中殊ニ其末期ニ昏
 睡状ヲ呈スルコトアリ之ヲ不消化昏睡ト稱ス此豫

後ハ甚ク不良ナリ
 七熱 往々發熱ス其原因ハ腫瘍ノ周圍ニ炎症
 機轉起リタル為又ハ潰瘍面ヨリ産出スル毒素ノ
 吸收セラルル為ナリ
 七轉移 左鎖骨上腺 肝臟等ニ轉移スルコトアリ
 乙 發生部位ニ関スル症候
 一 噴血 癌 自覺症候ハ嚥下困難ニシテ他覺症候
 ハ食道下部狭窄等ナリハ嚥下雜音缺如シ或
 ハ屢々緩徐トナレ又消息子ノ検査ヲ行フニ噴血ニ抵
 抗ラ感ス稀ニ消息子ノ窓ヨリ癌腫組織ノ小片
 附着シ往々消息子ノ尖端ニ血液附着ス(3)食物
 噴門部ニ停滯

(二) **幽門癌** 自覚症候は胃部膨満感、頻回嘔吐等ミテ他覚症候は(1)腫瘍正中線右側アリ(2)蠕動性不安アリ(3)大量嘔吐アリテ其中三二日前ニ取リタル食物ヲ含ム(4)空腹時ニ消息子ヲ挿入スルニ多量ノ食糜ヲ認メ其中ニ前日取リタル食物ノ分解ヨリテ多量ニ含ムヲ認ム

(三) **胃自家癌腫** 自覚症候は(1)背部放射散ル咬ムル如キ持続性疼痛(2)甚キ食欲ノ欠損(3)他覚症候は(1)腫瘍正中線右側アリ(2)吐物少量ノ食物ミテ律々暗色ヲ呈ス(3)軽度ノ食物停滞

難過 慢性 平均六ヶ月乃至十五ヶ月

診断 発病急劇、羸瘦、貧血並ニ惡液質、高年嘔吐、咖啡沈渣状吐血、遊離塩酸ノ缺如、乳酸ノ存在、腫瘍ノ証明、轉移癌ノ症候等ヨリテ診断困難ナリ、但之ヲ早期ニ診断シ手術ノ好時期ヲ逸セスニテ外科ニ附スルハ容易ナリ

鑑別診断 (一) **肝臓癌腫**

<p>○ 胃癌</p> <p>(一) 消化障碍、胃痛、胃出血等アリ</p> <p>(二) 呼吸運動ナシ</p> <p>(三) 体位ノ変換又ハ胃ノ虛弱ニヨリテ変位若クハ出沒ス</p>	<p>○ 肝臓癌</p> <p>(一) 黄疸、腹水等アリ</p> <p>(二) 常ニ呼吸運動アリ</p> <p>(三) 然ラス</p>
---	--

四 鼓性濁音ヲ呈ス
四 重濁音ヲ呈ス

五 其上縁ニ觸ルコトヲ得

其他 (一) 横行結腸癌 (二) 十二指腸癌等ト鑑別ヲ要スルコトアリ

豫後 不良

療法 (一) 薬治療法 效キテ外科的ニ依ルコトナク

(二) 薬餌的療法 (1) 食物ノ攝生、牛乳、鶏卵、叩キ肉、鶏ノ白肉、刺身、牡蠣、牛酪、粥、パン、磨碎シタル野菜、豆腐、ペプトン、ソマトルゼ等用ヒル (2) 薬劑、ヨウモク、(3) 酸酵アラビノールト共ニ或ハ胃ヲ洗滌ス疼痛ニ憐れキトシ、甚モ苦丸、抱水、ヨウモクヲ試シ (4) 胃液中ニ遊離塩酸缺乏スルコトヲ塩酸ヲ共ニテ蛋白質消化ヲ補フ

第七 胃下垂症

原因及解剖 凡テ胸腹臓器ノ圧及容積ニ変化

アル牛、其臓器及附近ノ臓器、圧ノ強キ方ヨリ弱キ方ニ向ヒテ移動ス例之ニ子宮増大スル腹部ノ臓器ニ移動ヲ起スガ如シ 欧外婦人ニ胃下垂症多キハ一ハ妊娠后、腹部弛緩等ニ由ルモ、アルセツトニ由リテ胸部下部ヲ圧迫ストシテモ亦其ツテカアリ 腹圧ノ下降例之ハ出産后腹水ノ穿刺后、重腹及脂肪過多症ニ胃下垂ヲ起シ胃月癌、胃擴張モ亦胃ノ重量ノ増加ニヨリテ本症ヲ起ス、 本症ハ特ニ麻痺胸、鳩胸、扁平胸ニ多ク、其長トシテ又短廣ノ胸廓ヲ有スル者ニ少ク、細狭ノ胸廓者

胃下垂症

(胃腸下) 症候

ニ甚多シ又本症ハ方術者ニ少ク上流社会、教員、学生等ニ多キハ胸廓ノ良否ニ関スルナリ

△**症候** 漸次消化障碍ヲ受シ又胃ノアトニテラ度

ス是本症トアトニテハ同一原因ニテ也及スルヲ以テテ
次テ頭痛、眩暈、呼吸困難、職業ハ嫌悪、精神鬱
憂、多夢、不眠症等ヲ発シ、患者自ラ重病ニ罹リタ
ル如ク感ス

試ニ本患者ノ胃ヲ人工的ニ吹張スルニ心窩ノ上部陷凹
ニ下部膨隆シ其陷凹部ハ小管ヲ以テ膨隆部ハ
大管ニナルモノニテ呼吸ニ由リテ上下ニ運動スルヲ認
本症ノ診断ニ胃ノ上界即チ小管ノ位置ヲ定ム
ルヲ最モ必要ナリト云々唯視診上ニ略シ本症ヲ

診定シ得ルコトアレバ確診セントスルニ必ス人工的ニ胃
ヲ膨滿セシムルヲ要ス最モ單簡且実用ノミテ然モ
比較的確實ナル診査法ハ沸騰散ヲ服用セシムル或ハ空
氣ヲ胃腔ニ輸入スルニアリアイシホルシ氏ハ透光鏡ヲ
使用シタリ

本症ハ胃内容ノ腸ニ輸送セラルルヲ妨ケラルルヲ
以テ食物ノ不摂生ニ由リテ容易ニ運動障碍ヲ起
シ次テ胃擴張症ヲ続發ス本症ニ必シ障碍ヲ
発スルハ甚ク屢々胃加吞見ヲ併發スルニ由ル**便通**
多クハ秘結シテ下痢ス
本症ハ往々**神經症候**ヲ現ハス
胃下垂症ニアリ又ハ擴張ヲ併發スルコトアリ

胃擴張併發時其何レヲ原發トシ何レヲ続發トシキカラ判別シ難キアリ是胃擴張症ニ於テ胃其重量由リテ下方ニ轉位スルヲアリ胃下垂症ニ於テ食物ノ輸送困難為ニ胃擴張ヲ發スルコトアリ

胃下垂亦他ノ内臟下垂ヲ併發ス
 (一)腎臟轉位 此症殆ド常ニ併發ス故ニ余胸廓細狭ニシテ胃下垂ノ疑アル者ニ遇フ毎ニ先ツ腎臟ヲ觸診シテ其轉位ノ存否ヲ候シ而シテ轉位凡ラ認ムルニキ更ニ胃ヲ人工的ニ擴張シ其下垂ノ有無ヲ確ルラ便利ナル方法ト思惟ス
 腎下垂ハ右側ニ起ルコト多シ

- (一)肝臟轉位
- (二)脾臟轉位
- (三)結腸下垂
- (四)經過慢性

類症鑑別 (一)胃擴張

○胃擴張	○胃下垂症
<p>(一)諸症状持續性ニシテ症状ノ強弱ノ胃刺戟ノ強弱ニ異ナシ</p> <p>(二)吐物ノ酸性ニシテ腐敗シ之ヲ放置スルハニ層ニ別ル</p> <p>(三)口渴アリテ尿量減サス</p> <p>(四)甚キ栄養障礙アリ</p>	<p>(一)斯ノ如キ關係ナシ</p> <p>(二)吐物ノ少量ニシテ腐敗セス</p> <p>(三)之ヲ見バ</p> <p>(四)障礙少シ</p>

五胃中ニ早晨ニ食物ノ残渣ヲ食ム
 (五) 多クハ空ニ虚ナリ

ニアトナリ 兩者ノ區別ハ胃ノ境界ノ診定、振水音ノ部位、熟知ヲ要ス

療法 食物ハ消化ニ富ムモノヲ撰ブニ、脂肪性食物モ亦用ヒ可ナリ、多量ノ飲料ヲ摂取スルカラス、食直後ノ運動ハ宜シカラズ、

腹筋及背筋ヲ屈伸ナラセシメ、冷水度ヲ擦ルコトイ等ニ依リテ皮膚ヲ刺戟シ或ハ按摩、電気氣腹帶等ヲ試ム 藥劑ハ防腐劑及ストリキニーネヲ用フ
 クレオソト、硫酸イヒチオールアンモニウム(〇、一ラ膠囊ニ包シ一日三回一個及二個)モ亦極用スルニ足ルト云フ者アリ

電気感傷

第八 神經性胃疾患

(一) 胃神經痛

(神經性胃痛、胃痛、胃痙攣等)

原因 (一) 胃及其近傍ノ疾患例之ハ潰瘍、癌腫、捻轉過多症、腹膜炎、性癒着等ニ及ス (二) 神經中樞ノ疾患ヨリ及ス殊ニ脊髄カニ多シ (所謂胃性発作) (三) 傳染病(マラリア) 及中毒(ニコチン) (四) 他臟器ノ疾患例之ハ婦人生殖器ノ疾患ニヨリ、反射性ニ及スルヲアリ

男子ヨリモ女子ニ多ク、年令ハ十五歳乃至四十歳ニ多シ、萎黄ニ病及重病、恢復期ニ至テ亦少ナカラズ、症候 發作性疼痛及疼痛ヲ及ス、特ニ此疼痛ハ中至生胃疾患

（一）精神性 胃腸病
患者及疼痛ノ攝取シタシ食物ノ性質ニ関セザルアリ
即チ消化シ易キ食物ヲ用ルモ發作シ強キ回香
料等ヲ用ルモ發作セザルアリ疼痛ハ神經痛
性質ヲ有シ漸次増劇シテ極度ニ達シ再々漸次
輕快ス胃痛發作ハ或ハ急吞シ或ハ前駆徴トシテ
消化症候、神經症候ヲ現ス胃痛堪ヘ難キ程劇
シク揉ムカ如ク、灼クカ如ク、或ハ刺スカ如ク最モ心窩部、右
テ劇シキモ屢々背部、左側肩胛部、臍部、及季
肋部ニマテ放散ス疼痛強盛ニリテ輕快スルヲ
以テ患者其發作時ニ手又ハ枕等ヲ以テ胃部ヲ圧
抵シ或ハ腹臥位ヲ取リ或ハ体ヲ前屈ス疼痛極
ニ虚脱症狀ヲ發ス胃部屢々陥没シ腹壁收縮

シテ硬固板状トナリ往々腹部大動脈搏動ヲ觸知ス、
或シニ反シテ胃部膨滿緊張シ球状ニ隆起スル
アリ發作時間ハ区々ニシテ數分時ヨリ數時間ニ至リ、
屢々發氣足伸、嘔吐等ヲ終ル、發作間歇時ハ
患者全ク健康ナリ

△診断 本病ヲ診断スルニハ實質的及官能的胃
疾患アリテ疼痛ヲ發スルモト胃以外ノ疾病ニテ疼痛
ヲ發スルモトトニ區別スルヲ要ス、胃ニ疾患アリテ疼痛
ヲ發スルモト本病トノ鑑別診斷ハ既ニ前ニ述ベリ
其疾患ハ（一）慢性胃加吞見（二）円形胃潰瘍
（三）胃癌（四）天候ノ急變ニ由リテ疼痛ヲ發スルノ胃
ノ痙攣質斯（五）食物ノ攝取ニ由リテ發スルノ胃粘膜炎

過敏症(六)塩酸過多症は疼痛胃の空虚時ニ
 来リ食物攝取ニ由リテ輕快ス
 (七)腹筋痙攣症(八)斯ハ疼痛慢性ニ来リテ少ク
 圧迫ニ由リテ増加シ或ハ疼痛一所ヨリ他所ニ遊ビテ
 疼痛身軀ノ過半後ニ及ビ殊ニ運動ニ由リテ増
 劇シ仰臥シテ腹筋ヲ弛緩スレバ疼痛緩解若クハ
 消失ス
 (八)腸疝痛ハ疼痛ハ速ニ其位ニ至リ度ニ便通
 不正ニシテ鼓腸症アリ排便若クハ放屁ニ由リテ疼
 痛輕快又ハ消失ス
 (九)膽石症痛ハ疼痛ハ肝臓部ニ存シ屢々發熱アリ、
 肝臓腫大シ發作後ニ黄疸ヲ發ス便中ニ胆石ヲ發見

發後良

療法(一)原因療法ヲ行フ例之ハ煎散熱ハ「キチ」ニ

ヲ禁フルカ如シ

(二)對症の療法 平流電氣ヲ用ヒ其積極ハ心窩ニ
 通ス心窩部ノ温電法モ亦效アリ

(三)藥劑的療法 「エキサルギン」ヲ少量ノ塩酸「モルト」
 又ハ「キチ」ニ伍シテ用フ「エキサルギン」ハ「ニサ良莖」
 燐酸「コデー」各〇、〇一乳糖〇、五分十包トシテ發
 作ノ際一包宛内用

其他「アセピリン」^{アトミン}、硫酸「エリキル」^{ホフマシ}氏液、
 鹽草一錢、クオナール水等ヲ用フ劇痛ハ一〇%塩
 酸「モルト」水三〇%ヲ用ヒ溶液一筒ヲ皮下ニ注射ス

二) 神経性嘔吐

神経性嘔吐は胃に認められべき変化ナクシテ慢性的嘔吐ヲ
之に腦脊髓ノ疾患ヨリ發シ或ハ反射性種々ナル臟
器ノ疾患即チ男女生殖器咽頭腹膜等ノ疾
患ヨリ發ス或ハ神経衰弱症若クハ白スアリ山ノ
症トナリテ現ルコトアリ

本症ヲ診斷スルニ其神経症ナルコトヲ確メ且原因ヲ索
スルヲ要ス、神経性ナルコトヲ知ルニ次ノ諸点ニ注意ス
ベシ(一)嘔吐ノ容易ナル(二)嘔吐ノ食物ノ性質及量
ニ關セサル(三)或種ノ食物殊ニ奇異ナル食物及嗜
好品ニ限リテ嘔吐セサル(四)或種ノ食物ニ限リテ嘔
吐スル(五)患者ノ多クハ常習嘔吐ニ對シテ平然タル

(六)新陳代謝減退ノ為嘔吐ニ因リテ起ル飢餓ニ耐(得)ル
(七)精神ヲ感動スル内外ノ刺激ハ大ニ嘔吐ニ關係アルコト
(八)嘔吐ノ早震及胃ノ空虚時ニ起ル(九)他人ノ神経
症状ノ嘔吐ト同時又ハ交代性ニ現ル(十)月経
動及分泌ニ障礙ナキ

神経性嘔吐ノ種類ハ次ノ如シ尚疑ハレキハ梅毒血
乳頭ノ有無、尿中ニ蛋白質存否ヲ確メ女子ハ
生殖器ヲ検査スベシ

療法 原因療法 原因不明ナルハ對症療法ヲ行フ

患者ハ成ルベク安静ヲ守ラシメ精神刺激ヲ避ケシ
ム液体ニ富ムル食物ハ容易ニ嘔吐スラズテ消化ニ易
キ固形ノ滋養食例之ハチキ肉、鶏卵等ヲ喫ス

消化に難キ食物ニ堪フルアリ氷片ヲ嚙下
スレハ爽快ヲ感ズ嘔吐止マサルハ滋養灌腸ヲ行フ或
ハ消息子ヲ胃中ニ食物ヲ輸ル又患者ヲ隔離シ
或轉地セシメ或氷治療法及胃部電氣療
法(感傳電氣)ヲ試ム
藥部トシテハ「モルヒネ」「カイ」「藤酸セリウ」等
夏等ヲ用フ

(三) 塩酸過多症

胃ノ分泌モ又唾液ノ多ク分泌シ粘中減能ニ因得
アリパウロラモニ種ハ犬ノ唾液腺ニ瘍管ヲ化
リニキテ其腺ガニ片ノ肉ヲニモケハ唾腺分泌
ノ増進スルト同ク人ノ及胃ニ瘍管ヲ化ルン

犬ニ肉ヲ食ヒテ其分泌盛ラシムルハ胃液分泌促進ヲ
認メ得トシテモハハ「食慾ニ液ナリ」ト云フ是食
慾ハ消化液分泌セラルトノ意ナリ
アインホルトモニ種ハ胃部ノ障礙中胃部分泌
ニ多クナル者過半數ヲ占ムト云フ吾人ノ実験ニ據
ルモ本邦ニ於テ胃ヲ診テハ若クハ大多數ハ本症ニ
原因 中年ニ多ク男子ニ多ク神經病ノ分症ト
ナリテ或ハ獨立ニテ現ル病ニ感動ノ本病ノ
原因トナルアリ反覆シタル胃部刺戟モ亦本症ヲ
發ス本邦人ノ如キ激於性食物ヲ主食スルモノ殊
ニ本病ヲ發シ易シ

症候 自覚症候ハ通常食後二時間ヲ経テ胃部

疼痛ヲ受シ往々食時マテ持続ス疼痛ハ背部
及両肩胛部ニ向テ放散ス良態ハ尋常若クハ
却テ亢進ス飲食物ヲ殊ニ蛋白質(例之ハ鶏卵)
若クハアルカリヲ摂取スル疼痛直ニ緩解ス

其他吞酸、嘈雜、酸性變氣アリ便ニ通常秘結ス、
朝試食後一時間ヲ経テ胃内容ヲ検スルニ遊離塩
酸多量ナリ若クニ母布密即40、2%以上ノ塩酸存
在スルハ塩酸過多症ト看做スシ往々塩酸過多症
ノ症状アリテ塩酸ノ増加ヲ認メサルヤリ是則チマキノ推
測ノ如ク胃神経ノ特ニ塩酸ニ對シテ過敏トナリ多
シクシウヘルマン氏ノ乳酸試験ハ陰性ナリ患者ニ
引イ心及リドゲルキノ試験食ヲ喫ハ三四時間後ニ

胃内容物ヲ濾過シ其残渣ヲ検スルニ肉ハ全ク消化セ
シタモ澱粉含有ノ物質ハ全ク消化セシザルカ或ハ
甚ク僅ク消化セシ

尿ハ其酸性ノ度ヲ減ス

診断 本症ニ固有ナル症候ハ(一)食後二三時間ニ
テ常ニ疼痛アリ此疼痛ハアルカリ劑若クハ蛋白質食
物ノ摂取ニヨリテ緩解ス(二)食慾ハ尋常若クハ却テ
亢進ス(三)栄養ニ障礙ナシ(四)便秘アリ(五)引
ド及ボアス氏朝試食後一時間ニテ塩酸ノ含量
多シ

鑑別診断 (一)胃潰瘍トノ鑑別 胃潰瘍ニ限
局性圧痛及背痛アルモ本病ニ之ヲ見ズ胃潰瘍ノ

疼痛強弱ハ食物ノ性質ニ関スルモ本病ハ蛋白質ヲ食スルハ疼痛緩解ス但診断疑ハシキハ潰瘍ノ療法ヲ行ス

療法 稀粥ニシテ消化容易ニシテ澱粉ノ消化困難食餌療法ヲ行ヒ胃ノ刺激物ヲ避ケルニ故ニ酸味ニ布椒、酸、醋酸及強キ香料(芥子、胡椒、山椒)等ヲ用フニカラス

本病者ハ蛋白質ノ消化容易ニシテ澱粉ノ消化困難ナラシテ主トシテ蛋白質ニ富ミタル食物ヲ與ヘ澱粉含有物ヲ制限スルニ脂肪中ニテモ牛酪ノ如キモノ可ナリ胃内容物減少スルハ疼痛ヲ度スルニシテ食事ノ度数ヲ増シテ五六回トナス

薬劑的療法 重炭酸ナトリウム等ノ用アリ前ヲ用フ、塩酸モトモハ分泌ヲ制スル效アリ以テ「カリア」劑ニ伍用スルニ「莖菜素」ハ「モノ」等ヨリモ分泌ヲ制スル力強シ

便秘ハ煨製マンネンヲ用フ煨製マンネン及煨酸マンネン、マンネンニヤ、重炭酸ナトリウムニ比スルハ酸ヲ中和スル力顯著ナリ

(四) 神経性塩酸減少症 及塩酸缺乏症

(胃液缺乏症)

症候及診断 本症ハ塩酸ノ分泌減少若ハ缺如ス

重症ト胃痛ト區別、胃痛ハ胃酸及腸液
ノ分泌アレン本病ニ之ヲ見ス又胃痛ノ極期ニハ
本病ニ比シハ顯著ノ運動障礙アリ

胃酸減少ガ若クハ缺乏ノ診斷胃内容ヲ検査スルハ容易ナ
シ其神經性ナリヤ否ヲ定ムルハ容易ナシ其神經
性ナルヲ認ムルハ神經症狀ノ存スルト器質的ノ變
化ナキト因ル

療法 胃ノツツト「電氣療法、冷水摩擦」
行フ塩酸缺乏之症ニ強壯劑ト共ニ食塩ヲ與ヘ或ハ
毎食時ニ塩酸十及十二ルヲ與フ患者ハ栄養及佳良
ニシテ他覺的ニ其消化モ亦善良ニ是貴其機能ヲ失
フモ食物腐敗多ク高ト時間内ニ腸ニ移行シ腸胃

作用ヲ代償シ得ラレテナリ

五 神經性消化不良

原因 男子ニ多ク三十歳乃至四十歳ニ多クシトナリ
「神經衰弱症」ニ發シ又反射性ニ他ノ臟器例之ハ
生殖器ノ疾病ニ併發スルマリアラフ如キ傳染病發
血並ニ萎黃病ノ如キ慢性病煙草及酒類ノ濫用
精神過勞モ本病ヲ發ス

症候 「ヒスナリ」「神經衰弱症」ハ甚ク複雑
多樣ナリ多クハ患者食後ニ不快感アリ膨滿、圧重
緊張感及噯氣ヲ發シ時ニ惡心、食慾不良、胃部
不安ヲ感シ且嘔吐ヲ殊ニ固有シ他ノ器質的ノ胃
疾患ニ反シテ是等ノ症狀ノ食物性質及量ニ關係

セザルナリ故或輕易ノ食物ヲ僅ニ攝取シテ消化
障礙ヲ受ルニ拘ラズ不消化物ヲ多ク攝取スルモ少シ
モ障礙ヲ起サズナリ精神爽快ナルニ胃症並ニ
亢奮スルニ輕易ノ食物ニ依リテモ胃症ヲ惹ス斯ノ如
キ病苦ノ變換本病固有ノ徵ナリ
本症ハ消化障礙ノ他頭痛眩暈不眠倦怠
心悸亢進等ヲ惹ス

診断 ハ單ノ症候ニ據ラズシテ一般ノ症候ニ據ル
ヲ要ス胃内容ノ検査ノコトニテハ本病ノ診断ヲ下ス
トヲ得ス胃ノ分泌及運動ノ關係ノ短時日ニ屢ク變
化スル神經性ノ胃疾患ナリ病苦ノ食物ノ性質ニ關
セザル点モ亦診断上價値アリ例之ハ今日能ク不消化

物ニ堪フルモ翌日ハ既ニ輕易ノ食物ニモ耐ハサルアリ
患者ノ精神狀態ハ病苦ト大ニ關係アリ分泌及
運動ノ障礙ナクシテ唯知覺ノ障礙アル者ハ診断困
難ナラセバ分泌及運動障礙ヲ惹クニシテ場合ニ當
質的胃疾患トノ區別容易ナラス

豫後 多クハ良

療法 原因療法ヲ行ヒ精神ハ刺戟ヲ避ケ酒
煙ヲ禁シ或ハ之ヲ節セシム

神經強壯法トシテ水治療法按摩法電氣療
法及全身感傳電氣ヲ試ム最モ必要ナル務氷
瘧疾ニシテ**醫士**患者ノ信用ヲ博スルヲ要ス
食餌療法 特別ナル食物ヲ要ス滋養ニ富ミ夕

ル食物ヲ其へ、刺戟性ハモ、ヲ禁ス患者ヲシテ正シク
栄養物ヲ摂取スル習慣ヲ養ハシムコ
薬劑的療法 番木鱈比、ヨシキキ、シロ、如キ
健胃劑、塩酸キキ、重碳酸、鉄劑如キ強壯
劑並ニ、ブロムカリウム抱水、カルシウムヲ用フ

○第五章 腸之疾患

第一 急性腸加吞兒

△原因 本病、殊ニ哺乳兒及小兒ニ多シ其原因ハ次

ノ如シ
(一)傳染性加吞兒トシテ、小有機物若クハ其産生物ノ
為ニ違ス(空乏扶斯、コレラ、赤痢、インフルエンザ、マラリ

ヤ等)
二、食物ノ不衛生ヨリテ発ス、例ヒ善キ食物ニモ暴食
暴飲スル本病ヲ発シ、不消化性食物、氷冷ハ飲料、
腐敗セル食物、不熟ハ果实、不良ハ啤酒、飲用水
並ニ食物配食不良、俗ニ云フ「食合」等ニ依リ本
病ヲ発ス、肉食ニ依リテ劇キ腸炎ヲ発スルハ有機
急生腸炎也

性産物、即チコトイニ、産出スルニ因ル

(三) 粘膜ヲ刺戟スル薬劑ハ本症ヲ發ス

(四) 器械的刺戟即チ硬キ糞塊、嚙下シタル異物、例之

ハ果實、核、銅貨等ノ為ニ本病ヲ發スルコトアリ

腸管ニ生虫ヨリ又性ニ本病ノ原因トス

五 感局

(六) 自家中毒 即チ毒物ハ腸管ニ生發スルニ為ニ下

痢ヲ發スルコトアリ、又傷後ノ腸炎ノ如キモ之ニ属ス

(七) 穿ニハ墜落、衝突、打撃等、腹部ノ外傷ニ由

リテ本病ヲ發スルコトアリ

其他胃肝、腎等ノ疾患ニモ本症ヲ發スルコトアリ

解剖 腸粘膜多少潮紅腫起シ粘液ヲ以テ被

ハシ性ニ上皮ヲ離スル如上ノ變化ハ腸絨毛及粘膜ノ

皺襞上ニ於テ現著ナリ、孤腺及叢腺ニ通シ腫大シ

テ粘膜ノヨリ隆起シテ周圍ニ如量ヲ繞ラシ性

ニ膿胞ノ淡病ニ變スルコトアリ

症候 腹部ノ重痛、不快ノ感アリ、次ニ疼痛

ヲ發シテ下痢ヲ傳傳性トシ、熱アリ、便通ハ如

ク稀薄、糜爛狀ニシテ黄色(哺乳兒ハ綠色)ヲ

呈シ、粘液ヲ混ジ、穿ニハ血便ヲ混シ、排便數

ク多ク、甚ナルハ便世ニシテ酸臭、臭氣ヲ發シ、便

狀又ハ米泔汁トシ、排ラシ、便ノ存存、臭氣ヲ發

シ、甚シクハ便ヲ以テシテアリ

○ 輕者ハ一服、夜中、便微ニシテ下肢ニ酸慥ノ感アリ

口渴、食慾減退、尿量減少ヲ見シ同時に胃ノ
侵サレクヲ以テ食慾不進、悪心、嘔吐ヲ著ス。此ト
シテ、口唇ニ皸ヲ形シ生ズルヤリ
顔貌憔悴、口唇ノ皸ノトモに脈搏細速等ノ
病状ヲ著シ、四肢冷却シ、屬々冷汗ヲ流ス。
重症ニハ肺腸病及至虚脱病状ヲ呈ス
リテ、虚弱ノ少兒ニ反性腸少短ノ病状ヲ
云フ
腹部ハ熱腸ノ為ニ膨脹シ、横隔膜ハ上方ニ圧
迫セラレ、ツアツキ膈膜ノ膨脹、筋運動ヲ
腹壁ヨリ遠見シ得ズ。グリス音ヲ聞ク腹部ヲ
繪定状ニ指按ス。此ノ指を考テ著シトシテ、圧

小腸ノ病ノ類
大腸ノ病

迫ニ由リテ疼痛ヲ著ス
大便、顕微鏡的検査ヲ行フ。消化ノ各階級ニ
アル食物、残渣大量、粘液多量ノ有様ヲ、
上皮細胞、膿球、蟻酸等ヲ見エ、アラホカ
ノ結晶子ヲ認め、結糞便ニ反性酸味トシテ、尿ハ
濃度トナリ、白血球トシテモ、反性酸及至少カシ
反性酸ヲ著ス。重症ニハ尿中ニ固柱及少量ノ蛋白質
質ヲ含ム
以上ノ病状ハ多ク見ルトシ、口ノ迴腸結腸加著見
ニ腹ハクモラシニ急性腸加著見ノ小腸ニ限
局セラル(盲腸及迴腸也)トシテ、著便久シ
大腸ニ止マレテ、收縮セリ、トテ、下痢

便ハ能ク多量ノ新便小片ト混ルサレドカ腸
加参見ノ通者大腸上部ノ加参見ヲ保者スラ
以テ下痛ス。下痛便中ニ通者ノ大腸内空
物中ニサキキ急カ物強液即チ所藏物腸
疎・激形附テアテ殊ニ固有タル便ニ胆汁之云
コレテグメリン也及チ急ラ認ムノトナレドモ
依ル便成ルニ同形卵胞・新液賦及上皮卵胞ハ
胆汁ヲ以テ深色ニ染ムトテ臨床的ニ必要ナル
尿中ハハ「イカ」量ノ増カニテ大腸加参見場
合ニ其内空物ノ腐敗感明感スルベシ
急性腸炎ニ至ル中ニ急ラモテ侵サレ、腸ノ部
分ニ夫ニコレトシテ急ラモテ侵サレ、腸ノ部

十二指腸加参見ニハ加参見性黄直ラ葎ス
空腸炎及迴腸炎ハ生前之ヲ區別スルコト得ズ
盲目腸炎及虫様突起炎ハ好ニ論述スル
結腸炎ハ其モ多ク存ス一昼夜二十四回以上
下痛アリテ疼痛ヲ甚ス便中ニ新液ヲ混ス
直腸加参見。大腸骨盆腔部ニ疼痛ヲ甚ス處
ニキ便通者通即チ裏急後重アリ
経過 数日ノ内數週尙ニ至ル
診断 容易ナリ極性腸加参見ハ後ニ腸管
扶助ト区別スルコト得スコレヲ「流」時ニ生座
トシテ下痛トテ鑑別診断スベキナリ、
大腸加参見ハ赤痛ト区別スルコト

豫後 良 少見 及衰弱者ニ往ニ不長ナリ
療法 主トシテ原因療ヲ行ヒ次テ对症療

法ヲ行フ

食飲物ヲ同トセル者ニ輕クハ一二日尚絶食
セシメ漸次強汁、葛湯、粥、茶等ヲ與フ、
炭酸含有ノ飲料及寒冷ナル飲料ハ用テ
カラス

疼痛アラバ、糜粥ノ温覺法ヲ施シ或ハ
懐妊ガ弱、燒塩等ヲ腹部ニ貼スプリス
ニツキモ是法モ亦效アリ 腹内ニ病マズ異物
着ルハ腐敗ニタルモノ存ル 皮下氣 (ヒマヨ由
甘味等) ヲ與フ

華劑

下痢 持久スル止瀉劑 (石灰) ヲ與フ
カクシ酸 (0.1乃至0.25 毎二時間一匙宛ホ
フラー止ニ定テ用フ) 明礬 (前者ト同量) 鉍糖
(0.05乃至0.1 毎二時一匙宛) 硝酸銀 (0.2
水一五〇〇 毎三時間一匙宛) 呂口 鉄
液 (五乃至八滴ヲ粘帶前ニ服シ服用) 石灰
(二乃至五毫宛ヲ手紙ニ和シテ用フ) 石灰小
食匙宛) 次硝酸者鉛 (一〇以上一日數回) テ
ルトリル (0.3乃至0.5 若干其以上ヲ數回)
多ニ用テ (0.2乃至1.0 一日三回) 多ニ用テ
(一乃至六宛) 多ニ用テ (一〇一日三回乃至五回)
字ニ用テ用ヒル
〇慢生腸口炎見

慢性腸炎の病

結腸及直腸加蓋見ニハカールキノ偏斗ヲ以テ腸ヲ洗滌ス(從降液トシテハ慢腸ヲ用フ)裏急吐瀉及肛門瘻等ヲニ増酸モトシテ又ニ其長管九ノ坐基ヲ用フ

第二 慢性腸炎加蓋見

原因 急性症ノ反覆シテ慢性ニ変スルヲアリ或ハ始メヨリ慢性ナリアリ 替替血ノ原因即チハ肺疾患、肝臟病、泌尿器病、循環器及呼吸器病并ニ傳染病及全身病品チ肺癆マラリアニ惡液瘰癧モ本病ノ原因トシ腸管寄生虫及ニ滴虫等ノ本病ヲ誘發スルアリ

解剖 腸粘膜炎青色又ハ赤褐色ヲ呈シ靜

脈充血ス久シク病ムニ石盤様色ヲ呈ス粘膜炎腫脹シ膿胞ニ往ニ増大シ粘膜炎粘稠ニ粘液ヲ被シ

慢性腸炎加蓋見ニ流着スニ變化中ニモトモノ腸壁ノ肥厚、潰瘍及腸粘膜炎潰瘍等、潰瘍ニ粘膜炎潰瘍ト膿胞潰瘍トアリ潰瘍ノ為ニ出血、穿孔ヲ呈シ或ハ瘻管ヲ形成シテ狭窄ムルアリ

症候 始メヨリ慢性モノハ發症ノ初期ニ病候ヲ

呈スサレド時トシテハ一般病候ヲ呈シ或ハ局部ニ不快ノ病候ヲ呈ス屢々ニ倦怠ニ進上衝心窩苦悶、眩暈等ヲ示フ不快ノ症状ハ放屁又ハ嘔

氣ニ申テ不快ニ往々若シ性ニ腹痛及腸ノ墜下ありテ其ノ苦ニ

大人ハ一服症候著ク其ノ苦ニ少見ハ劇甚ナリ

アリ多クハ結核ノ身体其ノ衰弱シ候々過敏及

「ホモテリ」症ヲ起ス久シク持続スハ漸次消化

障礙ヲ著ク皮膚蒼白ニシテ冷却シ脈搏緩慢

又ハ迅速ナリ食慾減退シ睡重著ク減少ス

「下痢ス」頭痛眩暈心悸亢進不眠症「ホモ

テリ」ヲ起ス或ハ「テタ」ヲ起ス「テタ」速者便

秘時ニ爽快ヲ感ス是恐ク大便硬キハ腸管内ニ

發生シ有害物ノ吸收セシ難キ為ナリ

他覺ニ亦状ハ甚ク區々ニテ腹部ノ鼓腸状ニ膨

滿シ時々「ブル」音ヲ聴ク「テタ」大腸ニ振水音ヲ証

明シ便秘時ニ宿便ヲ觸知ス腸蠕動ハ輕易ノ

刺戟ヲ加フルモ亢進ス「ホモ」必也「テタ」便通ハ関係ニ

シテ或ハ秘結シ或ハ下痢スノ「テタ」モニ「ホモ」

「テタ」固シ便秘シ一日三四回乃至毎二便通アリ

或ハ時々下劑由リテ便通ス「テタ」大腸慢性加着見

ニ便秘上下痢ト交代性ニ現ル「テタ」此場合ニハ

二三日間便秘シ次テ一日數回下痢ス「テタ」毎日「テタ」

便通アルモノアリ便ハ形ヲナサス糜粥状ニ柔軟ニシテ粘

液、水及脂肪ト混和ス「テタ」一ヶ月以上モ持続シテ毎日

數回下痢ス「テタ」

唯夜間又ハ早朝「テタ」下痢シテ日中ハ全ク健康ナリ

アリ(早晨下痢)

便秘セル者ノ便ハ暗褐色ニシテ硬ク水少ナリ周
圍ニ溝ヲ現ス、便中ニ食物ノ残渣及粘液ヲ含ミ、
粘液ハ能ク便ト混和ス或ハ脱便後ニ粘液ノこ
排泄セリ(常習便秘便ニ粘液ヲ混和ス、
或ハ薄キ粘液ヲ以テ被ル)便中ニ血液ノ混在セ
ル腸潰瘍、痔核又ハ痔瘻ノ存在セシ徵ナリ便ノ
顕微鏡的検査ハ急性症ト同ク加害見ノ部位ヲ
診断スニ價値アリ便ノ反應ハ區々ナリ酸性ノ反
応アリ其便ハ酸臭ヲ帯ビ或ハ腐敗臭ヲ放ツ
下痢便ハ粘リ氣泡ヲ含ム、是腸管内ニ異狀酸
酵及腐敗ヲ起セシ徵ナリ

本病ニ加害見性潰瘍ヲ惹スルアリモ別ニ之ガ
為ニ性状ヲ現スルナシ反復シテ便中ニ血液及
膿汁ヲ混和シハ潰瘍ノ疑ヲ惹スル本患者ノ便
中ニ大量ノ血液ヲ混和シテ稀有シ、**頑固ニシ**
且屬下痢セルモノ多クハ腸潰瘍ナリ又觸診時
ニ局部ニ圧痛アリテ患者モ亦其部ニ圧痛アリ
性疼痛ノ存在ヲ訴フハ潰瘍ノ疑アリ

診断 通年固執スル便中ノ粘液ノ存在ハ本
病ニ確徴ナリ

腸管中ノ加害見セリ大腸ニシテ時々是ノ
單獨ニ侵サルコトアリセド多クハ小腸モ亦其侵
害ニ指腸加害見ハ多クハ胃加害見ニ係ル

モミノ葉疸ヲ萎スルヤリ(胃ナニ指腸加参見)
小腸加参見、便ト粘附ト能ク混和シ便中ニ胆汁
色素ヲ含ミ胆汁ニ浮マリ然レ上皮及纖維ヲ認め
便秘ノ際大小腸何レノ加参見タルカヲ定ムル腸
ヲ洗滌スルニ大腸加参見ナルハ大量ノ膜様又ハ
硝子様粘液ヲ排出スル
イトナゲルキハ小腸加参見ニ特異ナルハ黄色ノ粘
液球及硝子様粘附片ノ存在アリトスリ
大腸加参見、結腸ニ沿ヒテ圧痛アリテ其部ニクハ
音及振水音アリ同ク便秘法若ク下痢中ニ粘
液ヲ混ズ履患部ノ大腸下部ニハ程粘液ノ
量多シ腸ヲ洗滌スル粘液排出セズ

大小腸加参見 全腸管侵サルハ常ニ下痢シ、
便中ニ胆汁ニ浮マリ細胞及消化セズ食物残渣
渣アリ且粘液ヲ含フ

豫後 原因、強弱及経過ニ関スル令モ亦豫
後ニ関スルモノニテ老人、小兒及既ニ病ノ為ニ衰弱
ナルモノハ豫後亦良シ

治療法 最も必要ナルハ食餌療法ニシテ食物ノ
少量ヲ數回ニ分テ(老年ニ体重ノ増減ニ注意ス
ベシ)脂肪(良キ牛酪)ハ小腸ノ大腸加参見ニ
用ヒ得ルモ他處ニハ多クハ不良シ食水炭素ハ
腸ヲ刺激セザルニ感ルルニ好マシクモ用フニ宜シ
餌ハ便秘ト下痢トヨリテ斟酌セザルニカズ便秘

胃牛乳、脂肪、之、ヤ、肉、類、ヲ、用、フ
下、高、ハ、却、テ、加、善、兒、ヲ、博、ス、恐、リ、**若シ**、食、餌、療、法、ニ
テ、適、当、ノ、便、通、ヲ、得、サ、ル、牛、ノ、ホ、シ、ト、ハ、油、ト、シ、テ、油、
及、石、炭、溶、液、ヲ、用、テ、浣、腸、ス、**粘、液、排、泄、ノ、目、**
的、ノ、浣、腸、ニ、用、ル、水、(三、乃、至、四、食、匙、ヲ、一、リ、ト、テ
此、ノ、水、ニ、溶、解、シ、ル、モ、) 炭、酸、ナ、トリ、ウム、ノ、土、カ、ル、ス、
泉、塩、(一、小、兒、匙、ヲ、水、一、リ、ト、シ、テ、溶、解、シ、ル、モ、) ヲ
用、フ、

下痢、ニ、特、ニ、食、餌、療、法、ヲ、要、ス、刺、身、叩、キ、肉、ノ、炙、リ、
過、キ、サ、ル、英、法、ビ、フ、テ、キ、米、ザ、コ、ク、ビ、ホ、カ、レ、等、ヲ、製、
シ、タル、コ、ク、フ、レ、半、熟、又、ハ、生、ミ、ノ、卵、茶、等、ヲ、共、フ、
脂、肪、ハ、多、ク、ハ、不、良、ナ、リ、炭、酸、水、ハ、腸、ノ、蠕、動、ヲ、亢、

進、ス、ラ、以、テ、害、アリ、考、酒、泡、沫、ヲ、生、ル、酒、氷、冷、飲、
料、果、実、砂、糖、菓、子、牛、乳、有、機、酸、野、苺、
塩、類、ハ、用、フ、カ、ラ、ス、

腹部、**温、量、法**、ハ、大、ニ、效、アリ、**便秘**、**ニ、腹部**、**按**
摩、手、指、及、電、氣、療、法、ヲ、行、フ、ク、ス、マ、ウ、ル、及、フ、テ、
イ、不、ル、モ、ハ、油、ノ、浣、腸、モ、亦、效、アリ、時、ト、シ、テ、ハ、本、症、
ニ、テ、亦、ラ、用、フ、コ、ト、ア、リ、之、ニ、ハ、土、カ、ル、ス、泉、塩、大、黄、
カ、ス、カ、ラ、サ、リ、ラ、タ、**ホ、ト、イ、リ、レ、シ、テ、用、フ、**

下痢、**ニ、阿、片、次、硝、酸、若、鉛、ヲ、用、フ、**
腸、内、容、ノ、存、在、效、ニ、サ、リ、4、**ん、酸、若、鉛、**、**ナ、フ、ト、**
此、**ト、イ、レ、ン、キ、**、**シ、テ、用、フ、**
一般、**慢性**、**腸、ノ、炎、**、**ハ、治、療、ハ、持、久、而、忍、ウ、要、ス、**
ノ、旨、易、也、

第三 盲腸炎及盲樣突起炎 甲 盲腸炎

本病解剖的位置ヨリテ尤ノ如ク區別ス

- (一) 盲腸ノ炎症即盲腸炎
 - (二) 盲樣突起ノ炎症即盲樣突起炎
 - (三) 盲腸及盲樣突起ヲ被テ復タル腹膜ノ炎症即盲腸周圍炎、盲樣突起周圍炎
 - (四) 盲腸周圍ノ結締織ヲ即盲腸背炎
- 此各種ノモノヲ獨ニ現ル、一ト少ナクモテ多クハ相保甚ス

△原因 盲腸炎ハ十五歳及二十歳ニ多ク男子ニ多シ多クハ宿便ニ原因シ(高便性盲腸炎)

腸カトシテ空糞及宿便便秘本病誘因トナシ又アトクニ「コレラ」性結核性及「コレラ」性潰瘍ノ本病ヲ誘致スルコトアリ

原因ハ大腸菌又ハ其他ノ菌ノ混合傳染ナリ

△解剖 盲腸ニ粘膜炎腫脹炎症、粘膜炎、過剰分泌、瀉瀉、上皮細胞脱落ヲ起シ重症ハ化膿潰瘍及穿孔等ヲ生シ盲腸ヲ破ル腹膜炎亦同時ニ侵ル

△症候 病ノ發現徐々ニシテ患者兩三日チヨリ便秘ニ付トシテハ下痢ス次ニ運動、努責及咳嗽時ニ右腸骨窩ノ疼痛アリ疼痛持続性又ハ発作性ニ近傍ニ放射ス

食慾不進時吐吃逆アリ其後熱ス、舌苔ヲ
帯リ、性口臭ラ葎ス患者甚キ衰弱及ヒ倦怠ヲ
感ス腹部ハ通ヲ鼓張シ右腸骨高ラ打診ス
濁音アリ圧痛アリ強カラサキハ腸詰挿ハ
腫瘍ヲ盲腸ニ致ス位至ニテ腸管下ヲ切シ
尿ハ熱性病ニ於ケル如キ性質ヲ有シ且ツイニガ
シノ量多シ多クハ一日乃至數回ナリニ便通ア
レハ症状消失スレバ或ハ便通アリニ拘ラズ症状存
在シ數日乃至二三週向テ緩ク漸次治癒スル
アリ

音嘶嘎シ恐怖ト疼痛ト為ニ時々ハ好害モラ
シ遂ニ口鼻中毒又ハ腸破裂ノ為ニ昏睡シテ死
ス但チコレテ斯ノ如キ症ハ稀有シ
往々経過中ニ盲腸周囲ヲ穿スルアリ此症ハ
奈病直後ニ起リ或ハ數日後ニ起ル其症狀ハ滲
出物ヲ將水液纖維素性ト膿性トニ由リテ大
差アリ將水液纖維素性トハ回腸盲腸部ニ境界
不整トシ硬キ大腫瘍アリ時ニ此部ニ腹膜摩擦音
ヲ聴取シ多クハ右下肢ニ向ヘ放射性疼痛知覺モ
常及シ腫アリ膿性トモハ惡寒ヲ發傷ト熱四
十度ニ達シ廻盲腸部ノ腫瘍久クハ小サシ圧痛強
ニ甚シテハ汎漫性腹膜炎ヲ發ス但チ多クハ化

膿盲腸ニ限局シ手術ヲ行ハサルモ盲腸又ハ前腹壁ニ穿孔ス患者常ニ其右下肢ヲ屈曲外轉位ニ置キ保フ滲出液ヲ為シ腸管竈ノ神經及血管ヲ壓迫セリ。右下肢ニ浮腫ニ知覺ニ異常及神經痛ヲ發ス。化膿部ノ前方ニ穿孔スル場合ハ盲腸部ハ皮ヲ浮腫シプル。ハルトキ靱帶上ハ皮下靜脈擴張シ甚クテ著明ノ波動ヲ解知ス。便通後一周日ヲ経ルモ尚盲腸部ノ疼痛、熱、腹膜炎症候アルハ化膿ト認メテ可シ稀ニ膿他ノ通路ヲ取リテ膀胱、膈、直腸ニ穿孔スルアリ。又膿汁ノ腸腰筋ニ沿ヒテ下降シプル。ハルトキ靱帶ヲ通シテ上腿ニ達スルアリ。

轉帰 小兒ノ通常佳良ナレバ大人ハ不良シ往ニ急性症状消失シ経過良キガ如ク見ルニ症數日後急ニ再ニ発熱シテ増悪スルアリ。其他腹膜炎、腸穿孔、自家液中ニ毒ヲ及スルアリ。ラツテ、豫后ヲ定ムルニ大ニ注意スラ要ス。

診断 迴腸盲腸部ノ疼痛、圧痛、腫瘍、発熱、及病前ヨリ持続シタル便秘、鼓腸症及嘔吐ニ注意スルニシテ盲腸周囲片ノ診断ニ惡寒、戦慄及莫大ニ急性若クハ不整ノ境界ヲ有ル腫瘍ノ存在ヲ推シ。

鑑別診断 (一) 宿便 其質泥状ニ圧痛モ (二) 腰肋膿瘍 患者盲腸周囲炎ノ如ク下肢ヲ

屈曲スサレド膿瘍深部ニ存スルヲ以テ打診ハ鼓音ヲ奏シ圧痛弱ク、発生後慢ナリ其他此症ハ腸及腹腹ノ刺戟症候缺ルシ骨盤又ハ脊柱或部ハ疼痛ノ存スルアリ

療法 阿片ヲ共ニテ腸蠕動ヲ安靜ナラシム、疼痛アリテ患部ニ氷嚢ヲ貼シ或ハ數大條氷蛇ヲ用テ患者ハ就禱セシメ全運途中深ク食物ニ注意シ刺戟性ナキ流動性食物即チ乳ヲ以テ之

瘰癧 纖維素性者自腸周圍ニハ限血性濕濕電法、吸水亦ハ外用スルヲ要ス、膿性周圍ニハ外科的療法ヲ施スルヲ要シテ之ヲ周圍ニ

過半ハ前者ニシテ以テ手術ヲ要セシテ治ス、周圍ニ虚脱ノ症状吐瀉、悪寒、發熱ヲ起シタルハ手術ヲ要ス

(乙) 虫様突起炎

異物アリテ虫様突起ニ侵入スルハ其部ニ激衝ヲ及スル異物ハ食物ト共ニ盲腸ニ達シタル果實ハ核、魚骨ヲ並ニ胆石、腸石、系石ヲ生ズリ、又虫様突起内ニハ形成セリタル異物アリ

即チ虫様突起ノ轉換若クハ屈曲シテ循環障礙碍ヲ起シ鬱血性充血ヲ起シタル場合ニ其分泌物流出ノ障碍セシテ濃液トナリ腸石ヲ形成スルコト

○由ニ精究起ル

虫様突起ノ粘膜、肺組織ニ富リサリキモ之
ノ扁形腺ニ比シテ多ク而腸管共ニ最モ細菌ニ富リ
腔ニ接シ屢々、細菌ヲ含ム内容物ニ由リテ腺ノ
分泌促進、粘膜ノ刺激ヲ来ス

虫様突起ノ腸管、扶斯ト希薄、結核ノ侵
ストコロトナリテ、大腸加者見此部ニ波及ス
又遊走性ノ本病ヲ誘發ストテ、從テ諸モノ
実験ニ依リテ見期ニ、虫様突起開口ニ成
長スニ從ヒテ其一部分若シテ全部閉鎖ス虫様
突起閉塞スルハ、必物蓄積ス或ハ血白ノ者
ニ壞死ノ其部ニ激衝ヲ起ス或ハ一二ノ血管及神
經ニ原發性疾患ヲ発シテ、虫様突起ノ原發
性障礙ヲ誘起シ、細菌傳染ノ門ヲ開クアリ、
虫様突起ノ轉位及畸形モ亦性々本病ノ誘
因トナリ

以上ノ事項、何レモ本病ノ誘因トナシテ、其
原因トナシ、細菌ノ侵入シ、而シテ本病ハ大腸菌又
ハ他人細菌ノ混合傳染ニ因リテ起ル
本病ハ、十歳以下ニ多ク、三十歳ニ多クシ

解剖

フオウレルモ、虫様突起ノ各組織ニ於
ケル病的機轉、其變遷ニ從ヒテ之ヲ凡ノ四期ニ區
別ス

一、第一期 虫様突起内膿存 粘膜及粘膜下

層ニ多ク存スルヲ云フ

盲腸部ノ抵抗、圧痛、熱感等ノ病状同一ナルニ
漿液纖維素性中核実包カ、硬子ハ粘
膜ニシテ、極ハ之ニ同持統ニシテ、感返ニ同
時ニ廻腸盲腸部ニ於テ、圧痛及腫起共ニ消失
シ、二週乃至三週間ニシテ、決シテ復強トシテ、呼吸セ
らん。

セド、遠程実起カ、多、數ハ膿性ニシテ、其膿瘍
ハ腹部ノ深部ニ於テ、我腹内ニ包被セ、且実包
ニ移カスル腸ノ上ニ在ルヲ以テ、波動ヲ検知シ難
ク、テ直接ニ膿瘍ヲ認メ、維キテ、極モ
亦唯末期ニシテ、弛張スルニシテ、以テ之ヲ膿性
液ニシテ、指シ、病後トス、テ、故ニ概シテ

其後病後數日、硬ルモ、疼痛増劇ニ一般、病後佳
良ナラズ、或、慄ニ伴ヒ、体温上昇、腸内容排泄ス
ルモ、尚腫瘍大サ及知覚過敏ヲ増ス、テ、殆ト、確實ニ膿
性膿核実起、周囲カ、診斷ヲ下シ、以テ、試験穿刺又ハ
試験切開ヲ施セ、其診斷殊ニ確實シ

膿性膿核実起カ、汎発膿性腹膜炎ヲ保ス、
ル、恐アリ、然レ、未ダ穿孔ノ為ニ、決シテ、生シ、タ
リ、テ、記、以、シ、ル、本、病、初、日、ニ、於、テ、既、ニ、腹、膜、炎、ヲ
發ス、テ、アリ、(是、亦、性、穿、孔、性、中、核、実、起、カ、) サ、レ、ド、
多ク、ハ、斯、如、ク、徑、過、急、性、ト、ス、又、医、師、ハ、患、者、ヲ、
起、ル、ニ、次、テ、汎、發、性、腹、膜、炎、ヲ、診、斷、シ、タ、リ、
患、者、實、起、同、因、カ、於、膿、瘍、限、局、ス、ル、ハ、數、日、又、ハ

数週後ニ膿瘍穿孔スル最トシ屢々穿孔スル場
下ニ膿瘍壁ニテ往々内臓内臓ニ七目腸ニ穿孔
ノ穿孔ニ勝徒ニシテ膿瘍ニ穿孔スル病竈、義膿
ニ包シ固クシテ為ニ通テ腹腔内ニ穿孔スル其
往々膿汁中骨盤内ニ沈降シテ腹腔内ニ其
排泄時ニ劇痛ヲ起シ下腹人知ラズトシ又ハ
床ニ寄テ坐スル或ハ襦袢固ク陰莖ハ勃起右腎
丸ノ上昇シテ痛ヲ起シ是ニ著シキ印ヲ遺スル膿
膿ノ為ニ圧迫スルコトニ因ル
亞急性膿瘍起ル又ハ慢性膿瘍起ル
起ル後慢ニシテ化膿スル拘ラズ亦候歟
其々々々相ク向野性又ハ弛張性也

慢性膿瘍起ル又ハ慢性膿瘍起ル
急性ヨリ轉シ或ハ始メヨリ慢性トナリテ現ル因
有ルハ屢々再發スルナリ

各種傳染病(室狹則、赤痢、結核、放線
状菌等)ノ七目腸及盲腸起ルコト居ルナリ

△**診断** 疼痛、圧痛、逆之盲部、腫瘍、食慾
不進、悪心、嘔吐、下痢、消化障礙、起ル腸鳴、血
少、不正子ニ起ル右腸異常ニ於テ腫瘍ハ
認知、診斷的價値アリ其收斂ヲ知ルニ試
験、穿刺ヲ試スル膿ヲ認ムル膿瘍、診斷
確定ナリ

△**鑑別診断**

一) 患此症者起亦痛、胆石、腎石疼痛及腸痛

胆石亦痛、疼痛腹部、右側、限局、好方

及肩胛、放射、腸、胆、胆囊部、即、乳

胸、之、延長、肋、肋、部、之、疼痛、あり、病

痛、好、黃、疸、之、苦、便、及、尿、之、検、之、ハ、容易、

胆汁、流、之、障、碍、ヲ、認、ム、ル、也、

右側、腎、石、痛、ハ、右、腰、部、之、疼痛、ヲ、表、シ、腸、乃

肢、之、放、散、ス、尿、意、頻、數、及、尿、之、濁、也、

尿、之、粘、性、之、尿、及、膿、ヲ、含、ム

腸、石、痛、ハ、迴、盲、部、之、疼痛、アリ、及、此、放、散、ス

ハ、消、散、ス、患、此、症、者、起、ハ、初、痛、ハ、放、散、ス、モ、消、散、

セ、且、マ、ウ、ク、不、レ、一、七、區、之、痛、アリ、黃、疸、ナ、リ、尿

ハ、長、ク、シ、其、他、大、腸、痛、ハ、多、ク、莫、延、性、ト

疼痛、大、腸、之、部、ニ、在、リ、大、腸、加、長、見、ハ、腸、乃

増、高、元、進、シ、テ、下、痢、ス、モ、患、此、症、者、起、ハ、痛、

一、時、便、秘、ス

二) 患、此、症、者、起、亦、ト、患、此、症、者、起、亦、痛、ト、區、別

亦、痛、ハ、熱、ナ、キ、モ、寒、ニ、ハ、寒、熱、ス、亦、痛、ハ、痛、ヲ、止

ル、患、此、症、者、起、ニ、解、シ、圧、痛、迫、ラ、カ、ル、モ、過、敏、ナ、リ、

患、此、症、者、起、ニ、腫、瘍、アリ、テ、出、迫、ス、ハ、過、敏、ナ、リ、

患、此、症、者、起、ハ、再、三、反、復、シ、ル、モ、現、出、ス、レ、モ

慢、性、ト、患、此、症、者、起、ハ、一、症、腫、ハ、接、性、腹、腹

半ト誤認スルアリ

豫后 輕症其相突起タル生命ニ對スル豫
後佳良シ、但再發シタル又外觀的ニ輕症
トモ定然重症ニ陥リ、危險症ヲ發スルアリ

膿性赤瘻突起タル甚ク危險ナル疾患ニテ好時
期ニ外科的瘻化ヲ行ハセバ豫後不良シ

疝候、強弱ニ病ノ輕重ノ標準トシテ、例ハ
之極劇痛アリモ腸ノ腸ニ穿孔スルキ數日ヲ輕

快シ或ハ外観的輕症ナルモ數日ト突然
汎漫性敗血性腹膜炎ヲ發スルヤカリ汎漫性腹
膜炎タル甚病ナルニ及ビ、内腸間ニ及スルモ多シ
ノ危險症ナル者甚ナリ

重症ノ赤瘻突起タル多クノ危險ニ及ビ自然ニ治癒
スルモノモ亦多シ

品毛危險ナル赤瘻突起、穿孔ニ至リ、蔓延性膿
性赤瘻突起タル比較的豫後不良ナリ

瘻法 盲腸周囲タル或ハ赤瘻突起周囲タル外
科ニ屬スルモノナリ、トハ多數ノ外科医ノ主張スル上ニ

口ニ外科医ニ未ダ之ニ同意ス、
豫防治法トシテ、果實ノ核、骨片及粗大ノ不消化

食物ヲ嚥下セザルヤ、注意シ且便通ヲ正規ナラ
シムルヲ要ス

瘻作ノ瘻法 品毛必要ナルハ、射入安靜ニ
患者、臥床ニ就カシメ、成心ニ腹壁ノ弛緩ニ位

至之取り大小便ハ襠中ニ排泄セテ決メ身体運
動セシムルカラス腸ノ安靜モ亦甚ク必要ナルヤ日
唯水亦少量ヲ用ヒバハミナシ病状ニヨリテハ粥
汁ソフテ葛湯、茶了ラ興フンモ可シ吐棄
病者ハ穿孔ニ全ク飲食ヲ禁ス水ヲ口内ニ
含マシムル患者處決テ感ス數日ヲ経過スルハ牛
乳、鶏卵了ラ共ニ扱及疼痛消散スルハ
アキ肉、刺身等ヲ許スモ可シ
藥劑的療法 是モ必要ナル藥劑ハ阿片ナリ、
阿片ハ腸ノ蠕動ヲ静止セ及射興奮性ヲ減シ
之カ為ニ癒着ヲ容ルルナラシメテ腹膜をラ限
局セシムルナラシク腸震盪ヲ減シ嘔吐、筋肉

不安及睡眠ニ對シテモ良好ニ用アリ其他渴ヲ
減シ利尿ノ效アリトモナリ

凡テ阿片ノ濫用ニ注意セサルカラス然ラサレハ腸麻痺
ヲ起シテ終生治シ難キ頑固ノ便秘ヲ残スルハ
膿性又ハ穿孔性ガ様突起炎汎発性腹膜炎ニ
モ亦阿片ヲ用フシトモ虚脱着ク敗血症ノ症状現
ハルニ直ニ其使用ヲ中止セサルベカラズ
其ノ如ク阿片ハ昔ノ様ニ突起炎ノ主藥トシテ用ラ
ルレバ其使用ハ輒近殊ニ外科医ノ非難スルナラ
トセリソハ阿片ノ(一)病徴ヲ隠匿スル(二)腸ハ
麻痺セシムル恐アリト爲シ
下劑用フカス病後數日ハ便通ナラズ

テ置キテ可ク排便ノ必要アリ時ニ浣腸法ヲ行フ
ラ可トス但之ヲ行フニ腸ノ刺戟及煖衝ノ去リ
タル後ナルヲ要ス

高熱及疼痛劇キ片ニ廻首部ニ氷嚢ヲ貼
之或ハ全ク之上及對ニプリスニツキ置法又ハ溫糜
粥置法ヲ行フ兩者何レヲ用フキカハ患者ノ自
覺ニ依リキモ擲メテハ煖衝劇シテ冷却ニ煖
衝去リテ硬結ヲ殘見モノハ溫保スルヲ可トス病
初ニ於テ水蛭ハ貼用ハ時ニテ可ク奏スルヲ可
漿液纖維素性滲出物存在スル片ハ「灰度
」及「加里軟膏」ハ「灰」交ホルハ「コ」チヤム「灰白軟
膏」ニテ貼ス

治癒後ニ便通ニ注意シハ良愈ヲ生ラシム
本患者ヲ外科医ニ託ス時期ニ就テハ近時論
争盛ナリキ外科医ハ凡テノ患部ヲ起ル
既ニ診テ新セシムルハ悉クテ手付ラ行ハト主
張セリ

第四 腸潰瘍

(甲) 消化性潰瘍

ロイヘ氏ハ腸管ニ灌注シタル酸性胃液ノ為ニ起ル
潰瘍ヲ消化性潰瘍ト名ケタリ此模型トスベキハ
消化性十二指腸潰瘍ナリ

原因 胃潰瘍ニ等シク血栓、栓塞、血塞ハ
アテロームヨリテ十二指腸粘膜炎、血行障碍ノ起

腸潰瘍 尚ヒ生

（月）
ハ多ク際塩酸ニ富ムル胃液来リ弱ルハ牛ハ潰瘍
ヲ患ヌ其他ハ小腸ニヨリテ十二指腸潰瘍ヲ發ス
ルコトアリ本病ハ胃潰瘍ニ及シテ少年ニ發スル
甚ク多ク三ノ三十歳及至六十歳ノ者ニ發スルコト多
ク田カ子ニ多ク

解剖 十二指腸潰瘍ハ全ク胃潰瘍ニ同シク
漏斗状ヲナシ階段状ニ陥没シ漏斗ノ尖端腸液
膜ニ向ヘリ潰瘍ハ通常一個ナリ
十二指腸潰瘍ハ好クテ其上地平部ニ於ケル後壁
ノ幽門ニ近キ場所ニ占居ス罕クニアリテハ憩
室以下ニ於ケルヲ見ルコトアリ
潰瘍ハ或ハ癒痕ヲ結ビテ癒エ或ハ深部ニ侵蝕

シテ潰瘍ニ致シテハ腸液膜ニ限局性腹膜
炎ヲ發シ之ガ為ニ十二指腸ト胆嚢ト肝ト胃脾
ト近接シ血官及結腸ト癒着ヲ生ズ若シ
潰瘍大血管ヲ侵スハ大量ノ出血ヲ生ズルコト
潰瘍穿孔スルバ或ハ汎発性腹膜炎ヲ起シ或
ハ局所性腹膜炎ヲ患ヌ
往々潰瘍ノ癒痕ヲ結ビテ十二指腸ノ狭窄ヲ
發シ其結果胃擴張症ヲ統患スルコトアリ
潰瘍ニアリテハ憩室部ニ占居スルハ**重痕**
ヲ發ス
症候 往々生前ニ症候ヲ現ハス剖見時始
メテ發見スルコトアリ或ハ初メテ症候ヲ呈セスノ

急に出血又は歯孔ヲ起スルヲ多クノ場合ニハ
食後三乃至四時間即チ胃内容ノ十二指腸ヲ輸
送セシメタル時刻ニ劇痛ヲ發ス。發作間歇時ニハ
疼痛全ク消失ス。或ハ僅ニ存在ス。疼痛ヲ感スル
場所ハ右季肋部ニ於テ正中線ヨリ右方右副
胸骨線ハ延長線ニ當リ凡ソ胆嚢以下ニ仙達
ノ部位ニアリ

或ハ學者ハ本病固有ノ症候トシテ朝食後二時
間半ニ發スル疼痛ハ酒類ヲ飲用スルニ由リテ止ミ
晝食後凡三時ニ發スル疼痛ハ酒類ヲ飲用スル
ニ由リテ少ク凡一時輕快スト云ヘリ
屢々患部ニ圧痛アリ脊椎ノ圧痛点ハ胃潰瘍

瘍ノ如ク著明ナク食慾ハ概テ存シ屢々嘔吐アリ嘔
吐屢々疼痛ノ極期ニ發シ嘔吐スル疼痛緩解
出血殊ニ下血吐血ヨリモ診斷上必要ナリノトナ
リゲルキニ依リ本病ニ分ルニ於テ出血ヲ見ルニ云
潰瘍ノ近接臓器ト癒着シタルハ其部ニ抵抗
ヲ弱ル穿孔スルハ虚脱ニ由リテ暫時ニ死シ或ハ汎發
性腹膜炎ヲ發シ或ハ膿瘍ヲ成ス。癒痕狹窄
ヲ来セシ用ヲ擴張ラ費ス
本病ハ慢性ノ經過ヲ取リ胃潰瘍ノ如ク屢々再
發ス

鑑別診斷 胃潰瘍トシ鑑別
○十二指腸潰瘍 ○胃潰瘍

(一) 厚く疼痛甚作ヲ来ス即チ食後三、四時間ニ止ス	(一)
(二) 疼痛ノ部位 十二指腸部	(二)
(三) 限局ニ通テ背痛ナリ	(三) 頻數シ
又脊椎ニ疼痛点ナリ	
(三) 嘔吐 稀ナリ	
(四) 吐血 少シ	
(五) 下血 多シ	
(六) 黄道ヲ穿テ下リ	
豫后 概テ胃潰瘍ニ同シ	
療法 胃潰瘍ニ同シ	
	(三) 頻數シ
	(四) 多シ
	(五) 少シ
	(六) 多シ

乙 腸結核

諸内臓中腸ハ肺臓ニ次テ最モ屢々慢性結核ニ罹ル本病ハ多クハ流痰性ニテ肺ノ喉頭ヨリ分泌シタル結核菌ヲ含シ粘液ノ嚥下ニ由リテ發ス胃ノ酸性胃液ハ結核菌ヲ撲滅セシマテモ多少之ヲ防禦スル力ハ小腸ニ同腸ハ腸液ノアルカク性ナリト内容物ノ停滞スルト爲ニ傳染ス機會多シ

性腸結核ハ特モ此傳染ハ結核菌ヲ有スル牛乳、牛酪、乾酪及結核性ノ母又ハ乳母ヨリ来リ又恐クハ結核ヲ有ス動物ノ肉ヲ十分ニ炙若セズシテ食シタル爲又ハ結核患者ノ使用シタル食料易吉矣

（月分）

器ヲ用ヒラシメ為ニモ傳導スルコトアリ

解剖 小腸殊ニ其下部並ニ盲腸ニ潰瘍カ
多ク其潰瘍通常腸ノ後軸ニ對シテ横徑ニ延長
スルモノナリ或ハ後軸ノ方向ニ延長シ或ハ全ク不規則
ノ形狀ヲ呈スルコトアリ

症候 癸病多クハ徐々ナリ固有タル下痢ニシテ日
二三回乃至數回便通アリ便軟便又ハ稀薄液
狀ニテ多量ノ灰白黃色ノ雲絮片ヲ混ス之ヲ鏡
換スハ膿、結核菌、脂肪及脂酸結晶ヲ認ム往々
潰瘍面ニ小出血アリ之ハマシキノ為ニ便暗褐色
乃至赤色ヲ呈スルコトアリ其他不消化性ノ食物殘
渣及粘液小片ノ便中ニ混スルヲ見ル

疼痛ハ全經過中缺クルコトアリ少見ニアリテ往々
腫大セル腸間膜腺ニ觸ル主ニ小腸ノ侵サレタル片ハ
往々便秘スルコトアリ大腸ノ侵サレタル片ハ劇ク下痢
ス而シテ盲目腸侵サレハ盲腸水又ハ果糖突起
第ノ症候ヲ癸シ直腸侵サレハ直腸水又ハ腸
周囲水ヲ呈ス

患者ノ一般症候ハ概ネ甚ク障礙セシ且甚ク
羸瘦シ居ヤ下腹ニ浮腫ヲ呈ス

診断 下痢、果糖便中ニ血液若シハ膿、混有並ニ
疼痛等ニ依ル腸結核ノ症候アリテ他ノ臟器ニ
結核性病變アルキヲ腸結核ト看做ス之ヲ肺
ニ病變ナキハ便中ノ結核菌ノ證明ヲ要ス

固心下痢、日嘔潮熱、盜汗、衰弱、腸間膜腺腫等アルモノ、腸結核ト認ム

豫後 不良

療法 豫防法

肺結核患者ハ咯血ヲ患下セムハカラス疑ハキチ乳若クハ生肉ヲ用スカラス

療法トモ必要ナル衛生上ハ注意及食餌療法

腸下部潰瘍ノ存スルヲ目撃スルハ強キ硝酸

銀溶液又ハ硝酸銀ノ溶液ヲ以テ直接ニ所置ス

若ク直接ニ目撃セザレバ潰瘍ノ結腸下部ニ存ス

ヲ知ルモノハ硝酸銀又ハ硝酸ノ溶液ヲ注スル潰瘍

小腸ニ者ハ止血ト大量(一日三回)ノ硝酸銀下

痢強キハ阿片明礬等ニルマトリシ等ヲ試ム

其他下痢ニカシ
トフカムカシ
ダンナヒシ等ヲ
用フ

第九 下痢

稀薄、糜粥状若クハ液状、便ノ反覆ノ排泄スルヲ

下痢ト稱ス

原因

(一)食物ノ配合、性状及腸内容ノ異常ニ

由リテ下痢ヲ起ス

多量ノ液狀殊ニ炭酸含有ノ飲料ヲ取ルキハ下痢

ス又下痢ヲ服スルキ或ハ腸蠕動ノ亢進ニ由リ或

ハ腸管内ノ漏ル機ノ亢進ニ由リテ下痢ス未熟

果実牛乳野菜等ノ食物或ハ腐敗物ヲ攝

取ルキハ下痢ス又一定ノ食物ニ對シテ特異性

アリテ下痢スルヲ腸内容久シク蓄積スルキハ腐

敗シテ刺戟性物質ヲ生シ下痢スルヲアリ

バ等ノ原始虫ニヨリテモ亦下痢ヲ惹ス

(二)腸管ノ疾病ニ由リテ下痢ヲ惹ス

動脈性充血ハ多クハ下痢ス

(三)神経性下痢此原因ニ様アリ其ハ腸蠕動

ヲ催進スル神経ノ刺戟セラルル為ラシ他ハ神経作

用ニ由リテ腸管内漿液性滲出液ハ催進セラル

為シ此等ハ此二原因ノ同時ニ存スルコト多クハ

本症ノ例トシテモキハ精神感動ニ由リテ下痢

腸粘膜ノ知覚過敏ハ屢々見ユルコトアリ及神經衰

弱症ニ現ルルニ此場合ニ通常ノ腸内容

由リテ腸ノ刺戟ヲ受ケ其蠕動催進ス又或食

物ニ對シテ一種ノ特異質ヲ有シ其食物ヲ取ル

下痢スル者アリ胃及他ノ臟器例之ハ子宮ノ疾

患等ニ由リテモ屢々下痢ヲ惹スルコトアリ其他

脊髄癆患者ノ往々下痢ヲ惹スルヲ見

全身又ハ局部(腹部若クハ局部)ノ冷却及

浸潤ニ由リテモ下痢ヲ惹ス

(四)腸以外ノ消化器疾患ニ由リテ下痢スルコトアリ

例ハ輸胆管閉塞ノ胆汁ヲ流出障礙セラルル俾

秘ラザル腸内ノ消化甚ク障礙セラル腸内容酸

酵腐敗ラズルコトアリ

胃疾患モ亦下痢ヲ惹ス例之ハ胃酸缺乏症ニ

於テハ塩酸ノ分泌甚ク減少シ腸内ノ酸酵腐敗

敗ラズルコトアリ

五) 血液ノ性状變化ニ由リテ下痢スルハ、**依リテ**
了リテ、**病毒**ニ由リテ下痢シ、**塩規**療法ニ依リテ
治療スルカカシ

六) トリソール氏ニ據ルハ、**衰弱**ニ由リテ下痢スルハ、
アリトシテ

豫後 良

療法 先ヅ原因療法ヲ試ムベシ

消化不良性及サ菌便性下痢ニハ、**下痢**ヲ投ス

下痢ノ濫用ニ因ル下痢ニ、**阿片**劑ヲ用ヒ或ハ**温**

罂法ヲ行フ

寧可生虫ニ取ル**療法**ヲ試ム

神速性下痢ニ先ヅ**收斂**劑ヲ與ヘ而シテ患者

ヲ**鼓舞**シテ**精神的**療法ヲ行フヲ要ス、**水**治療法
及**電氣**治療法ヲ施シ、**臭**劑及**砒石**ヲ處ス

反射性ニ来ル下痢ニ、**原因**療法ヲ行ハサントカラス

腸ノ弛緩ニ因ル下痢ニ、**電氣**療法、**按摩**手法

等致アリ

感冒性下痢ニ、**汗**療法ヲ行フ

對症的療法ノ第一ハ、**食餌**療法ナリ、即チ成ニ

ベシ**腸**ヲ刺戟セザル**食物**ヲ發シ、**急性**ニ結滯性

ノ下痢ニ、**煎**粥汁、**濃**白ふん茶、**葛**

湯、**水**飴等ヲ少量允共、**二**日ヲ経テ**急性**

症状消滅スルハ、**藥**ニ、**臭**軒等ヲ與ヘ、**飲料**

トシテハ、**水**、**赤葡萄**、**酒**、**リ**モナトテ、**用**ヒ、**管**

塩水及炭酸含有、飲料ラ其ある
 慢性下痢ニ、刺激性並ニ残渣多キ食物ヲ
 避ク、牛乳ハ最モ此場合ニ用スルニ適スル性
 牛乳ヲ用シ、下痢ヲ起テ、特異性ノ人アリ、
 牛乳ニ石灰水コシニマツルカ、ホ、等ヲ加ヘ又ツ、
 温ク用スルハ、多少下利ヲ防グイアリ、下利ノ輕
 快スル共ニ漸次食物ノ量ヲ増シ、鶏肉(孫ニ其
 子ノ子)鳩、脂肪少キ魚肉、卸大根等ヲ與フ
 藥劑的療法、最モ必要ナル、**何片示シ**
 菅根類、各種ノ下利ニ效アリ
 厚皮ノ往時多ク用スルモ、胃ヲ害スルニシテ
 近時ハ其製劑的ニシテ、**マンニル**、**ヒン**、**レ**ヲ用フ

第十 便秘

排便通常ノ如クナラズ、久シキ間歇ヲ以テ排泄シ
 或ハ唯、医療ニ由リテ、人ニ排泄スルヲ便秘トス
 原因、便秘ノ原因ハ甚ク種々ナリ、之ヲ區別ノ身
 外原因及射内原因トナス
 (甲)射外性原因、(一)食物ハ最モ必要ナル原因ニシテ
 多量ノ液射ヲ攝取スルハ、概シテ便秘トシ、飲食物
 中、茶、咖啡、單寧ヲ含ムモノ、便秘ヲ来ス、植物
 纖維ニ富ムモノ、**便通**ヲ多クス
 (二)習慣及生活法ハ、**便通**ニ大ナル關係アリ、例之バ、婦
 人ノ如キ、又、際上、**便意**ヲ抑制スル、**習慣**スルモノ
 職業上、**旅**行スルモノ、**常**ニ坐、**坐**、**抑**、**抑**、**抑**、**抑**
 更ニ必

(一) 便秘の常態
 常態の腸運動は、通常、運動不足、少キモノ、便秘は易シ
 (二) 腸内性原因
 此原因ノ大部分は消化器ニシ
 氏大部分は他臟器ノ病的變化ニアリ
 (三) 多數ノ腸脊髓病患者、神經病及精神病
 便秘ヲ發ス
 (四) 糖尿ノ病
 尿ヨリシテ多量ノ水分ヲ失ヒ組織ノ水分缺乏シ、腸内容ノ水分多ク吸収セラル、ラシテ屢々便秘ヲ發ス
 (五) 萎黃病及貧血
 屢々便秘ヲ來ス、腸筋肉弛緩ニ因ル
 (六) 熱性病
 於ケル便秘、運動減少、肺及汗腺機能ノ亢進並ニ食量ノ減少ニ因ル

(一) 腸ニ關係シ有ル原因中腸管外ノ腫瘍及腹膜炎性索狀物、腸狭窄、腫瘍、腸屈曲及轉接、攝護腺肥大、子宮ノ增大又ハ轉位等之ヲ一言ニ覆ハ、急性及慢性腸閉塞ヲ發スル凡テノ場合ハ便秘ヲ來ス
 (二) 消化器中ノ腸以外ノ臟器ニ於ケル疾患ニ因リテモ亦便秘ヲ來ス例之ハ塩酸過多症及胃潰瘍等、如シ是塩酸ノ細菌ヲ撲滅メ腸内ノ酸酵腐敗ヲ制止スルヲ以テシ
 (三) 胆汁ノ腸蠕動ヲ催進スル作用アリ故ニ其腸ノ流出障礙ヨリ、牛ハ便秘ニ
 (四) ベールニ依ル、肛門括約筋ノ隨意収縮若ク直

腸肝の疾患は括約筋の反射性収縮より
便秘を来す

症候 局所性及汎発性ニ區別ス其汎発性症候
ハ中毒症状ト看做スキモハミテ頭痛眩暈
疲憊感悪心嘔吐不眠嗜眠神経痛(手足
神経痛)偏頭痛ヲ發ス尿ニインゲン反応アリ

局所性症候 腹部の圧重及膨満感放屁由リ
一時輕快シ腹部緊張鼓腸症横隔膜ノ
上舉肺臟心臓の圧迫症候(呼吸困難及心悸
亢進)等ナリ劇キ便秘ニ於テハ硬便異物ノ如クニ
腸管ヲ刺戟シ劇キ痙攣ヲ發スルコトアリ腹壁ノ菲薄

ナル者ニ往々腸蠕動ヲ目視シ糞塊ヲ觸知シ得ベシ
糞塊ノ多ク存スル部ハS状部ニ目腸及結腸ノ
屈曲部ヲ宿便ノ腸粘腔ヲ機械的及化学的刺
戟スル為ニ腸加長見潰瘍等ヲ誘起スルコトアリ

診断 原因的診断ヲ下テ往々容易ナラス宜
シク精密ニ既往症ヲ調査シ腸胃ヲ検査スルコト

療法 原因ノ大ナルニ從ヒテ適當ノ治法ヲ施ス
ベシニ日毎一便通アリテ別ニ苦悶ヲ感セザル者

ノ如キハ医治ヲ加フルヲ要セス食後因テ便秘其
食物ヲ改メシ往々飲料ノ増減ニ由リテ正規便
通ヲ得ルコトアリ又続発性便秘原病ヲ治スルヲ
要ス

本病ノ療法尤ノ如シ

一、食餌的療法 便秘ヲ来ス食物ヲ廢テ腸ノ蠕動ヲ促ス食物ヲ取テ之ハ早朝空腹時多量ノ佳良ナル冷水ヲ服スルハ便通アリ主ニ肉食スル者ノ便秘ニ植物性食物(野菜、薯蕷、柿、桃李、林檎、梨、李子等ノ果實、及其煮タレモノ)ヲ與スルハ砂糖及脂肪ニ富ミ食物例之ハ蜂蜜、牛乳、牛酪等モ亦便通ヲ助メ、濃キ茶、咖啡、赤酒、覆盆子實、カオレ、シヨコラー、ト等ハ用ヒザルヲ可ク

二、精神的療法 便秘ヲ憂懼セル患者ハ之ヲ慰諭スルハ習慣ハ頗ル必要ニシテ多クノ人ハ一定時

刺殊ニ早朝ニ一回便通アリテ翌日ノ同時刻ニ此ハ亦便意ヲ催スモノナリ故ニ患者ヲシテ毎朝一定時

刻ニ上固ニテ排便スル習慣ヲ得セシムルニ

(三)注射法 一、ガリルモ瀉水又ハ介リガト此ヲ以テ行フ水量ハ概ネ二リハ一リニ四分ハ三リトシテナリ冷水ハ腸ノ蠕動ヲ催進シ温湯ハ乾燥シタル糞塊ヲ柔軟ナラセム故ニ高度ノ宿便ニ先ヅ一リニ一、五リノテシテ温湯ヲ依キ腔ニ注入シ之ヲ尚便通ナキハ少量ノ冷水ヲ灌注スルニ

最モ頑固ニ症ハクツルモノハ、フライスルモノ油浣腸ヲ行フ其法ハ患者ヲシテ膝肘位又ハ仰臥位ヲ取ラシメ血温ハカシメ油四〇〇、〇ヲ輕キ

腔ニ注ルニ十秒間左側臥ニ十秒間右側臥ニ、
次ニ仰臥シテ便通ヲ待ツルニ注ニ後五時間ニ
シテ便通ナキハ冷水ヲ灌腸ス之ニテモ尚目的
ヲ達シ得セキハ按摩法ヲ行ヒテ能ク油ト香油便
トノ混和シテ柔軟トナリ容易ニ排泄シ得セムルヲ
要スガリスリハ少量ニ、の及五、のラ单纯ニ
浣腸ニ或ハ大量ノ水ニ和メ浣腸スルニ效アリケ
リスリハ又同一目的ニ坐薬トメ用ヒラ
四) 射撃的練習 常ニ坐薬ヲ取リ運動不
足為腸アトニ起セル者ニ免メテ散步セシメ
之ニテ效ナキハ射撃的練習ヲ行ハシム
五) 按摩法 大腸ノ蠕動ヲ亢進セシムル目的ニ

テ行ヒ腸弛緩症ニ對シテ最モ效アリ但此法ハ直ニ
效アルモノニアラズニテ數週若クハ數月ニ亙リテ效アル
モノナリ

六) 電気療法 腹筋ノ緊張力ヲ強ムル目的
ニ腹部ニ感傳電氣ヲ貼スル最モ可トス最近
ニ亙リテ直接ニ腸ニ電流ヲ應用シ其一極ヲ腸
内ニ他極ヲ腹壁ニ貼用セリ
七) 水治療法 突然寒冷ナルモノハ腹部ニ貼
スル腸蠕動ヲ亢進シテ便通ヲ促ス最モ單簡
ナル腹部ニ冷置法ヲ施スニアリ冷水及温湯ヲ交
代性ニ放射状又ハ細雨状ニ腹壁ニ灌注スルハ著效
アリ

以下劑、或心下用ヒザラフ可トス、浣腸及其他、
理学的所置、效ナキ場合又ハ行ヒ難キ場合ハ
之ヲ用フ

水ヲ服用スルニ適シタルモノハ大黃末、峻性炭酸ナ
トリウム並ニ假性マグネシヤ等ナリニ混ビタル
モノ(一日三四滿一乃至)ナリ複方甘草散モ亦適
当ナリ後下劑ニシテ水ヲ用ルニ是レ
カスカラサリラダ、及蘆薈膏ハ強キ下劑ナレモ容易ニ
習慣セシムカスカラサリラダ、或ハ流動性トナシ或ハ錠
劑ヲ劑セシ或ハサツラダ酒トシテ用フ
ホトフイリシハ蘆薈膏ハ劇キ下劑ニテ或ハソラ單
一用ヒ或ハ蘆薈若クハ心ヲトシナレト混ジテ用フ

第十三 腸寄生蟲病

人体ノ寄生蟲數ハ五十種ヲ集メテ國ニ依リテ其多クニ
著キ差異アリト概シテ云ハル野蠻國ニ多クト云フ(加納氏)
小兒ニ因テ多ク大人ニ條蟲多クシ寄生ノ人体ニ侵入
スル其卵、胎蟲及幼蟲ハ肉類野菜或ハ飲料水等
ノ飲食食物ト共ニ消化管ニ入ルニ因リ、蟻蟲及十二指
腸蟲如キ手指ノ不潔ノ為ニ傳染ラ来ス
寄生蟲ノ診斷ハ母蟲又ハ卵ヲ見出スニアリ

甲 原生動物

無構造ニシテ收縮性ヲ有スルプロトプラズマヨリ成レル
單細胞ノ有機物ハ下痢便中ニ存スセド其原始蟲ハ
下痢原因トナルカ下痢ニ併發スモナルカ將偶然ニ存
スルカ寄生トスニハ

(C) 腸管の寄生
スモナルカ、未夕明カナク

(一) グレガリーネン 図形若クハ卵圆形ニシテ長サ
〇、〇〇〇六乃至〇、〇二五密迷アリ被膜ヲ有ス
プロトプラスマハ透明ニシテ核ナキモ後ハ顆粒状ニシテ
單核ヲ有ス

(二) モナチーネン 小丸梨子状ラリシ死後ハ圆形
トナル其生活中ハ活潑ニ運動スル著シキ尖端
ヲ有ス室扶斯、腸加吞兒、肺病患者等ノ下
痢便並ニ小兒及哺乳兒ノ下痢便中ニ之ヲ見ル
(三) 大腸アミーバ 静止時ハ圆形、運動時ハ不
形シテ大サ〇、〇二乃至〇、〇三五密迷ニシ
テ一部ハ顆粒状一部ハ硝子様ノプロトプラスマ

ヨリ成リ一箇ノ図キ淡色ノ核ト核嚢ト有シ一二個乃
至數個ノ透明空胞ヲ具ス其運動及栄養物
攝取ノ擬ミノ突ケ及陥入ニ依ル
プロトバハ下痢便及赤痢便中ニ含ル

乙 滴虫

滴虫ハ顕微鏡下ニ於テ証明スニキ有機物ニシテ
其プロトプラスマハ強キ被膜ヲ有シ口ト運動器
トヲ備フ

(一) 小腸「エルクモナス」 本蟲ハ梨子状ラ呈シ〇、〇
〇八乃至〇、〇一密迷ノ大サヲ有ス其前部ハ細長
ノ鞭毛ヲ具シ他端ハ尖銳ニ尾状突起ヲ有ス
本蟲ノ療法トシテ、タンニ酸、硼酸、キ下、不浴液

消化腸ヲ行フ

(二)大腸ツルコモチ、ハ赤血球大ニシテ強ク光澤ヲ致テ稍ニ緑色ヲ帯グ鏡核ニシテ紡錘状ニシテ其前部ニ廣ク因リ一個ノ葉ヲ有シ、四個ノ細微ノ鞭モアリ他部ニ尖リ、前部ニ近キ所ニ甚ク見別ケ難キ核アリ其他多數ノ小顆粒ヲ有シ此等生貴ノ中ニ鞭毛ヲ有セザルモアリ

(三)小腸トリコモチ、長サ〇、〇一五密送幅〇、〇一密送アリ、扁核状ニシテ前部ニ纖毛ヲ有シ活潑ナル波動性運動ヲ営ミ後部ニ尾状突起アリ
(四)腸バガストトマ、梨子状ニシテ尾端細小ナリ、

肉叉状ノ尾尖、二個ノ吸盤状陥凹及四個纖毛ヲ有シ大サ〇、〇一乃至〇、〇一八密送アリ本虫ノ小腸上部ニ寄生ス其大腸ニ存スルモノ囊ヲ被リテ楕圓形ヲ呈シ纖毛ヲ透見シ得シ

本虫ノ療法ハ腸ツルコモチニ同シ
(五)大腸バランチ、ウム、卵圓形ニシテ縦徑〇、〇一乃至〇、〇七密送、横徑〇、〇五乃至〇、〇八密送アリ全周ニ鬃毛縁ヲ有シ内容ハ顆粒状ニシテ透明ナル被膜ヲ以テ被ル貴体内ニ食物成分即チ食物残渣ノ外赤白血球及二個ノ収縮スルキ空胞ヲ認め、体ノ尖部ニ口アリテ漏斗状ニ食道ニ移行シ他端ニ肛門ヲ有ス本虫ハ頑固ナ

疥及腸管扶斯便中ニ存ス

療法 温湯ニ醋及クニシ酸ヲ加ケルモ人(水一
〇〇〇、〇醋五〇、〇單密五、〇)ノ浣腸又
ハキテ不内服及浣腸ヲ称用ス

丙 條虫類

條虫ハ頭部長キ頸及多數ノ片節ヨリ成ル片
節ノ頭部ヲ遠ガカル程古ク新片節ノ節ノ統々頭部
ニ及生ス此片節各一個獨立ノ生活体ニシテ雌
雄兩性ヲ具シ其成熟シ名子宮ニ胎虫ヲ含メ
ル卵アリ時々二個若クハ數個ノ片節其連鎖
ヲ脱シテ或ハ單獨ニ或ハ糞便ト共ニ外界ニ排泄
セラル條虫卵ハ豚、牛、犬、鼠、猿、羊、鱒、鮭

等ノ中間宿主ノ胃中ニ入ル牛ハ其卵膜消化セラレ
而テ遊離シラ子虫種々臟器殊ニ筋肉ニ達
シ被膜ヲ以テ包裏セラル斯ノ如キ状態ニ於テ幼
虫ヲ囊虫ト稱ス此囊虫ノ中間宿主ノ筋肉ト
共ニ人類ノ胃ニ達スル牛ハ茲ニ條虫ヲ生ス

條虫ハ其頭部ニ吸盤ヲ有シ之ニ依リテ腸粘膜
ニ附着ス而シテ條虫ハ其頭部ノ形狀ニ依リ之ヲ
有鈎條虫、無鈎條虫及裂頭條虫ニ區別
シ有鈎條虫 完全ニ發育スルハ二及三ミ長ハ
長サヲ有シ其頭部ハ帽針頭大ニシテ類四角形ヲ
呈シ四個稀ニ六個著色セル吸盤ヲ備ヘ頂ニ吻
狀突起アリ其周圍ニ鈎環ヲ繞テ頭細キ頸ヲ

以テ片節連鎖ニ接続シ最終ノ百個ノ片節ニ成
熟シテ飽核ノ類似ス其大サ長サニ似テ幅ニ
分ノ仙迷ナリ各片節ノ邊緣ニ微カク臍状隆
起物アリ子宮ハ体ノ中央ニテ止中線ニ直角
管ヲ具ヘ之ヨリ鉛直ニ八個ノ十個ノ側枝ヲ發
シ其側枝ハ側縁ニ近クニ從ヒテ樹枝状ニ分岐ス
卵ハ楕圓形若クハ四角形ニテ其縱徑〇、〇、三六密
迷横徑〇、〇、三密迷アリ厚キ褐色ノ皮殼
ヲ有ス此殼ニ放射線状ニ走行セル小線ヨリ成ル内
容顆粒状ニシテ内ニ六個ノ小鉤ヲ有ス囊中ニハ
主トシテ豚ニ存ス此條虫ニ囊中ニハ肉ヲ
食スルニ由リテ生ズ本邦ニ數ニ

(二) 無鉤條虫 有鉤條虫ヨリモ長ク四ノ
至八迷ニ及ブ片節モ亦有節條虫ヨリ長ク厚
ク且其幅長廣シ吻状突起及鉤冠ヲ有シ四個
ノ大ナル吸盤及一個ノ小ナル額吸盤アリ頸部甚
ク短シ片節ノ數千二百乃至千三百アリ其ノ
六百以下ノ片節ハ南瓜核状ヲ呈シテ成熟ス片節
ノ縱徑六乃至二〇密迷横徑五乃至七密迷ニシテ
邊緣ノ中央ニ生殖孔ニ適スル臍状隆起アリ無鉤
條虫ノ子宮側枝ハ甚ク顆多ニシテ兩側ニ於テ
二十乃至三十ノ分岐ヲ有シ其夫鰓肉又状ヲ呈ス卵
ハ有鉤條虫卵ニ類似スレドモシヨリモ淡色ニシテ
大キク固クシテ滑澤ナリ卵ノ縱徑〇、〇、四密迷

横徑〇、〇三密迷アリ本虫中間宿主牛ナリ
(三) 那々條虫 條虫中最小モノニテ長サ三
五密迷幅〇、五密迷アリ頭部ハ圓クシテ吻状
突起ト四個ノ圓キ吸盤ト具フ片断數ハ百九
十乃至二百アリ終リノ二十乃至六十ハ黃色ヲ呈シ
テ成熟シタル卵子ヲ含ム卵ハ無色透明ノ楕圓
形ニシテ殼ハ甚厚ク内外ノ二膜ヲ有ス内膜ノ兩極
ヨリ卵ノ縦徑ニ於テ外方ニ膨隆セル部アリテ強ク
光線ヲ屈折ス子蟲ハ六個ノ鉤ヲ有セリ
本虫ハ好テ小兒ヲ侵シ其囊虫ハ鼠ノ腸絨
毛ニ存ス
四 狗兒條虫 本虫ハ他ノ條虫ト異リ其

囊虫ハ却テ人類ニ存ス即チ中間宿主ハ人ニシテ大体ニ入リテ
初メテ成虫ニ發育ス條虫ノ大サ四乃至五密迷ニ過ギ
ズ頭部小ニシテ多ク小鉤ト四個吸盤ト一個吻状
突起ト有ス片断ハ三乃至四個ニシテ終末モノハ成
熟ス卵膜或ハ片断久ノ胃中ニ消化セラル遊離
シタル囊虫卵即チ包虫ハ腸管ヲ穿通シ淋巴及
血液ニ依リテ人体ノ組織殊ニ最も多ク肝臟脾臟及
腎臟ニ入り包虫胞ニ變化ス
(五) 廣節裂頭條虫 條虫中最大ナルモノニシテ
長サ五乃至九密迷アリ頭部ハ乳棒状ニシテ或ハ平セラ
レ名状ヲ為シ或ハ扁桃状ヲ為ス頭ノ兩側ニ深キ吸溝
アリ頭部ハ甚ダ菲薄ナリ片断ハ四千個ニ達シ其終

末六百個成熟之、尾節橫徑一〇乃至一五密迷、
縱徑三乃至四密迷アリ、末尾ニ近キ尾節ハ方形ニシテ
通常五密迷ノ直徑ヲ有ス、子宮星形若クハ葉形
花環状ニ呈シ、生殖門ハ体中央ニ位シ、卵大共縱徑
〇、〇七密迷、橫徑〇、〇四五密迷アリ、卵殼褐色
ニシテ、其一端ニ莖ニシテ具フ、卵水中ニ入りタル後數月ニ
シテ子貴ヲ發生ス

本虫ノ中間宿主魚類(鮭、鱒)ナリ

△症候 本虫ハ寄生スルモ敢テ何等ノ障碍ヲモ呈セ
ザルアリ、或ハ腸胃ノ局所症候及全身症候ヲ發
スルアリ

食慾缺如又ハ善餓シ、或ハ兩者交代性ニ現ハ

ル時々嘔氣、悪心アリ、食物ノ攝取減シ、腹部各所ニ於
テ圧重ヲ訴フルアリ、葱韭、大蒜、塩麴、鮓等ヲ食
スルハ腹部疼痛、悪心、吐アリ、牛乳、鶏卵及脂
肪性食物ヲ食スルハ諸症減退ス、便通ノ尋常ニ
アリ、或ハ下痢若クハ便秘シ、或ハ兩者ノ交代性ニ現
ルアリ

全身症状 ハ主トシテ 神經症 ニシテ頭痛、眩暈、失神
痙攣、癲癇様發作、鼻踏病、吃逆、譫妄、躁狂
發作、痒痒 (殊ニ會陰、肛門部) 及各種ノ知覺
異常アリ、屢々 瞳孔 左右不同、瞳孔 縮小、視力 並
ニ聴力障碍ヲ来ス、是等ノ症状ハ寄生虫ノ產生シ
タル毒素ノ吸收ニ由リテ起リ、自家中毒ナラン

性々強度、貧血ヲ費シ、心悸亢進、呼吸困難、耳鳴、失神、皮膚作痒モ悪性貧血ノ状ヲ呈ス、此症狀、特ニ廣部、頸頭條虫ニ現レ、其產生シタル毒素ノ中毒ニ由ル

本病、確實ナル症候ハ、節、排泄ニあり、本病、局所及全身症候、共ニ確實ナラス、唯片節及

卵ノ認知ニ由リテ、確實ニ診斷シ得ル

最モ單純ナル片節ノ検査法ハ、之ヲコリセリンニ浸シ、個ノ載物硝子板ヲ以テ挟ミ、微シク圧迫ヲ加ヘ、透過光線ヲ以テ検査スルニアリ、子宮及生殖器ノ位置並ニ其縦徑ト横徑トノ關係ヨリテ、本虫ノ種類ヲ區別スルヲ困難ナラス

卵ハ鏡檢スル

△豫防法 (一)家畜(犬豚牛)ヲ條虫ノ疑アル人糞

ニ近ツテシムコトナラス、(二)家畜ノ厩舎ヲ清潔ニスル

(三)肉ハ良ク焼キ、或ハ良ク煮テ食スル (四)肉高及厨婢

等ノ如キ常ニ生肉ニ接スル者ハ、手指ヲ湯清ニセムルヲ要

ス、小兒ハ犬猫等ト遊戯スル者モ亦傳染ノ恐アルヲ以テ

注意スル (五)條虫ヲ有ル患者ノ便ハ消毒スルヲ要

ス、六、衛生教養ヲ嚴シク、肉類ノ検査ヲ嚴行スル

七、鱒ハ生肉トシテ、塩漬、糟漬、燻肉等モ亦危

険ナキニテ、ガレヲ以テ注意スベシ

△療法 驅蟲療法ハ、條虫片節ノ排泄ニ由リテ、條虫ノ腸内ニ存スルヲ、確診シ得タル者ニ行フ、此療

法一ノ攻撃的療法タル以テ患者ノ衰弱ナル者、肺
病ニ若シ、虚弱ナル者、老人及妊婦等ニハ施スコト
得ス。

若シ患者ノ訴フルト口疑ハシキハ先ツ其片節ヲ得
目的ヲ以テ下劑若クハ少量ノ驅糞藥ヲ投ズルコ
條貴療法ヲ施スニ先ヅ準備法ヲ要ス、即チ腸
管ヲ空虚ニシ條貴ノ驅糞出ニ便ナラシムル為ニ三日
間單ニ肉羹汁、牛乳及鶏卵ヲ與シ且後下劑ヲ投ス
而テ前晚ニ塩漬ノ鯡、葱根、大蒜ノ如キモノヲ與シ翌
朝空腹時ニ驅糞劑ヲ投ズ、驅糞劑服用後二時
間ヲ経ルモ便通無キハ下劑ヲ與スルコト驅糞療法
中、往々悪心、嘔吐、失神等ノ不時ノ症候ヲ呈シ又

驅糞後大腸加答兒、脱力等ヲ来スルコトアル以テ常ニ
患者ノ監督ヲ怠ルベカラズ、

驅糞劑ノ種類ハ如シ

一錦馬越戎斯 三乃至一〇、〇ヲ十五分乃至十分
間毎ニ一〇宛膠囊ニ入レテ與フ此效ヲ助ケル為ニハ
微温湯ヲ以テ浣腸スルヲ可ク、本劑ハ時々中毒症
状ヲ呈ス此毒成分ハ油ニ溶解スルキヲ以テ本劑使用
際ニ下劑トシテ蓖麻子油ヲ用スルヲ可ク、

又本劑ノ用量ハ一〇〇以上ヲ超スルコトヲ得ス殊ニ本邦
人ハ更ニ少量ナルヲ要ス、

二石榴根皮ハ往古ヨリ稱用スル本劑ハ新鮮ナル
モノヲ長時間水ニ浸出スルニアラサレハ效ナシ

其他コノ花^{カマラ}「ベンチン」^{テレベンチン}油等モ亦用^レ

丁 リングラ裂頭條虫

成虫ハ未ダ曾テ実見セシク唯幼虫ヲ人体ニ於テ見ル
其長サ^〇仙迷餘幅二、五密迷、白色柔軟紐帶
状ニシテ恰モ尋常條虫如シセト片即分界及生
殖器ヲ見ズ、末端ハ細小トナリ前部ハ擴大シラ乳嘴状
突起ヲ具ヘ其前ニ頭アリテ二個ノ吸盤ヲ有シ、多少
内方ニ陥出ス

戊 圓虫類

(一) 蛔虫

本虫ハ長圓柱状ニシテ黄白色、褐色或ハ赤色ニ呈シ

雄虫ハ縦徑二五〇密迷、横徑四密迷雌虫^ハ之ヨリモ
大且太ク縦徑四〇〇密迷、横徑六密迷アリ雄虫其
後端鉤状ニ卷縮ス卵ハ楕圓ニシテ其縦徑〇、〇五アリ
殻ハ硬クシテ暗色ヲ呈シ内容ハ細顆粒状ヲ呈シ、
胆汁色素ニ由リテ帶黃褐色又ハ綠色ニ著色スル
蛋白膜ヲ有シ球状ノ膨出部アリ

蛔虫小腸ニ占居ス恐ラクハ蛔虫ニ中間宿主ナク一定時
ノ間水中若クハ湿地ニ於テ發育シタル胎虫ヲ含ムル
卵ノ野菜、果実及飲料水等ニ混シ、腸中ニ達スル
モノナラン

△症候 多樣ニシテ或何等ノ症候ヲ呈ス或ハ條虫
ニ於ケル如キ局所症候即チ遠味、食慾不進、善飢

悪心、吐気、噎氣、鼓腸、臍部、圧痛、及疝痛、流
涎下痢、或便秘ヲ發スルコトアリ
全身症候ハ現レザルコトアリ、或ハ貧血、羸瘦、脱力
ヲ来スコトアリ、屢ニ鼻腔ニ疼痛、感ラザルコト稀ニハ
眩暈、失神、發作、及痒痒ヲ發スルコトアリ、又癩瘡
様發作、舞蹈病、視力、及聴力ノ障碍、斜視、麻
痺、瞳孔、左右、不同、神経痛、吐逆、喘息、及假
性脳腫大、様發作ヲ起ス
蛔蟲、數甚ク多クシテ、相集マリテ、團塊ヲ為スルハ、腸
閉塞ヲ来スコトアリ、最モ危険ナルハ、蛔蟲ノ遊走シテ
時トシテハ、蛔蟲、輸胆管ニ竄入シテ、閉塞シテ、黄疸
ヲ發シ、或ハ胆道内ニ侵入シテ、肝膿瘍ヲ生シ、或ハ胆

囊ニ入リテ、胆石、核子ト為ルコトアリ、又蛔蟲ノ胃、及食
道内ニ入リテ、喉頭、氣管、枝ニ達シ、呼吸、肺壞
疽、又ハ肺膿瘍ヲ發スルコトアリ、時トシテハ、鼻孔、鼻
淚管、及外聽道ヨリ、蛔蟲ハ出ツルコトアリ、蛔蟲ハ時ト
シテハ、狹隘ナル孔ヲ穿通スルコトアリ、即チ穿孔性潰
瘍ノ存スルキハ、屍体ニ於テ屢ニ、腹腔腔内ニ蛔蟲ノ
存スルヲ見ル、又腸ニ異常ノ痙攣見ルハ、他部ヨリ、蛔
蟲ノ出ルヲ見ル、其他腸管、腹壁トノ癒着見ルハ、
ハ、蛔蟲ノ外方ニ出ツルコトアリ
△診断 排泄シタル虫体、或ハ糞便検査ニ由リテ、虫卵
ヲ發見スルコトアリ
△豫后 良

療法 清最モ確實ニ其藥劑ハサントニシテナリ即チ之ニ由リテ虫ノ小腸ヨリ大腸ニ駆逐シテ下劑若クハ浣腸ニ依リテ之ヲ排泄セム

(二) 十二指腸虫

原因 (一) 地理的蔓延 本病本邦何レノ地ニモ存ス、岡山、岐阜、山梨等ニテ地方病性ニ流行セリ (二) 職業 臥列ニ於ケル如ク鑛夫、煉瓦職、墜道工夫等ニ多クカズニテ主トシテ農夫ニ多クニシ (三) 性 男子ニ多シ (四) 年齢 壮年者ヨリモ中年者ニ多シ

十二指腸虫ハ帶黃白色又ハ顔赤色ノ圓虫ニシテ其長サ雌虫ハ十二乃至十八密迷雄虫ハ六乃至十

十密迷アリ其頭端ニ脊側ニ屈曲ニ唇囊ニ六個ノ鉤状齒ヲ有シ雄虫ノ尾端ハ膨大シテ又尾囊ヲ備ヘ雌虫ノ尾端ハ尖リ

虫卵ハ楕圓形ニシテ縦徑〇、〇五密迷横徑〇、〇二密迷アリ内容褐色ニシテ偶數ニ分割シ被蓋ニ透明ナリ卵ハ腸外ノ湿润セル場所ニテ發育シ一日乃至二日ニテ幼虫ニ變シ二回脱殻ス此幼虫ハ野菜、水草ニニ昆シテ人体ノ消化管内ニ入り五六週ニテ成虫ニ變ス

症候 初期通常甚ク緩慢ナリ始メニ不食ハ消化障礙アリテ漸次ニ多量ノ血ヲ呼吸困難、心悸亢進ヲ訴ヘ後ニ水腫ヲ發シ出血シ易ク遂ニ生命ヲ失フニ至ル

局所症候、心高、圧重、及膨滿感、吞酸、嘈雜、
悪心、嘔吐等ナリ、便ハ多ク、秘結ス、

其ノ附着部ヨリ出血スレバ、其血液ハ長キ腸ヲ
通過スル間ニ能ク食物ト混和シ甚ク変化セラル、
又テ通常便中ニ於テ肉眼的ニ認知スル困難ニ
便ヲ排スルハ固有ノ卵アリ

食慾ハ善良ナルヲアリ或ハ異味ヲ好ムヲアリ後ノ
場合ニ患者芥子酢、食塩、生米、大豆、芥胡
麻等ヲ嗜ミ或ハ食物ニアラザル物例之ハ炭煙
草、灰、壁土、紙、若クハ有害ナル物例之ハ瓜土、
如キモノヲ食スルヲアリ
病勢ノ進ム後ニテ漸次皮膚及粘膜淡蒼白トナリ

口唇ニ於ケル粘膜ト皮膚トノ境界科然タラス、血液淡蒼白
トナリ「モウロ」トシ、血球減シ赤血球減シ白血球増加
ス血液中心ニ變形赤血球大小不同赤血球梗ノ有
ル赤血球工オシ好深色細胞等増加ス貧血増
スニ後ニテ心悸亢進、呼吸困難ヲ起ス患者古高地ニ
登ル際ニ殊ニ心悸亢進、呼吸困難ヲ起スヲ以テ俚
俗ニ本病ヲ坂下ト称ス心尖ニ時々收縮期的雜音ヲ
聞キ肺動脈ノ第一音亢進シ心濁音部右支
ハ尤方ニ廣カク頸動脈強キ搏動アリテ此部ニ收
縮期的雜音ヲ聞ク此部ニ獨集音ヲ聞クアリ
爪甲ニ變化必要ノ症候ニシテ爪甲貧血ニテ淡蒼白
色若クハ帶黃蒼白色又ハ淡紅色ヲ呈シ菲薄

トナリ薄キ鼈甲状ヲ為ス爪甲一般脆弱ニシテ容
易ニ縦ノ方向ニ破碎ス爪甲ノ表面波濤状ノ凹凸
ヲ生シ往々前縁ノ背面向ニ向ヒテ反轉スルヲ見ル
患者頭痛眩暈嗜眠不眠眼花閃爍耳鳴
四肢麻痺及蟻走ノ感等ヲ訴フ時トシテハ腦貧
血ヲ起スニアリ又往々弱視網膜出血神經性網
膜ヲ起スニアリ体温通常變化ナシ
貧血愈増劇スハ漸次水腫ヲ發シ患者少ク血ノ
傾ヲ有シ齒齦ヨリ出血
十二指腸患病ハ以テ症候唯貴ノ存在ヲ為シ發
スル貧血ノ以テ説明スカラザルヲ以テ諸學者ハ
他原因ヲ探索セリルツサハ氏ハ本病患者ノ

血中ニ於テ毒物ヲ証明セリ多ク本邦學者中
毒從ニ傾ケリ

解剖 十二指腸患十二指腸空腸及迴腸
ノ上ニ於テハ中ノ空腸ニ最も多ク本患
病ニヨリ血液ニ取リテ生活スルヲ以テ
葉ホニ於テ之ヲ駆逐シ或ハ死後直ニ剖見ス
牛本患ノ腸管ハ血液ヲ以テ充タサルヲ見ル
寧ろ生ニ於テハ其ノ區々ニテ一二條ノ血
千條ナリトス小腸ノ上部ニ於テ粘膜ニ附著シ
其咬着ノ點ニ血狀ノ斑ニシテ大ノ血塊
生ズ其血塊ノ中央ニ於テ頭部ノ吸入ニ
白点アリ

皮下脂肪但微及内臓、脂肪は通常尚存在
ス内臓は凡テ多量血心臓ハ増大ス

診断

多量ハ容易ニシテ患者羸瘦ガシテ貧
血ニ同例ニ異味症及爪ニ変化アルヤ十二指腸患
ノ疑アリ又多量血地方病性ニ流行スルヤ亦十二指腸
患病ノ疑ヲ存スル原因不明ノ多量血患者ニ遇
中ハ常ニ排便ヲ怠ルカラス

豫後

多量ハ佳良ニシテ既患療法ヲ行フ一早キ
程其快復早シ

豫防法

田野ニ於テ不潔ノ手ニテ飲食スルガ
ル又疑ハシキ水ハ飲用スルカラス生マニテ野草ヲ食
スルカラス

療法

綿馬越莨斯トチモールトハ特效薬ナリ

(一)綿馬越莨斯 本邦ニ於テ多量ヲ用テニ唯其
少量ヲ用テ三、〇乃至五、〇セント尚時々中毒症
ヲ惹ルルアリ中毒症中殊ニ多キハ消化症状及神経
症状ナリ近時多クノ本邦醫師綿馬越莨斯ノ弱視
及失明ヲ実験報告セリ

(二)チモール

用量二、〇乃至三、〇ニシテ朝空腹時ニ

之ヲ共一、二三時間后ニ下劑(蓖麻子油及其他下劑)
ヲ此療法ハ隔日ニ行テ其ノ全ク既除セルヲ
要スチモールヲ用ヒタル際ハ必ズ下劑ヲ與フル要
ス貴ハ水様便中ニ多量ニ存スルヲ
チモールヲ用量ハ余ノ実験ニ依リ二、〇乃至三、

○シ最ニ適量トス「千毛」ハ消化性及神經性中
毒症候アリ特ニ驚者ナルハ嗜眠ナリトス呼吸停
滯脈數共ニ減シ尿ハ暗色ヲ呈ス(千毛ハ尿)
以上外ツクハ「フオル」ハ石榴根皮大蒜薺野苧
モ亦用ラレ

鐵劑對症及後療法トシテ效アリ

(三) 蟻虫

本虫ハ白色ニシテ絲状ヲ呈シ雄虫ハ長サニ尺五分密送
厚サ〇、二密送雌虫ハ長サ十二密送厚サ〇、四乃
五〇、六密送アリ雄虫ノ尾端ハ腹面ニ向テ卷縮マ
卵縱徑〇、〇五密送横徑〇、〇ニ密送ニシテ二重
ノ鮮明ト殼ヲ有シ其一端ハ他端ヨリモ尖リ一側ハ他

側ヨリモ強度ニ彎曲卵ハ食物若クハ不潔ナル指ニ依
リテ久シク消化管ニ入り盲腸ニ至ル雌虫ハ大腸ニ至リ卵
子ヲ産ムトス

蟻虫殊ニ其成熟シタル雌虫ハ或ハ糞便ト共ニ或ハ草
獨ニ腸ヲ去リ殊ニ夜間臥褥中ニ於テ肝門會陰
腔又ハ包皮ニ侵入シ該部ニ充血疼痛痒炎症ヲ
發シ手淫ノ癖ヲ来スアリ幼女ニ於ケル陰門炎症亦
虫ニ因ルモノ多シ

傳染ハ食物殊ニ果實及野菜等ノ虫卵為ニ不
潔トナルモノヨリ起ル

局所ノ症状ハ固有ニシテ屢々肛門煩癢ヲ来シ殊ニ
夜間就寢時ニ甚シク會陰部ニ不快ノ感アリ白帶

下、尾頭炎ヲ察シ患者痒痒ニ恒ニ陰莖勃起花柳
病ヲ生シ精液漏又ハ攝護腺漏ヲ示スアリ
診断 糞便ト共ニ或ハ單獨ニ排泄シタル本虫ヲ見
出スカ又ハ便中ニ卵ヲ察見スルニアリ便ヲ檢スルニ便
柱ノ表面部ヨリヌルニ

豫后 良

療法 清潔ニ注意シ傳染ヲ豫防スルニ
サトニシト下劑トシ内服セシテ或ハ驅蟲劑ヲ腸内ニ注
入ス浣腸料ハ昇汞溶液(千倍)大蒜ノ浸出液チ
モルニサリチルニ酸溶液等ナリ

(四) 鞭虫

四〇乃至五〇密送ノ大サヲ有シ前体(頭部)ハ菲薄

絲狀ヲ呈シテ鞭紐ノ如ク后体(尾端)ハ太クシテ鞭ノ把柄
類ス故ニ鞭虫ノ名アリ雄虫ハ尾端背面ニ向ヒテ卷縮
シ雌虫ハ弱ク屈曲シ或ハ直直ナリ卵ハ縦徑〇、〇五
密送、横徑〇、〇二密送アリテ枸橼実状ヲ呈シ、
硬キ褐色ノ殻ヲ有シ其兩端ニ鈕狀ノ膨大部アリテ
吊提灯ニ類ス
症候 固有ノ症候ナシ
療法 チモルニシ「ベンチン」等ヲ用フ

鑑別疾患
 (一) 肺炎腫及気胸
 (二) 渗出性肋膜炎
 (三) 肝胞黄囊腫

○第六章 肝臓実質疾病

第一 鬱血肝

△原因 (一) 循環器ノ疾患 (心弁膜病) (二) 呼吸器ノ疾患 (肺炎腫、慢性気管支炎) (三) 大静脈ノ障碍、(四) 肝静脈ノ狭窄及血圧亢進

△解剖 其容積増大シ、切開スルニ甚ク血液ニ富ム肝小葉ノ中心静脈ハ暗赤色ヲ呈シ、其周圍ニ於ケル肝細胞ハ甚ク白色トナリ、或ハ脂化ス、時トシテ、甚ク胆汁色素ニ依リテ著色シ、肉莖莖ノ如ク觀ラレタマフ(肉莖莖肝)

△症候 肝腫大ス

本病ニ固有ナルハ、肝容積ノ變化ニシテ廿四時間乃至

○肝血行 ○肝血

（検査） （肝）
 早、時間内ニ於テ著ク其大小ヲ変ス。斯ノ如ク肝ノ
 容易ニ其容積ヲ変スルハ多クノ血管ヲ有シ恰モ海
 綿様ノ組織ヲロモスルヲ以テシ

肝ノ貯血力ヲ持続スルニシテ、肝細胞萎縮シテ腹水
 シ得ズ

△**診断** (一)心臓病等ハ、禁血ヲ起スルキ原因アルヲ

(二)肝ノ腫大 (三)短時間ニ容積ノ変換スルヲ以テ

△**豫后** 原因ニ関ス

△**療法** 心臓病アルハチキタリス等ヲ處シ、又腸

ニ誘導スル目的ニテ下劑ヲ投ズ

第二 肝充血

△**解剖** 前庭ニ及ニテ肝ニ動脈性充血ヲ示ス

△**原因** (一)貪食 (二)辛辣、香料 (胡椒、芥子等) 及酒

類ノ如キ刺激性食物 (三)麻疹、猩紅、室扶斯、赤痢

等ノ傳染病 (四)外傷 (五)代償性肝充血等ニシテ

又大原因ハ不明ナル本症ハ熱帯地方ニ多シ

△**症候** 右所底候及自覚的症候共ニ鬱血肝ノ類ニ

△**診断** 肝肥大、外其原因ニ注意スルヲ要ス

△**豫后** 良

△**療法** 外傷性ニ肝部ハ冷浸法、水蛭、吸筒ヲ

用ヒ或ハ下劑ヲ與フ

第三 肝臟膿瘍

△**原因** (一)外傷ニ由リテ特ニ急性肝膿瘍ヲ惹クルヲアリ

セト (二)本病ハ多クハ結核性ニシテ轉移性ノモノナリ即チ

赤痢、アミバ、
 胆汁鬱滯ハ本
 症原因上ニ大関
 係アリ

○干膿瘍

- 鑑別疾患
- (一) 胸悶
 - (二) 滲出性胸膜炎
 - (三) 腹壁膿瘍
 - (四) 胆石病
 - (五) 肝膿瘍
 - (六) 化膿性胸膜炎
 - (七) 肺結核
 - (八) 肝包莖囊腫
 - (九) 軟性肉腫及胆囊腫
 - (十) 膿瘍
 - (十一) 肋骨或脊椎若狹病
 - (十二) 熱帶地方性膿瘍

C. 肝膿瘍

起於毒血行侵入肝之侵、入シテ本病ヲ成ス(一)以脈分佈區域ニ於テ心内膿瘍、肺壞疽及腐敗性氣管枝ニ於テ起ル毒、肝動脈ヨリ肝ニ入ル(二)肝靜脈ニ由ラテ起ル毒、肝内ニ輸送セラル(三)即チ起ル毒、其重量ニヨリテ下大靜脈ヨリ血流方向ニ反對シテ肝靜脈内ニ入り来ル所謂逆行栓子(三)起ル毒、胆管ヨリ肝内ニ入リ(四)肝疾患例之、肝包莖(五)近接膿瘍、潰瘍(六)熱帶地方ニ(七)原因不明ノ膿瘍アリ(自發性肝膿瘍)其發生ニ熱帶地方ニ(八)解剖 特異性膿瘍、一個ノ膿瘍ニテ屢々其大ニ成リ、轉移性膿瘍、面々小ニシテ其數多ク肝ニ散在セリ、(九)胃腸、疾病ニ罹ル者ニ其

外科的治療法

首トシテ手術ヲ行フニテ、殊ニ可及的早ク之ヲ行フニテ、其膿壁若クシテ、膿腔トシテ、膿液ニシテ、或ハ胃腸管内ニ破潰スルニ至ルガ如キハ、不可ナシテ、手術ヲ施スニ必ズ、先ニ試驗的穿刺術ヲ行ヒ、膿瘍、或ハ切開ニ由リ、或ハ穿刺ニ由リ、排泄スル膿瘍ヲ存スルニ、確實ナル者ニ在テ、太キ太キ管鉸ヲ用テ、之ヲ穿刺シ、管鉸ヲ放置シ、管鉸ニシテ、得ル膿ヲ、アル氏ニ、三日、右ニシテ、シキカテ、シテ、代用スルニ、最モ、良シカテ、シテ、膿腔内ニ、送リ、セシ、可ナシ、他、穿刺術ニ、亦、吸引法ヲ、採用スルニ、可シ、然レ、肝膿瘍ニ、穿刺術ヲ、行フニ、テ、切開術ヲ、施シ、排膿スルニ、優レリ、トシ、

症候 轉移性膿瘍ハ原病ノ徵候ノ顯著ナルニ肝ノ變化、^{横隔膜神經及之ト連合セル四頭椎神經ニ在リ、右側肩胛痛}痛、^{膿瘍大ナルハ}肝增大シ、^{右胸下部、横隔膜上、尖カキル}又肋骨下ニ膨隆部ヲ見ル之ヲ觸按スルニ肝表面ニ隆起物アリテ其硬度著シカラス、^{往往波動ヲ呈ス}一般ニ知覚過敏ニシテ、^{殊ニ限局セル膨隆部ニ劇痛ヲ呈ス}患若右ニ肩胛部ハ緊張若クハ疼痛ヲ訴ヘ、肝部ノ觸按ニ由リテ咳嗽ヲ成ス(肝性咳嗽)若シ膿瘍横隔膜ニ近接シタルハ屢々^{逆ラ成ス}、^{而シテ、行フニ、或ハ一次的切開法ヲ以テ、或ハ二次的切開法ヲ以テ、之ヲ用テ、之ヲ切開ス}膿ハ通テ腫大ス、^{即チ膿瘍表層ニシテ、未ダ膿腔トシテ、膿液ヲ貯ルニ、由リ、肋骨若クハ、軟骨ヲ切開シ、肝膿瘍ヲ露出シ、然レ、右腹ニ、}黃疸ハ多クハ、^{缺如}、^{肝軟骨ヲ切開シ、肝膿瘍ヲ露出シ、然レ、右腹ニ、}發熱ハ、^{必ず必要ナル症候ニシテ、或ハ、胸悶、或ハ、}肝膿瘍ニ、穿刺術ヲ、行フニ、テ、切開術ヲ、施シ、排膿スルニ、優レリ、トシ、

△壁側ニ注度ヲ有ルニシテ...
一 肝動脈性充血
二 肝靜脈性充血
三 肝包膜囊腫
四 肝動脈性充血
五 肝靜脈性充血
六 肝包膜囊腫
七 肝動脈性充血
八 肝靜脈性充血
九 肝包膜囊腫

△壁側ニ注度ヲ有ルニシテ...
一 肝動脈性充血
二 肝靜脈性充血
三 肝包膜囊腫
四 肝動脈性充血
五 肝靜脈性充血
六 肝包膜囊腫
七 肝動脈性充血
八 肝靜脈性充血
九 肝包膜囊腫

△壁側ニ注度ヲ有ルニシテ...
一 肝動脈性充血
二 肝靜脈性充血
三 肝包膜囊腫
四 肝動脈性充血
五 肝靜脈性充血
六 肝包膜囊腫
七 肝動脈性充血
八 肝靜脈性充血
九 肝包膜囊腫

△壁側ニ注度ヲ有ルニシテ...
一 肝動脈性充血
二 肝靜脈性充血
三 肝包膜囊腫
四 肝動脈性充血
五 肝靜脈性充血
六 肝包膜囊腫
七 肝動脈性充血
八 肝靜脈性充血
九 肝包膜囊腫

肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫

第四 肝臟硬變

原因 (一) 酒類濫用ニ由ラズル者多シ (酒客肝臟)
(二) 辛辣、香料 (胡椒、芥子、蕃椒等) 及刺激性食物
(三) 梅毒 (四) マラリア (五) 肝包膜 (六) 寄生蟲
解剖 肝小葉間ニ結締織増殖シ、肝脈周囲ニ亦結
締織増殖ス。肝、初メ増大ス。肝、表面ニ顆粒狀ヲ見シ、恰モ豌豆
ノ散布スルニ似テ、恰モ皮質、又

肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫

豫後 手術セザレバ、豫後、概テ不良ニ
療法 疑診、及ニ消去症ヲ行ヒ、**診断確實**
トシ、速ニ手術ヲ行フ

- 一 脂肪肝
- 二 黄疸肝
- 三 肝若葉織増殖
- 四 癭粒肝
- 五 白血病性肝
- 六 浸潤
- 七 肝動脈性充血
- 八 肝靜脈性充血
- 九 肝包膜囊腫

肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫
肝動脈性充血
肝靜脈性充血
肝包膜囊腫

十肝梅毒

(土)萎縮性肉豆蔻

(肝)肝

(土)單純性枯瘦性肝

(萎)萎縮

(土)門脈血塞

(土)慢性腹膜炎

(肝)肝

軟骨の切りかみ感アリ

肝脈、極度常シ脾腫大シ腸胃(萎縮性腸胃)カ

著見)腹膜(腹水)アリ

症候 初期ニ固有ノ徵アリ時々食慾不振、胃

部、圧重、下痢アリ消化障アリ

肝ノ變化漸ク門脈血行ニ障碍ヲ来スニ及ビ初

ニ固有ノ徵候ヲ呈ス其主徵、肝ノ變化、脾腫

及腹水アリ

一)肝ノ初メ増大スレバ右ニ縮小ス

二)肝萎縮シテ門脈圧迫ヲ来スルニ門脈血行ノ障

碍ニヨリテ腹水ヲ来ス其固有ノ他ノ水腫ニ先

チテ腹水ノ現ルコトナリ

(三)門脈鬱血ノ結果脾臟腫大ニ若シ吐血ニ由リテ胃ヨリ

多量ノ血液ヲ失フキ脾ハ急ニ縮小シ更ニ漸次再腫大ス

(四)門脈鬱血為腸胃ニ慢性加害見ラ茂シ食慾不進、

煩渴、便秘、下痢、鼓腸等ヲ来スルニ因リ、胃中ニ

食道(吐血)及腸(下血)ヨリ出血シ且下腸間膜靜

脈、鬱血ノ上痔靜脈又痔靜脈叢ニ波及スルニ

痔核ヲ来スシ痔少シ血ヲ来ス

(五)門脈鬱血スルニ門脈枝別ト大靜脈ト吻合シテ側

枝血行ヲ營ム又門脈ヨリスル枝別ノ提肝靱帯及四

靱帯ヲ彈テ外方脂肪系ニ及リテ二個ノ靜脈トナリ

一ハ上腹靜脈ト交通シ他ハ内乳房靜脈ト交通シ

テ脂肪周圍ニ於テ靜脈瘤狀擴張ヲ生ズルコトナリ

海蛇頭ト稱ス

六、黃疸ハ本病ノ特徴トナスニ思ハス

七、尿量ハ減少シテ濃厚トナリ慢性及不癒ヲ呈ス

故冷感ハ多クハ淡赤色ノ尿陰性トシテ認ム

経過 慢性ニシテ平均一、二年乃至三年

診断 両腎ミシテ初メ肝増大ニ次テ漸次縮小シ

且腹水臍腫等ノ肝鬱血病ノ現ルモノハ診断

容易シ

鑑別診断 慢性腹膜炎(結核性)ニ腹部ニ

疼痛アリテ時ニ發熱ス腹水ト腹水ヲ有スル慢性腹膜炎

トトハ別ニ認メ注意ス六、肋膜炎ノ尿陰性ヲ認ムモノ

トナリ而シテ肋膜炎ノ尿陰性モハ腹膜炎ト誤ス

豫后 不良

療法 原因ヲ搜索シテ病因療法ヲ行フ

両腎ミシテ肝増大ヲ認ムモノハ酒類ノ濫用ヲ禁ジ

世所共知ノ食料ヲ無一ニ再投量ニ因テ者ニ

キ下ニ不若クハ砒石ヲ投シ梅毒病ニハ砒石療法

ヲ行フ

砒石療法ニキル乳療法

下ニキル効力有テ

傳々本改考ルハ紙積石(一日一〇、〇乃至二〇、〇)

ヲ運用シ毎日二、三回先便通アラスニ法ヲ適用

シ

葉刺の療法效ヲ表サレ場合ニハ穿腹術ヲ行フ

巴大生干更長

第五 肥大性肝臓硬変

解剖 萎縮性硬変に反して肝臓の死にん、大なる、サト其形態は変化ナリ肝臓の表面の顆粒状ラコエ、其各顆粒は萎縮性硬変の顆粒に比して概して大なり肝臓硬固にて弾力に富み其色一様ならず胆汁は深マルラ以テ黄色乃至緑色ラ呈ス、**濃灰白乃至帯赤白色**ラ呈スル結締織、肝葉間走レルヲ見ル

結締織此如ク増殖セル拘る肝細胞は依然トシテ変化セズ新生兒結締織増殖の脈枝極附近ニ多ク、**胆管炎及胆管周囲炎**ヲ呈スルニ由ル(胆液性肝硬変)

心脈及動脈ハ侵サレズ

原因 稀有ナル疾病ニテ之ニ罹ルハ多ク、**男子、壮年者**ナリ

症候 不定ノ消化障礙ヲ以テ始マリ**黄疸**ヲ發スルト共ニ**肝増大**ニ過敏トナル肝硬固ニテ縁ハ鈍厚表面滑澤或サシク不平ナリ

肝肥大ト共ニ脾モ亦高度ニ肥大ス、**肝臓靜脈症**(腹水、側枝血行)ハ缺如ス、

罹患初期ニ於テ**食欲著**ナリシ**食欲不進**ハ後ニ至ル止ムコトナラズ却テ**食欲亢進**ヲ示スニ至ルサレドモ之モ拘る一般ノ**栄養良**ハ大ニ障礙セラル、**尿ハ胆汁色素**ヲ含ム

肝臓硬変

（一）病

△**経過** 顔心緩慢ニシテ黄疸ヲ發シタレバ、數年乃至

十年餘ニ亘ル

△**診断** 固有之症候、黄疸、肝、肥大、及心脈、鬱血

△**缺如**

△**豫后** 不良

△**治療法** 初期ニ於テ、腸胃加吞兒、加吞兒性、黄疸

及肝充血ノ治療法ヲ行ヒ、世刺戟性ノ食物ヲ共ニ、

酒類ヲ禁スルニ

第六 バンチ氏病

△**原因** 壯年及大人ニ来リ、原因ハ全ク不明シ

△**症候** (一)貧血期 初期ニ先ヅ脾臟徐々ニ增大シ

其增大顯著ニシテ白血病性ノ脾臟ニ似タリ次テ貧血

ニ来シ初ハ輕クモ漸次顯著トナリ、血液ハ其貧血、

及ニ長ク赤血球及血色素減少、多形赤血球及小赤

血球ヲ現ス、有核赤血球ハ老ニ缺如ス、赤白血球ハ

尠數ニシテ兩者關係及老シ

肝ハ尋常大ニシテ唯貧血ノ末期ニ於テ增大スルヲ

アリシ腹水ハ全ク缺如ス消化機能ニ自ラニ變

状ナリ食慾モ亦概々減スリ 往々發熱スルヲアリ

此期ハ頗ル長ク通常三乃至五年ニ亘ル

(二)移行期 尿ノ變化ヲ考メ、即チ尿量減少シ多

量尿酸塩類、ウロビリノ素ニ從ヒ胆汁色素ヲ

含ム腸胃モ亦障礙アリ本期ヲ持續ハ一二ヶ

月ニ

(三) **腹水期** 徐々腹水ヲ蓄シ肝縮小シ脾腫大ス
 尿減少シテ多量ノ尿酸塩類ヲ含ビリシ及ビリル
 ビシラ合ム皮膚及粘膜黄染ハ其度ヲ加ヘテ黄
 便ハ尚暗色ヲ呈ス 此時期ニ入りテヨリ概ネ五乃至七
 ケ月ヲ死スルヲカトスルモ寧ニ一ケ年以上ヲ起ス所リ
解剖 脾甚ク増大シ重量一乃至一五基ルニ達ス
 肝臓移行期ニ尚ク大ナル腹水期ニ縮小顆
 粒萎縮性肝硬変ノ如ク硬固ニ以テ脈及其枝別ノ靜
 脈
療法 諸藥皆效ナシ唯砒石ヲ用フニバ多ク輕快
 スルカメシ
 本症ニ脾ハ別々ヲ試ミクルモナリ

第七 急性黄色肝臟萎縮

原因

稀有ノ疾患ニテ肝細胞ノ脂化崩壊を
 モノナリ何レノ年齡ニ於テモ發シ婦人ニ多ク殊ニ其妊
 娠時及産褥後ニ發ス 其原因ハ不明ニ

解剖

肝萎小ニテ大サ五分以下トナリ其質
 柔軟ニテ弛緩ス之ヲ截開スニ黄色部ト赤色部ト
 相交錯ス赤色部ハ黄色部ヨリモ病變ノ進行ニカ
 者ニテ之ヲ空氣中ニ放置スルハロイチニ及ビロジン

冷毛霜ノ如クニ切斷面ニ撒布ス

脾ハ概ニ増大シ他ノ臟器脂肪變性及出血ヲ呈ス

症候 (一) **前駆期**

胃腸ノ症候ヲ呈ス食慾
 缺乏ノ嘔吐便秘等ヲ發シ次テ黄疸ヲ發ス而シテ數

日ニ生ずルノ干癢宿

鑑別疾患

- (一) 傳染病、黄疸
- (二) 急慢性者、黄
- (三) 黄熱
- (四) 口开ル氏病
- (五) 肝硬化
- (六) 横行結腸、鼓
- (七) 腸
- (七) 腸中毒
- (八) 腦膜炎

（急慢性黄色肝変色）

日若くは數週ヲ經テ予二期ニ移行ス
（一）第二期 此期ニ入レハ重症ノ神昏症候ヲ察シ諸
妄、痙攣、腹部、疼痛、嗜眠ヲ来シ遂ニ昏睡ニ
陥ル之ト同時ニ肝ハ急ニ縮小シ數日ヲ出ズシテ既通
常ノ半分トナリ甚キハ四分トナル

屢ニ脾ノ肥大ヲ現ス

重症ノ黄疸ヲ察スルキニ身体ノ各部ニ出血ス
熱ハ往々初期ニ發スルテ了レテ末期ニハ多クハ缺如ス
但瀕死ノ際ニ四十度以上ニ達スルアリ。尿變化ハ
緊要ニシテ其量減シ黃疸色ヲ現シロイテチニチロリン
ニ富ム往々蛋白尿及反應アリ

△經過及豫后 度病后二週間内ニ死ス療法對症的

第八 肝臟徵毒

原因 徵毒ノ傳染及遺傳徵毒ニ由リテ發ス

解剖 肝ニ種々ノ病變ヲ認ム

- （一）肝硬化
- （二）肝癌
- （三）包囊腫

（一）徵毒性肝包膜炎 前章ノ肝硬變ニ異ナス

（二）徵毒性肝臟血管炎 前章ノ肝硬變ニ異ナス

（三）肝臟シフィローム（護謨腫性肝臟炎）多數帯

赤灰白色若クハ白色ヲ呈スル粟粒乃至胡桃大ノ護
謨腫ヲ生シ、主トシテ肝表面殊ニ腹肝軟帶ニ沿ヒテ
存ス或ハ内部ニ於テグリソシ氏囊ノ門脈枝別ヲ導
ケル結締織ニ存ス（徵毒性門脈炎）此護謨腫化
癥痕形成ニ由リテ肝表面ニ溝ヲ現ス
症候 大人ニ概ス顯著ノ症候ナシ新生ノ護謨

肝梅毒

腫ハ肝表面及縁ニ於テ、球状隆起物トシテ觸知セ
 レ之ヲ按圧スルニ柔軟ナリ、後ニ硬クテ護護腫收
 セルハ癰痕ヲ結ビ以前隆起シタル部分ニ溝ヲ形成
 シ其間ニ存スル肝組織ノ隆起物ヲ形成スルヲ認ム
 (分葉肝)故ニ持続シテ患者ヲ觀察スルニハ肝漸次
 変形スルヲ實驗シ得ル
 又本病ハ肝包膜炎ヲ發シ腹壁ト癒着スル下アリ、性
 々腹水及脾腫大ニ發シ罕ニ黄疸ヲ患フ
 診断 本病ノ主徴ハ肝變化、其形狀轉變、
 疼痛、腹水、黄疸、脾腫、正蛋白尿等トシ
 豫后 不良
 療法 沃度劑及水銀劑ヲ用フ

第九 脂肪肝

- 鑑別疾患
 (一) 肝硬化
 (二) 肝充血
 (三) 肝粉質变性

原因及解剖 肝臓内ノ脂肪ノ富鏡トナルハ、食
 物ヨリミテ多クノ脂肪ノ肝ニ集ルニ由リ(脂肪浸潤)ハ
 肝細胞内ニ於テ正蛋白質ノ分解シテ脂化スルニ由リ脂
 肪变性)
 脂肪浸潤ハ脂肪若クハ澱粉ニ富ムル食物ヲ攝取
 シテ運動ノ不足ナル者ニ多シ。脂肪肝發生ハ又素因
 關係アリテ家族中ニ多ク本病ヲ發スルコトアリ、二十
 五歳以テ四十歳ノ者ニ多ク女子殊ニ月經閉止后ノ
 者ニ多シ
 脂肪变性ハ各種ノ貧血、慢性病及熱性病ニ来
 ル之ヲ起ス原因ハ未タ明カナラズ

又脂肪浸潤ト脂肪変性トノ區別モ未ク明瞭トス
肝ハ増大スルモ比重ハ反テ減少ス

△症候 生前ニ障礙ヲ呈セサルコト多シ、肝増大シ
其表面滑澤ニシテ縁ハ鈍厚、硬度ハ柔軟ニ

續發性症候ハ輕微ハハ脈搏密實ニ

△豫后 原因ニ由リテ差アリ

△療法 貪食家、酒客及肥胖者ハ脂肪性及

凝粉性ノ食物ヲ節シ、酒類ヲ禁シ、瘠肉、蔬菜
及果實ヲ食用シ、勉メテ新鮮ナル空氣中ニ運動
セシメ、倍々塩類ヲ下劑シ共ク

衰弱者ハ強壯療法ヲ行フ要アリ

○鑑別疾患(一)肝硬化(二)肝充血(三)粉質肝ニ

第十 粉質肝

鑑別疾患

(一)肝硬化

(二)脂肪肝

(三)肝癌腫

△原因 本病ハ常ニ流發性ニシテ本邦於テハ甚ク罕ニ

經久化膿(骨質及關節ノ疾患)肺癆、梅毒、癌

腫、アフリカ、白血病等ニ流發ス、斯ノ如キ疾患ハ本邦

ニ存在スルコト一般ニ列ト異ナラザルニ拘ルコト粉質肝ヲ

流發スルコト少キハ他ニ原因上何者カノ關係アルナルニ

本症ハ男子ニ多ク十歳乃至五十歳ニ多シ

△解剖 肝増大ス其切剖面黃蠟又ハ黄麴セル脂肪

ニ似多(蠟樣變性)又ハ脂肪肝)而シテ尚血液ヲ含

ルモノハ赤色ヲ呈シ恰モ燻製ハ豚肉若クハ鮭肉ノ觀ヲ

為ス

肝ノ切剖面ニルゴール氏液ヲ注キテ暫ク放置シ然ル

粉質肝

後水ヲ以テ洗フニハ變質部ハ常ニ赤褐色ヲ呈シ健康部ハ淺黄色ヲ呈ス

病變ハ主トシテ動脈ヨリ始マリ然ル後細胞ニ及ブ

症候 肝增大シ其表面滑澤ニシテ縁ハ鈍円

若クハ銳利ナリ

質ハ硬固ニシテ疼痛ナシ

黄疸及門脈鬱血ノ症候ナシ

セト原病ノ為ニ腹水ヲ發シ澱粉變性ノ脾腫ヲ起ス

又腎臟ノ澱粉變性ノ為ニ蛋白尿ヲ發スルナリ

鑑別疾患 (一) 肝硬化 (二) 脂肪肝 (三) 肝臓癌ノ

豫后 不良

療法 滋養物ヲ與ヘ強壯劑(砒石、鐵劑)ヲ處ス

第士 肝臓癌腫

胃腸等ノ門脈ヲ布區域ニ原發癌アルキハ門脈ニ

依リテ肝ニ轉移ス 乳房等ノ遠隔臓器ヨリ肝ニ

轉移スルハ肝動脈ニ依ルモノニシテ子宮等ノ女子生

殖器ニ存スル癌腫ノ肝ニ來ルハ其靜脈ノ門脈枝

別ト相交通スルニ由ル 但流注性肝癌發生必シ

テ血管及淋巴管ノ媒介ヲ要スルモノニアラスシテ直ニ

觸接ニ由リテ侵サレトアリ例之バ胃癌ノ直ニ肝

ニ傳ハルカ如シ

罕ニ特發性ノ胆管及胆囊癌腫ヲ見ル

外傷ノ本病誘因トナルナリ又胆石、筈形口癌ハ

刺戟ニ由リテ癌腫ヲ發スルナリ

肝臓腫

鑑別疾患

(一) 肝膿瘍

(二) 胆嚢擴張

(三) 澱粉肝

(四) 肝護膜腫及梅毒性肝臓腫

(五) 肝硬化及結核

(六) 黃疸肝

(七) 肥大型肝變硬

症

(八) 多房性包蟲

(九) 肝膿肉腫

(十) 幽門癌

(土) 腸腫瘍
 (土) 大網膜腫瘍
 (土) 腎腫瘍
 (土) 腹壁腫瘍

腫瘍

△解剖 癌腫結節ノ大小並ニ其數ニ甚キ差異アリ小帽針頭大ヨリ大ニ至小児頭大ニ達ス原發性癌腫之數ハ一個ニシテ肝右葉ニ發スルト多ク流注性癌腫ハ其數多クニテ結節小ナリ

癌腫結節ノ肝臟表面ニ存スル者ハ往々菌狀ニ隆起シ其頂點臍狀ニ陥没ス(癌腫臍)

肝臟ヲ截開スルニ癌腫結節ハ島嶼ノ如クニ散在シテ白色或ハ帶赤白色ヲ呈シ中心部ハ乾酪變性ニ陥リ或ハ軟化ス胆管癌ハ黃色或ハ綠色ヲ呈ス

△症候 多クハ顯著ノ症候ヲ呈ス其主徴ハ如ク

(一) 肝著シク増大シ之ヲ按スルニ大小結節アリ流注性癌腫ニ於テ其質硬固ニシテ圧痛アリ

(二) 圧迫症 癌腫ハ胆管若クハ血管(門脈及下大靜脈)ヲ圧迫スル腫瘍胆管ヲ圧迫スルニ由リテ黄疸ヲ發シ胆管全ク閉塞セザルニキハ胆血吐ラ發ス(二) 腫瘍ハ門脈及下大靜脈ヲ圧迫スル門脈侵サレハ門脈攣攣血ヲ未シ腹水ヲ發シ腎ハ脾腫腸管血及副枝血行ヲ塞シス腹水ハ多クハ中等度ナリ睪肥大ハ他ノ肝臟病ニ比シテハ少ナリ

(三) 轉移癌 肺腹膜及其他ノ臟器ニ轉移ス

(四) 癌腫性惡液質 本病毒物ヲ生産シテ所謂癌腫性惡液質ヲ形成シ患者栄養不良ニ陥リ衰弱ニ由リテ斃ル

(五) 消化障礙 食欲不進嘔吐鼓腸症等アリ

千已之重

肝臓腫

△経過 概不十五週乃至三十週

△豫后 不良

△診断 悪液質、肝の变化(増大、結節及疼痛)

黄疸、腹水等アリテ腺腫缺如セルキハ診断困難トス

胃、乳房、直腸又ハ生殖器、骨髄等ニ癌腫アリ

ルハ肝癌腫ハ流注性ナリ、確實ナリ故ニ肝癌ノ

△療法 對症的所置ヲ行フニ過キス

△第士一 肝臓包虫腫

△原因 包虫腫ハ多クノ臓器中殊ニ肝臓ニ占居

スルコト多シ本病ハ狗兎條虫ヲ有セル犬族ヨリ傳

染スルモノニテ常ニ犬ニ親接スル者ハ罹リ易シ

鑑別疾患
甲 單房性ト鑑
別スルキ者
一 肝硬化

本病ハ貧民多ク通達壯年ノ者ヲ侵ス本邦ニテハ

九列ニ多シ

△解剖 虫卵胃ニ入ルキハ胃液ノ為ニ其卵膜消

化シ遊離シシテ胎虫ハ脈ヲ経テ肝臓ニ達シ此所

於テ發育ス

肝ノ包虫腫ニ二種アリ

一 單房性包虫腫 ハ多ク存シ徐々ニ發育スル水胞ニ

シテ遂ニ人頭大ニ達ス囊腫壁ハ結締織ヲ以テ包

裹ヤリ中ニ蛋白質ヲ含マサル液アリ其外膜層

状ニ呈シ内膜層芽胞層ニシテ其内ニ卵膜アリテ魚類

ノ卵子ニ類似シシテ顆粒状ノ物質ヲ有ス是即チ包

虫腫ナリ、卵膜ヨリハ孳胞ヲ生シ其孳胞脱落シ

- (一) 肝膿瘍
- (二) 肝梅毒
- (三) 肝癌
- (四) 胆嚢腫瘍
- (五) 腎嚢腫
- (六) 腎水腫
- (七) 大動脈瘤
- (八) 考ヤ性筋膜炎
- (九) 多房性ト鑑別
- (一〇) 肝癌
- (一一) 肝硬化
- (一二) 肝粉質变性

テ液中ニ浮遊スルアリ嬢胞ハ更ニ原胞ヲ生ス
(一)多房性包虫腫ハ甚ク穿ミテ硬固ナル數多
ク腔室ヲ有スル腫瘍ヲ形成シ其内容膠様セルヲ
以テ往時ニ之ヲ肝臟ノ膠様癌ト誤認シタリ又
此各症室ハ包虫ニシテ往々其頭若クハ小鉤ヲ
見ル通常脾臟肥大ス
症候 (甲)單房性包虫腫ノ肝臟内部ニアリ
テ其形小ナルモ生前全ク症候ヲ呈ス(潛在性
肝包虫)或ハ時トシテ不定ノ消化症候ヲ呈スル過
キス
包虫腫若シ肝表面ニ存スル之ヲ接觸スルニ彈力
ニ富ミ柔軟ニシテ波動スルニ往々包虫震動ノ觸

知ス

包虫腫胆管若クハ門脈ヲ压迫シ遂ニ治スルカガ黄
疸又ハ門脈ヲ塞ク事アリ往々包虫腫ノ近隣臟
器ニ向テ破潰スルアリ即チ胆道腸胃腹膜内
尿管助膿腔心囊及肺膿等ニ穿孔ス
包虫腫化膿スルハ肝膿瘍ト同一症候ヲ呈ス
(乙)多房性包虫腫ハ硬固之腫瘍ニシテ波動ヲ
呈スズ圧痛アリ腹水脾腫及黃疸ヲ呈シ往々腸
胃出血アリ且常ニ皮膚ニ水腫アリトシテ
豫后 良シク破潰燦爛及化膿ヲ受スル恐リ
最モ危險ナル包虫腫ハ化膿及靜脈若クハ腹
腔内破潰ス

△**診断** 色赤腫、他ノ肝臟腫瘍若クハ膿瘍ト異
カ点ハ概シテ疼痛、缺如若クハ微弱ナル一彈力性
硬度、色赤振盪、腫瘍表面、蒂因滑澤、其及
近隣臟器ノ炎症、缺如、全身症候、僅微經過
ノ緩慢ナリ

色赤腫ヲ穿刺スルニ其液透明ニシテ蛋白質ヲ含
ム、比重一〇〇九乃至一〇一五ニシテ屢々琥珀酸ナリ
ニトシテ葡萄糖、ロイチン、チロシン、コリン、食塩當
量液中ニ鈉及層ヲナセル膜片アリ

△**豫防法** (一)犬種ヲ謀シテ犬ノ數ヲ減スルヲ要ス
ニ小兒等ヲ犬ニ近ヅラシムカラス、(二)犬ニ時々驅逐ス
ルヲ要ス、(三)清潔ナキサレ

野菜ヲ生食スベカラズ

△**療法**

對症の療法

外^時トシテハ外科的療法

鑑別疾患
(一)血性黄疸

○第七章 膽道之疾患

第一 膽道狭窄及閉塞

(鬱滯性黄疸、吸收性黄疸、

肝性黄疸、器械的黄疸)

△原因 胆道之狭窄若其閉塞之未及中胆液直其
上部之鬱滯性、胆液之甚多僅微之分泌之其
在以下之胆道之僅少之障礙アルモ容易之鬱滯性血
管及淋巴管之吸收ヤルモ黄疸ヲ生ス(器械的
鬱滯性、吸收性黄疸)

○胆道之狭窄若其閉塞之原因或胆道内或胆
道壁或胆道外ニ存ス

(一)胆道内原因中最モ多ク胆石ナリ寄生蟲(蛔
虫、絛虫)

其包莖、結核、口瘡、モ亦原因トシ、其他凝固シク
ル血液又ハ粘液ノ異物トナリテ胆汁流通ニ障礙スル
（二）胆道壁ニ存ル原因トハ胆道ニ加谷兒アリテ粘
膜、腫脹及粘液分泌旺盛ノ為ニ黄疽ヲ發スルモ、
（三）新生物及腫瘍ハ胆道ヲ外方ヨリ压迫シテ黄疽ヲ發
セシム

解剖 狭窄上部ニ於テ胆汁鬱滯シ胆管擴張ス

殊ニ胆管ニ近展擴張ス

症候 主徴ハ黄疽ナリ 一定量ノ胆色素血液ニ

混スル皮膚黄染シ、硫黄色乃至枸橼黄色ヨリ
綠黄色、帶黑黄色ヲ呈ス、眼球鞏膜ハ皮膚ニ先
テ黄染ス、硬口蓋、粘膜ハ他ノ口内粘膜ヨリモ甚

白ナルヲ以テ黄染顯著ナリ 皮膚及口腔粘膜ハ指頭若

クハ圧舌子ヲ以テ压迫シテ其部血液ヲ駆逐スルハ黄

染著明トス 患者屢々皮膚ノ痒痒ニ悩ム

最モ顯著シテ實地上必要ナル尿ノ黄染ナリ尿ヲ振

盪スルハ黄色ノ泡沫ヲ生ジ其泡沫ハ急ニ消失ス

○胆汁色素ノ反應試驗

（一）マルシヤル氏ノ法 試驗管ニ少許ノ尿ヲ盛リ之ニ

一二滴ノ法度下幾シ加ヘ然ル后之ヲ振盪スルハ胆汁

色素シテ各ナルモノハ美麗ナルスマラゴト綠シヨリス

（二）グタリン氏ノ法 試驗管ニ亜硝酸ヲ加ヘクハ硝酸

ハ少許ヲ入レ他試驗管ヨリシテ管壁ニ沿ヒテ注意シ

ツ、徐々ニ可檢尿ヲ加フルハ胆汁色素ヲ含ムル牛ハ試

驗液ト接際ニ於テ數列ノ色輪ヲ生ズ之ヲ上方ヨリ
挙クレハ綠色、青色、紫紅色、橙黃色、黃色
ノ順序ナリ

○膽酸ノ試験法 ベツシコーセル氏ノ法

尿ノ二三滴ヲ小磁製皿上ニ盛り、成ルヲ低度ノ温(攝
氏七十度ヲ超エカラス)ヲ以テ蒸發セシメ次テ之ニ蒸
糖溶液(五百倍)及濃厚硫酸各一滴ヲ点下シ更
ニ之ヲ蒸發セシムルニ胆酸ヲ含ムルハ莖花赤色ヲ呈ス
本病ニ於テハ肝臟增大シ其硬度ヲ増ス或ハ胆囊
増大ヲ觸知シ得ルナリ脾臟モ亦屢々腫大ス
胆液全ク腸内ニ流入セザルヲ以テ脂肪ノ吸收障礙セシ
腸内腐敗旺盛ス大便ニ灰白色トナリ秘結シ不快

ノ臭氣ヲ放ツ

消化障礙ハ甚ク多様ニシテ舌苔ヲ帯ヒ口内ニ苦味ア
リ食慾不振ニシテ殊ニ脂肪及屢々肉類ニ對シテ嫌惡
ヲ生ス

心動ハ時ニ後慢ナリ脈ハ健體ヨリモ其數ヲ減ス

体温モ亦屢々常温以下ニナル

全身症候 トシテハ体力及腦力減耗シ衰弱感
及精神不快ヲ覺エ皮膚及粘膜ニ少血シ又吐血吐
血及下血ヲ起ス

黄疸治サルハ予ニ神運症候ヲ及シテ体力減退シ
昏睡ニ陥リテ斃ルナリ是ハ一種ノ中毒症(胆血症)
豫后 原因ニ關ス

△**療法** 食物ノ攝生ヲ主トス、脂肪ノ攝取ヲ禁シ、便秘ニ下劑ヲ處ス

第二 加谷兒性黄疸

(胃十二指腸黄疸)

△**原因** 主トシテ腸胃加谷兒ヨリ来リ、暴飲、貪食

ニ由リテ胃十二指腸ニ急性加谷兒ヲ發シ延テ輸胆管ニモ亦加谷兒ヲ發シタルニ由ル

傳染病ノ経過中ニ在ルル黄疸及燐中毒ニ發スル黄疸

瘧細胆管ノ加谷兒ニ因ルモノナラニ結石等モ亦胆管

ヲ器械的ニ刺戟シテ其加谷兒ヲ發セシム 其他肝實質

ノ疾患及血液循環ノ障礙ニ由リテ本病ヲ發スルコトアリ

本病ハ幼年及中年ニ多シ

- 鑑別疾患
- (一) 血性黄疸
- (二) 胆石病
- (三) 化膿性胆管炎

△**症候** 通常腸胃加谷兒症候ヲ呈シ胃部膨滿、食思

缺乏、舌苔、悪心、嘔吐アリ便秘ヲ

頭痛眩暈、全身倦怠ヲ覺テ尿ハ濃厚、赤色トナリ

沈渣ニ富シ、時々熱発アリ二日後ニ皮尹黃染シ尿管

汁色素ヲ含シ糞便ハ淡色トナル 肝臟ハ增大シテ硬ク

且出痛アリ 徃々臍ノ肥大ヲ認ム

△**経過** 平均三乃至四週間

△**診断** 胃加谷兒ヲ伴フキハ診断困難ナラス、但胆管

狭窄又ハ閉塞ニ因ルル黄疸ト誤ルコトアリ

△**療法** 原因療法ヲ主トシ腸胃加谷兒ノ療法ヲ行

フ 最も必要ナル食餌療法ニシテ固形食ヲ禁シ水、

茶、鹽汽水、稀薄ナル果汁、牛乳、強汁等ヲ禁ス

藥研トシテ五%重曹水、〇、五%枸橼酸水又ハ二%
ニ%稀塩酸リモナドテ用フ、
便秘ニ硫酸アリキニシテ、硫酸曹達、人工カル、ス泉塩
精製酒石、大黃等アリ、
患者ハ就樽セシメ過劇ク運動ヲ避ケ且感冒ニ罹ル
ヤラ注意ス

食慾ヲ生スルハ濃厚ナル肉羹汁、粥、瘠肉等ヲ試ム、
脂肪ニ接スルニ澱粉性食物ヲ以テシ酒類ヲ禁ス
胆汁鬱積ノ極期ハ一日數回ニ分テリ、又ハ一日
一回一乃至二リ、テルノ水ヲ以テ浣腸ス(クル、氏法)
ゲルハルト氏ハ胆管口ニ存在スル栓塞子ヲ除去スル為
ニ胆嚢ノ压迫法ヲ行ヒ若クハ華、良、泥、氏電流(一極

ヲ胆嚢ニ極ク背部ニ貼シテ用テリ
頑固ナル皮膚癢痒ニ冷水、醋、枸橼汁、枸橼酸又ハ
曹達溶液一%石炭酸水等ヲ以テ皮膚ヲ洗滌シ甚ダ
頑固ノモノハ臭素ヲ内服セシム
温浴ハ患者多クハ爽快ヲ覺スルモノニシテ殊ニ曹達ヲ加
コハ效多シ

胆血症ニハト初ラ其ニテ多量ノ液体ヲ飲用セシメ或
ハ生理的食塩水ヲ皮下ニ注射ス

第三 ワイル氏病

原因 本病多クハ散在性ニシテ、往々小區域ニ流行
性ニ来リ、アリ屢々夏季ニ發シ三十歳代男子ニ多ク
屠者、皮匠、下水官ノ労働者等ハ之ニ罹リ易シ屢

ワイル氏病

不良ノ飲料水及不良ノ河水ヲ用ルニ由リテ本病ヲ發ス
ルヲアリトシテサレド其原因、傳染ノ徑路等尙ホ多ク不
明ナリ

解剖 肝及脾腫大シ殊ニ脾ハ柔軟ニシテ血液ニ富ム

肝細胞ハ濁濁ニシテ其核増加シ且分割セリ腎モ又増
大シテ出血スルヲアリ

症候 前駆症候ヲ作然戰慄高热ヲ以テ始リ同時
ニ眩暈倦怠及頭痛アリ次ニ精神昏惰、譫妄ヲ發
シ室扶斯如キ状態ヲ呈スサレド腸室扶斯ニ比レハ
其發症急ナリ發病ヨリ三日或ハ四日以内之ヨリモ早
ク黄疸ヲ發シ其黄疸急速ニ増劇シ同時ニ肝増大
テ過敏トナル尿ハ少量、蛋白質、硝子樣、上皮円柱

之有シ且屢血球ヲ含ム

体温ハ二三日間四百度内外ニ昇降シ亦四日乃至八日ノ
頃ヨリ漸次弛張シテ階段状ニ下降シ四日乃至六日ヲ經
テ常溫ニ復々此体温下降ト共ニ重症ノ一般症候及
肝脾、尿ノ变化消失シ黄疸ハ十乃至十四日間持続シ
タレ后徐々ニ消散ス

本症ノ多數ニ於テ下熱后三日乃至八日ヲ經テ再ニ發熱
シ次ニ諸症ヲ現ハシ来ルモノアリ

多クノ場合ニハ初ヨリ強キ筋痛(殊ニ腓腸筋)アリ
往々疾患ノ初期ニ肥肝ノ皮疔ニ紅斑ヲ生シ時トシテ
ハ顔面ノヘルペス及安魏那ヲ發ス

経過 三乃至四週間

〇五二頁

胆石病

△**診断** 主要之症候ハ黄疸、熱、脾腫、蛋白質尿、筋痛等ニ

△**豫后** 概シテ良

△**療法** 對症的 疾患初期、甘草内服ニ大ニ效

アリ尚木病ノ療法ニ就テ、加香兒性黃疸及腸管、扶斯ノ療法ヲ考スベシ

第四 膽石病

△**原因** 本症ハ老人及女子ニ多シ

胆汁ヲ鬱積セシムル原因ハ凡テ胆石ノ誘因トシ、腹部ノ緊迫及妊娠ハ胆石ノ發生ヲ助ク常ニ坐業ヲ取リテ運動スルコトガキ者ニ胆石多キ古ヨリ人ノ知ルトコナリ痛風、糖尿病、肥胖病、動脈硬化、癩

鑑別疾患

- (一) 胃痛
- (二) 四形胃潰瘍
- (三) 癌痛
- (四) 鉛毒痛
- (五) 腎石症

麻質斯ニ罹ル者、胆石ヲ發シ易シ

酒類(麥酒)肉及脂肪ニ富ムル食物ヲ食ル者ニ亦

胆石多シ飢餓胆汁鬱滯シ易キ以テ胆石ノ發生

ヲ促ストシテ若アリ

胆石病數土地ニ由リテ差異アリ本邦ニ於テ、欧米ニ

比シテ、甚稀有シ

△**解剖** 胆石、頻數ニ場所、胆嚢ニシテ肝臟内、胆

道ニ發シ、コトヤリハ稀ナリ

胆石、其大小ニ從ヒテ胆砂ト胆石トニ區別ス

胆砂ハ細小顆粒大胆石ハ砂粒大乃至鶏卵大ナリ

數ハ一個ヨリ數千個ニ至ル

胆石ノ形状ハ其數及發生ノ部位ニ由リテ差アリ多ク

(六) 肝神經痛

(七) 盲腸炎、盲腸

外腫、盲腸周

膜炎

(八) 内箱頓症

(九) 腹部大動脈痛

(十) 間歇熱

(十一) コレラ

(十二) 化膿性小腸炎

不正多稜形にして其面三四凸あり互ニ相接著ニ恰
モ手腕骨ノ状ヲ為ス但胆管ニ存スル胆石ハ管状若クハ
珊瑚樹状ヲ呈ス

结石ノ色澤ハ主トシテ胆色素ノ含量ニ関スコレステ
リンヨリ成ルル结石ハ殆ド白色ナリ其他ノ胆石ハ胆色
素ノ含量ノ多クニ依リテ金黃綠色乃至帶赤褐暗
色ヲ呈ス

胆石ノ硬度ハ其化学的成合ニ由リテ差異アリ石灰多
ク含ル者ハ其質硬固ナレ新鮮ナルコレステリン石
ノ如キハ指ニテ圧平シ得ベシ

胆石ノ重量 以前水上ニ浮遊スルヲ以テ胆石ノ特有
点ト看做セシモ其浮遊スル乾燥ニタルモノニシテ湿润ス

ニ沈降ス

胆石ヲ鋸断シテ之ヲ肉眼的ニ檢スルニ或ハ同質ノ造構ヲ有シ
或ハ皮層ト核ト異ナル造構ヲ有ス

胆石ノ化学的成合ハ主トシテコレステリン及胆汁色素
ニテ殊ニヒリルビンノ石灰及炭酸石灰ト抱合シタルモノ
屢々ハ少量ノ石灰及マクネミア、磷酸化合物、硫酸
石灰、炭酸ナトリウム、カリウム、遊離ニタルヒリルビン
硅酸、銅、マンガン、亜鉛等ヲ含ムアリ又粘液及上
皮等ヲ含ム

胆嚢及肝内胆管ハ如唇兒膿漏性炎症及擴張ヲ發
ス
胆石發生原因ハ未ク明カナラズセド恐クハ胆嚢及胆

管ノ粘膜炎症ヲ各ニ多量石灰及コレステリンヲ産
出スルニ由リテ胆石ヲ發生スルモノナラン

△症候 胆嚢若クハ胆管ニ胆石存在スルモ、多數場
合ニハ症候ヲ現ハスナク、剖檢ノ際偶然発見スル
カチカズ(潜在性胆石)

時トシテハ胆嚢内ニ存スル结石増大シテ腫瘍トナリ
之ヲ觸知シ得キトアリ或ハ病徴ヲ呈スルコトナクシテ
偶然胆石ノ排泄セラルコトアリ

胆砂腸内ニ移動シ或胆汁鬱積ノ為ニ膿膿菌
ノ腸内ヨリ胆管ニ進入スルヤハ粘膜炎ノ燃衝及潰瘍
瘍ヲ發シテ病徴ヲ呈スサレド结石其發生部位ニ
安坐スルヤハ多クハ病徴ナシ腹部ヲ觸按スルニ胆嚢

増大シテ肝縁ヲ超シ胆嚢内ニ多クノ结石アルヤハ其相
移動スル為ニ恰モ嚢内ニ胡桃ヲ觸ル、如キ感ヲ為ス、
肝臟ハ胆汁鬱積ノ為ニ増大ス

胆石移動シテ胆道ニ入レバ其抗抵ニ由リテ胆石疝痛
ヲ發ス胆石疝痛ノ誘因ハ身体ノ劇動、多量ノ撰食
妊娠、月経時並ニ精神感動等ナリ而シテ胆石移動ノ
原動力ハ胆管筋ノ收縮胆汁鬱積滯、腹壁ノ緊
張、腸蠕動等ナリトス

胆石疝痛起ル原因ハ胆石ノ為ニ排泄管ノ粘膜炎
刺戟ヤルハナリ故ニ胆石大ニシテ且尖銳ナルヤハ殊ニ
其疼痛強ク又胆石ノ狹隘ナル部位ヲ通過スル際
ニ疼痛強ク

亦痛發作ハ通常劇シキ疼痛ヲ以テ始マリ最モ屢
突然深更又ハ午後起ル其疼痛ハ別ルカ如ク刺スル
如ク或ハ裂クガ如シ患者之ガ為メニ甚ク興奮シ高
ク叫ビ或ハ呻吟ス疼痛ハ多ク右季肋部胆嚢
部限高シ胸部背部ニ放散シ時トシテハ右肩
脚四肢罕ク陰部ニ放散ス疼痛背部及右
側ニ於テ強キキハ腎石疼痛ニ類シ心窩ノミニ存
ズルキハ胃痛ト誤リ易ク食後直ニ発スルキハ
中毒ノ觀ヲ呈ス呼吸ハ淺表ニシテ胸式ヲ取リ
患者成ルベク疼痛部ノ压迫ヲ避ケル為メ右側
臥シ取リ膝ヲ屈シ体ヲ擡グルヲ常トス腹壁ハ一
般ニ緊張シテ板ノ如ク硬クナル

胆石疝痛ハ主トシテ筋肉ノ痙攣性收縮ニ由リテ発
ス此發作ト共ニ劇シク嘔吐スルコトアリ
發作強キキハ往々惡寒戰慄ヲ以テ熱發シ四十度
以上ニ達スルコトアリ其熱ハ通常數時間ニテ下降
スルモノナリ一日モ持流スルコトアリ疼痛發作重ナル
其熱型間歇性(肝性間歇性)
古ヨリ黄疸ヲ以テ胆石疝痛ノ主徴ノト古リ本
症ニシテ黄疸ヲ發セザルモノナキアラスト若シ黄
疸アラバソコヲ診斷上最モ必要ノ症候トナサレバカ
ク輸胆管ノ胆石ノ為メ閉塞スルキハ黄疸ヲ發
スルモノニシテ其強弱閉塞ノ度ニ関ス黄疸ハ疼痛
發作ノ初期ニ現ハルモノニアラスシテ屢々二十四時間

後ニヨリテ後ス

本病ノ診断ニ甚ク必要ナルハ、疼痛発作后、結石ヲ
換スルニアリ

尚茲ニ本病ノ症候及経過ヲ概括セシ本病ハ
急ニ青天ノ霹靂ノ如ク、右季肋部及心窩
ニ劇痛ヲ發シ、患者右側臥ニ取リ、身体ヲ俯屈ス
肝ハ腫大シ、胆嚢ニ甚ク圧痛アリ、嘔吐、食慾
缺如、頭痛ヲ發シ、悪寒、戰慄ヲ以テ、發熱、臍
ニモ墜下アリ、往々暫時ニミテ、黄疸ヲ發ス、疼痛
ハ一時緩解スルモ、暫時ニシテ、再ニ増劇シ、一日間
モ持続スルコトアリ、次ニ疼痛去リ、衰弱ヲ殘ス、
然ル后ニ大便変色シ、便中ニ結石ヲ証明シ得ベシ

経過 通常慢性

豫后 通常佳良

診断 主ニ徵候ハ、胆石、抽痛、肝及胆嚢ノ腫
大及過敏、消化障碍、熱發、發作後、黄疸
及便中結石ノ存在等ナリ

豫防法 胆石ノ新生ヲ防ク為ニ、胆汁ノ鬱滯
ヲ避クニ、即チ患者ノ生活ヲ整正ナラシメ、適宜
ノ運動ヲ命ジ、時々浴ヲサシメ、正規ノ便通ヲ得
ルヤウ注意セシメ、婦人ニハ、狹隘窄迫ナラサル衣
類ヲ著ケシム

療法 胆石ヲ溶解セシムル法ハ、胆石アルカリ性溶
液ニ溶解スルヲ以テ、アルカリ若クハアルカリ、鹽泉(亦

温キ良塩鑊泉水ヲ本病ニ用フ其他チユラト氏
製劑ハ口、フホルム、ホレー、油、甘草等モ稱用セラル
胆石痴痛散作鎮靜ノ為ニ麻酔藥即チ阿片、
塩酸モヒネ、ベラト、ナ、アンケヒリン、セナ、セケ、サリチ、
心酸劑等ヲ用テ、温奄法(乾及温)ハ時トシテハ
疼痛ヲ緩解ス又患者温浴スルハ大ニ輕快ヲ覺ル
コアリ

胆道ノ症ニサリチ、心酸劑、サロ、ン、テ、ヒ、油、
塩酸キテ、不導、防腐劑ヲ用テ除ニサリチ、心酸、
胆汁分泌劑ナルヲ以テ大ニ稱用セラル
時トシテハ手術ヲ行ヒテ結石ヲ除去スルコトアリ
(胆嚢切除術)

○第八章 腹膜ノ疾病

第一 腹水

△原因 (一) 鬱血性腹水 心、肺諸病ニ於ケル全靜脈
血圧亢進 若クハ肝、諸病ニ於ケル門脈血圧亢進ニ
由リテ腹腔内液体蓄溜ス

(二) 燃衝性腹水 急性及慢性ノ腹膜諸病ニ由リテ
發ス

(三) 惡液質性及腎臟炎性腹水 腎炎及衰弱
ヲ來ス諸病ニ發ス

△解剖 鬱血性腹水ノ液ハ全ク澄明、黄色或ハ
綠黄色ニシテアルカリ性反應ヲ呈スクインケ氏漏
出液中ニ淋巴球、腹膜内皮及赤血球ヲ証明シタリ
コト復水

（月）
燃衝性腹水、液、纖維素、絮狀物及大形凝固物ヲ含ム外、膿球、血球、癌腫細胞及各種細菌ヲ含ムコトアリ

乳糜性腹水及脂肪性腹水、トハ乳糜性又ハ脂肪性液体、腹腔内ニ蓄溜スルモノニテ前者ハ主トシテ乳糜ヨリ成リ後者、脂化シタル細胞ヲ混和ス

△症候 腹腔内ノ少量ノ滲出ニ液ハ生前之ヲ診知スルコトヲ得ズ、他覺的ニ証明シ得ル其千立方仙迷以上ノ時ナリトス、少量ノ液ハ軀幹最付位即チ骨盤内ニ蓄溜スルヲ以テ直ニ之ヲ認知スルコトヲ得ズ此場合ニハフオンバニベルゲル氏ノ法ニ從ヒ患者ハ骨盤部ヲ高キニ液体ヲ骨盤内ヨリ腹部ノ上方ニ移動セシ

メテ横ニ或ハ患者ヲシテ膝肘位ヲ取ラシメテ液体ヲ前腹壁ニ移動セシメテ其濁音ヲ検スベシ

腹水多量ニ蓄溜スレハ腹部ノ形状、体位、変換ニ由リテ屢ニ變化スルヲ見ル即チ患者仰臥スレハ側腹部膨隆シテ腹壁前面ハ扁平トナリ豎立スルハ腹部ノ下半部膨滿ス、臍ノ多クハ消失シ罕ニハ臍狀若クハヘルニア狀ヲ為シテ前方ニ突出ス腹部ノ皮膚ハ甚シク緊張シ蒼若白色ヲ呈シ光澤ヲ放ツ往々腹壁ノ下方ニ於テ皮膚層ニ断裂ヲ生シ初メハ紅色若クハ帶青紅色ノ線ヲ現シ後ニ癩痕様ノ白線ニ變ルコトアリ（所謂妊娠白線）

若シ腹水持重スレハ皮下靜脈ハ擴張シテ蛇行狀ヲ呈ス屢々下肢及陰部ニ浮腫ヲ來シ腹壁ノ皮膚ニ亦浮腫

ヲ見ル

觸診スルハ波動ヲ觸知シ得ルモノモトモ液体量甚ク多ク
ニテ腹壁緊張シタルハ波動僅微トナリ或消失スル所
打診スルニ蓄液部ニ重濁音ヲ發シ腸ノ存在部ニ
鼓音ヲ發ス濁音部ノ境界ハ水平線ヲ為シテ
常ニ波状ヲ為シ是腹水ノ多數ノ腸蹄係間ニ嵌入
スル為ナリ液ハ常ニ最低位ニ集マルモノナルヲ以テ体位
ノ变换ニ從ヒテ濁音部ノ境界ニ变化ヲ生ス

経過 數月乃至數年

診断 腹部膨滿波動體位ノ变换ニ由レル
打診音ノ变化等ニ由ル既ニ腹水ノ存在ヲ認ムルヤ
ハ毎回其原因ヲ探ルヲ要ス

鑑別スルニキハ卵巢囊腫ナリ

豫后 多クハ不良

療法 原因療法ヲ試ムニシ

本症ニ下劑利尿劑及発汗劑等ヲ用フ殊ニ下劑
ハ效アリ

藥劑的療法效ヲ奏セザルヤ穿腹術ヲ行フ

第二 腹膜炎

- 一) 慢性腹膜炎
- 二) 腹水
- 三) 肝硬化
- 四) 門脈血塞
- 五) 腹膜癌腫

原因

本邦に於ける慢性腹膜炎は殆ど結核性にして、結核菌、腹膜に侵入するに由りて起る。菌は血管又は淋巴管より侵入し或は近接する臓器、結核性炎症より觸接蔓延し、小兒及び年殊に本病に罹り易く、性、大に關係あり

丙 慢性腹膜炎

(結核性腹膜炎)

解剖

腹膜の變化は尤も三様あり

- 一) 粟粒結核
 - 二) 塊状若くは成形性腹膜炎
- 日本に於ては甚だ屢し、此種、腹膜結核を以て、本症は纖維性渗出液を生じ、腹膜、腸胃、肝脾、淋巴腺等、腹膜腔内、各臓器互に癒着するに於て、之は腹壁と間にても亦癒着

ラ起ス此渗出液、凝固シテ結締織ニ変化シ塊状物
ヲ形成シテ腫瘍如キ觀ツル事(假性膿瘍)高度、
者ニ至リテ、腹膜腔内全臓器悉ク相癒著シテ一
塊トナルコトアリ

(三)腹水性腹膜炎

腹膜炎他、肝臓、心嚢等ノ滲液膜モ亦粘着性炎ニ症
ヲ發ス(滲液膜結核)

△症候 ベルツ氏ニ依リハ成形性腹膜炎ハ尤ノ三五歳ヲ

- 有ス(一)腹部同等ニ膨滿シ、臍窩其頂点ヲ為ス
(二)全腹壁多少ノ硬固トシ
(三)疼痛少クシテ甚ク硬
固ナル大小結節アリ
圧痛ハ多クハ顯著トシ、自發痛モ亦然リ嘔吐及吃

逆ハ通常缺如シ、便通ハ多クハ秘結ス

本症ノ毎日二三回下痢ヲ持続ルモノ腸結核ノ疑アリ
腹水ハ梅毒血性腹水ノ如ク流動性ナラリ或ハ包
裹性ニシテ液ノ流動セサルコトアリ

腹部ヲ接觸スルニ大網膜肥厚、緊縮シテ胃下ニ於テ
横ニ走ル腫瘍如キ觀ツルコト腸間ニ於テモ亦癒着
性結締織増殖為塊物或ハ索状物ヲ現ス(假性
腫瘍)

熱ハ缺如スルコトアリ急性汎發性腹膜炎ニ固有ナル
ニ付カニ排泄ハ本症ニ於テハ著カラス、腺ハ時トシテハ
増大シ肝、或ハ増大或ハ萎縮ス
往々肋膜炎及心嚢炎ノ同時ニ存スルコトアリ甚ク罕

三、腸炎若シハ腸膜炎ニ併發ス(結核性多量性漿液性)

△診断 腹部硬固、結核存在等ニ由リテ本病

△診断困難トラス

○腹水性腹膜炎ト腹水ト鑑別ハ往々困難ナリアリ
リ(母氏)斯ノ如キ場合ニ常ニ胸廓背部ヲ精診シテ
肋膜炎ハ痕跡ノ有無ヲ檢シ其痕跡アルモノハ大ニ結核
性ノ疑ハモトナセリ

△経過 慢性

△轉帰 多クハ不良ナレバ他ノ結核ニ比シハ良ナリ往々

持続性又ニ時性ニ治癒スルコトアリ

△療法 患者ニ滋養食品ヲ與ヘ新氣ニ充テ氣中ニ

於テ適宜ノ運動ヲサセムベシ、内服薬トシテ、クシホ
ソ止若クハグアヤコルヲ與ヘ、成形性腹膜炎ニ沃
度加里ヲ用テ腹部塗布料ニ肝油若クハ肝油八十、
蘇合香二十ノ合劑或ハD.C.バルサム二五〇トルボン
廿二五〇酒精五〇〇薄荷油二〇ノ合劑並ニ
十%グアヤコル肝油十%ナフタリン、テハリン加里石
鹼(一日量五〇)等ヲ用テ

疼痛ニハ莖若軟膏ヲ用ヒ下痢ニハ阿片又ハ次硝
酸若シテ鉛ヲ與ヘ便秘ニハ浣腸ヲ行ヒ或ハ大黃カス
カテサシテ流動越致斯ヲ用テ

多量ノ滲出液アルハ穿腹術ヲ要スルコトアリサレト本
症ニ於テハ往々腸管ト腹壁ト癒着セルコトアルヲ以テ

穿腹術ハ危険ナキアラス、
外科的手術ニ由リテ疾病ノ治愈スルコトアリ

(一) 腸腫瘍

(1) 癌腫

(2) 良性新生物

(二) 腸出血

(三) 腸穿孔

(四) 腸閉塞

(五) 腸神經性疾病

(1) 運動性神經障礙

(2) 知覺性神經障礙

(腸痙攣)

(3) 反射性神經障礙

(粘液血痢)